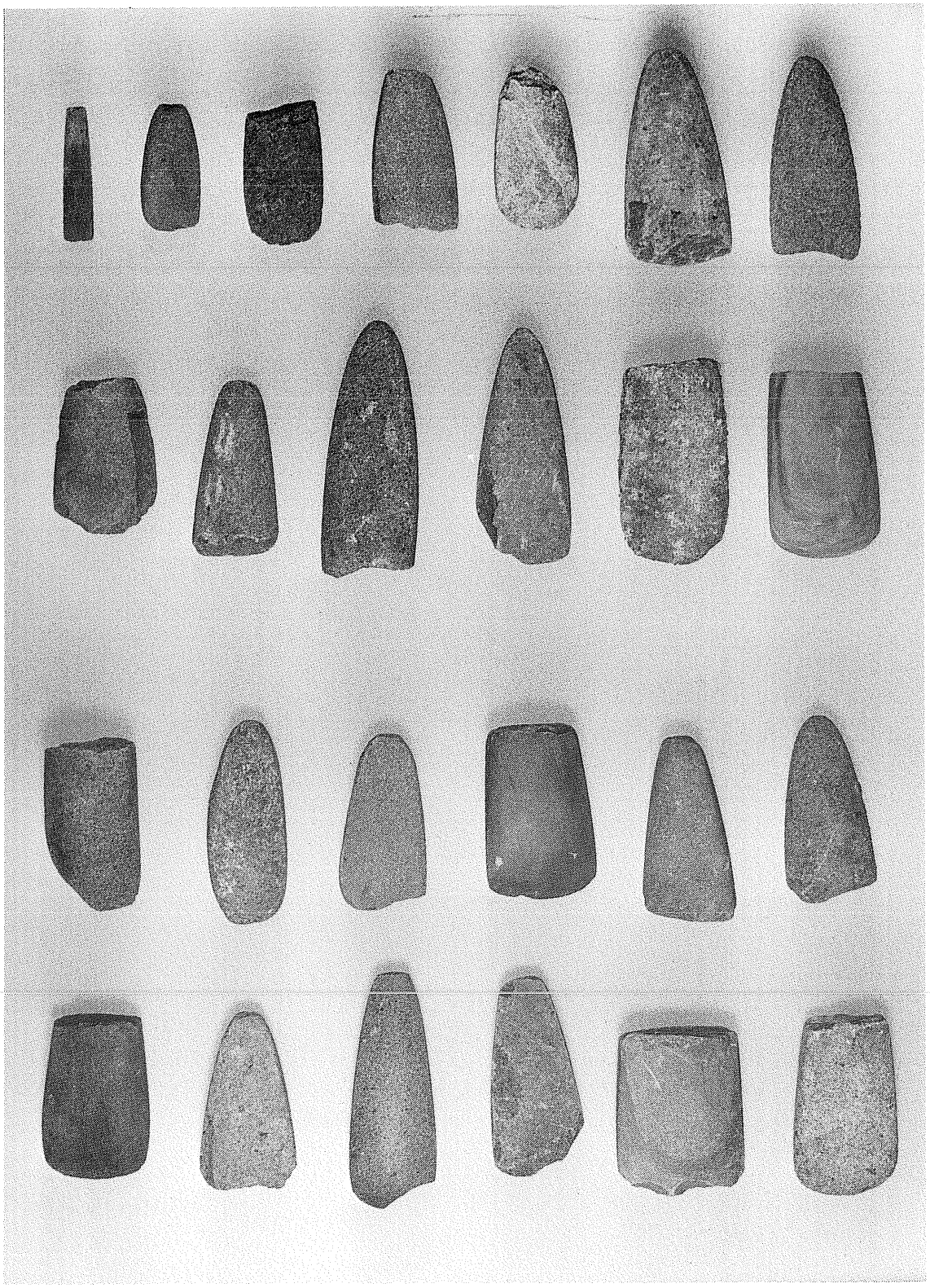
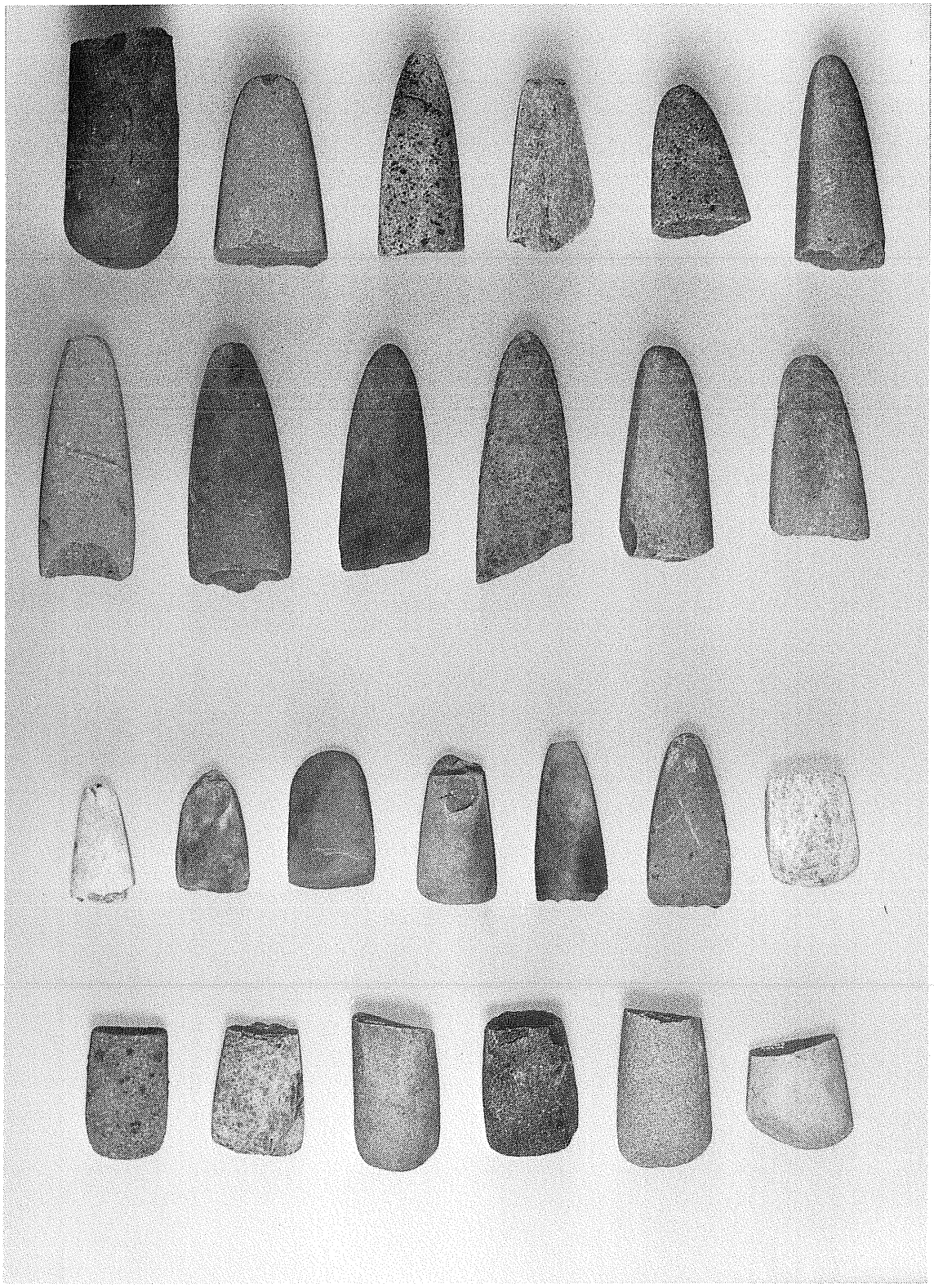
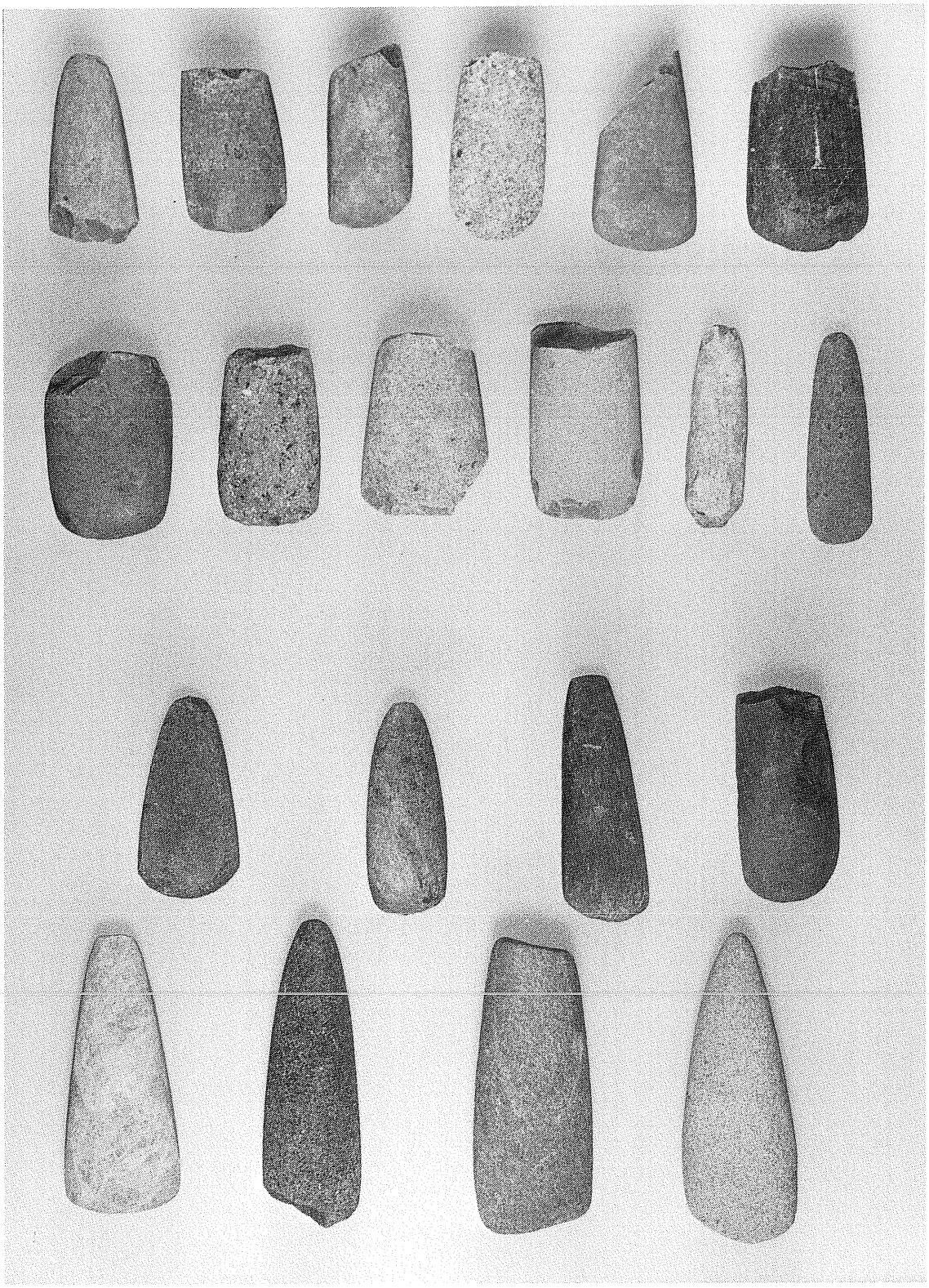


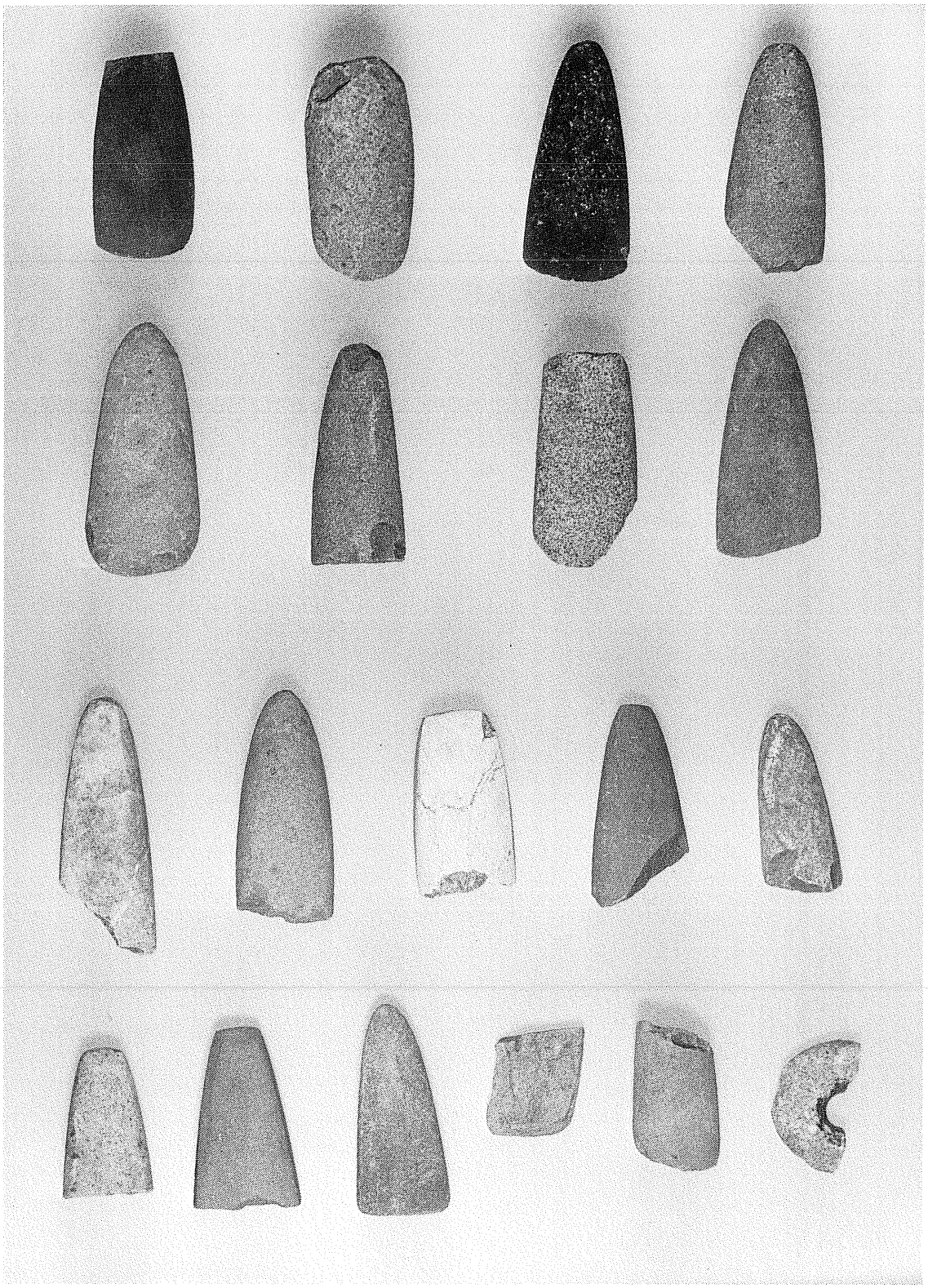
図版89　遺構外出土石器



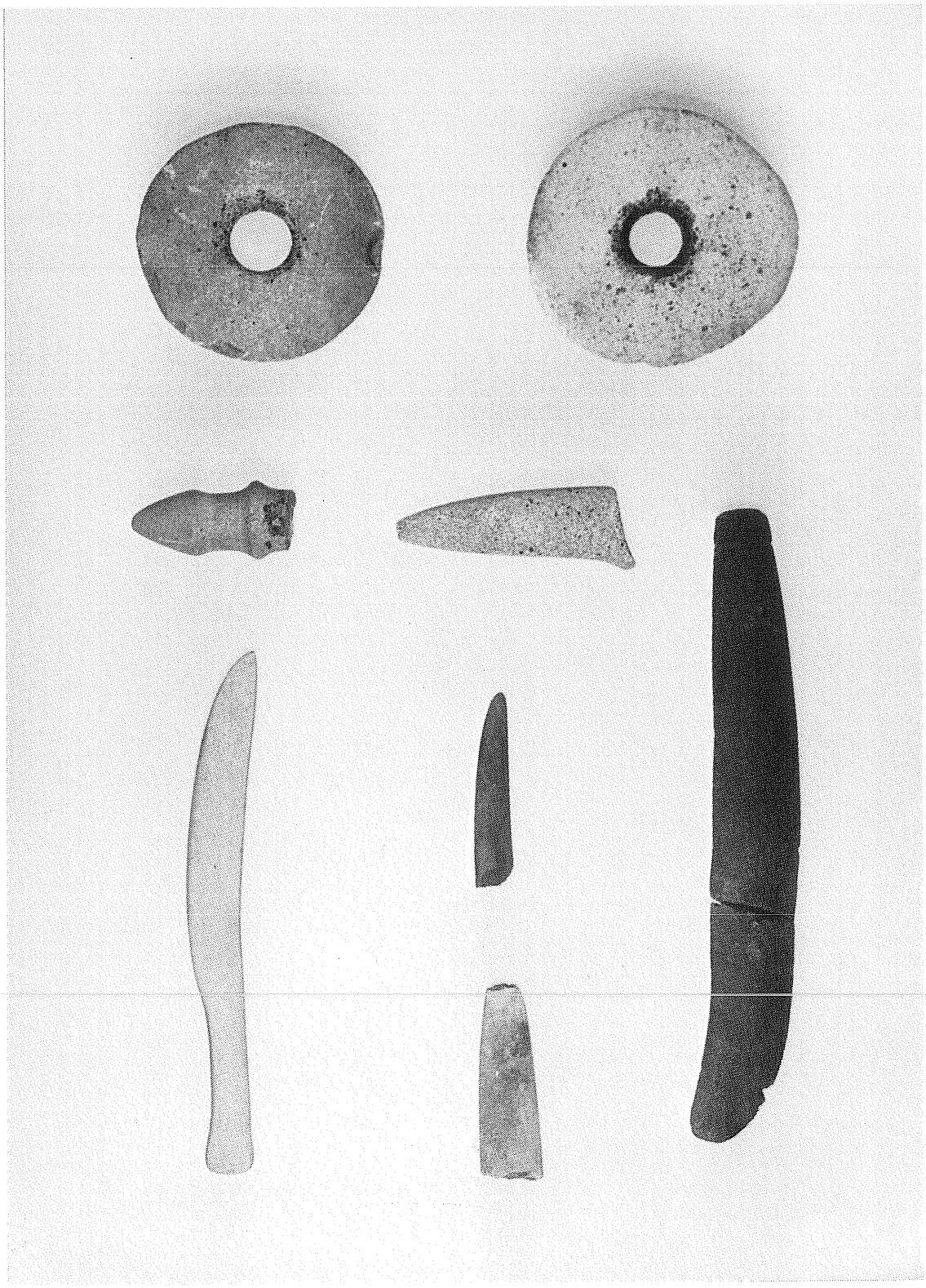
図版90　遺構外出土石器



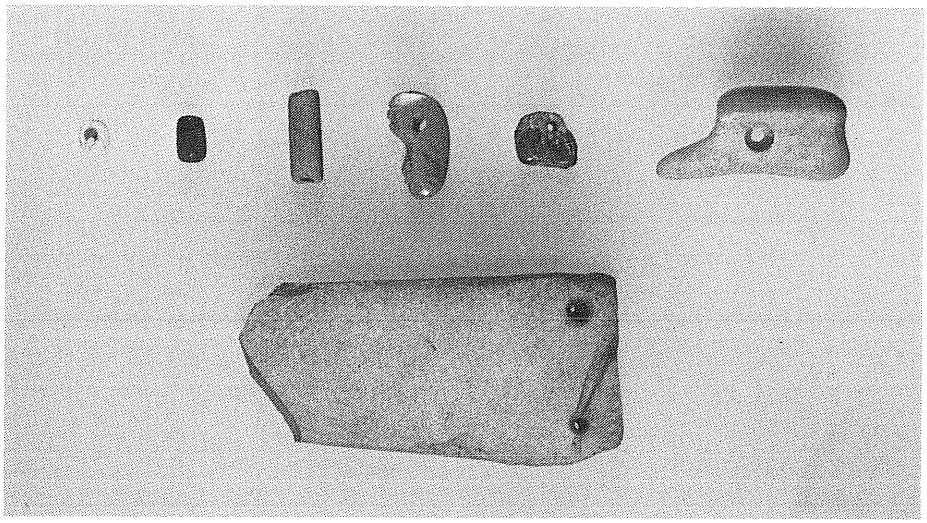
図版91　遺構外出土石器



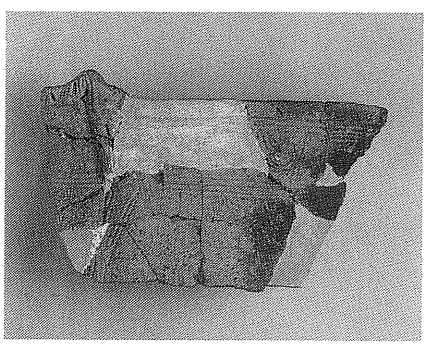
図版92　遺構外出土石器

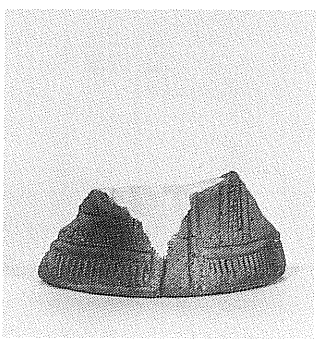


図版93　遺構外出土石器

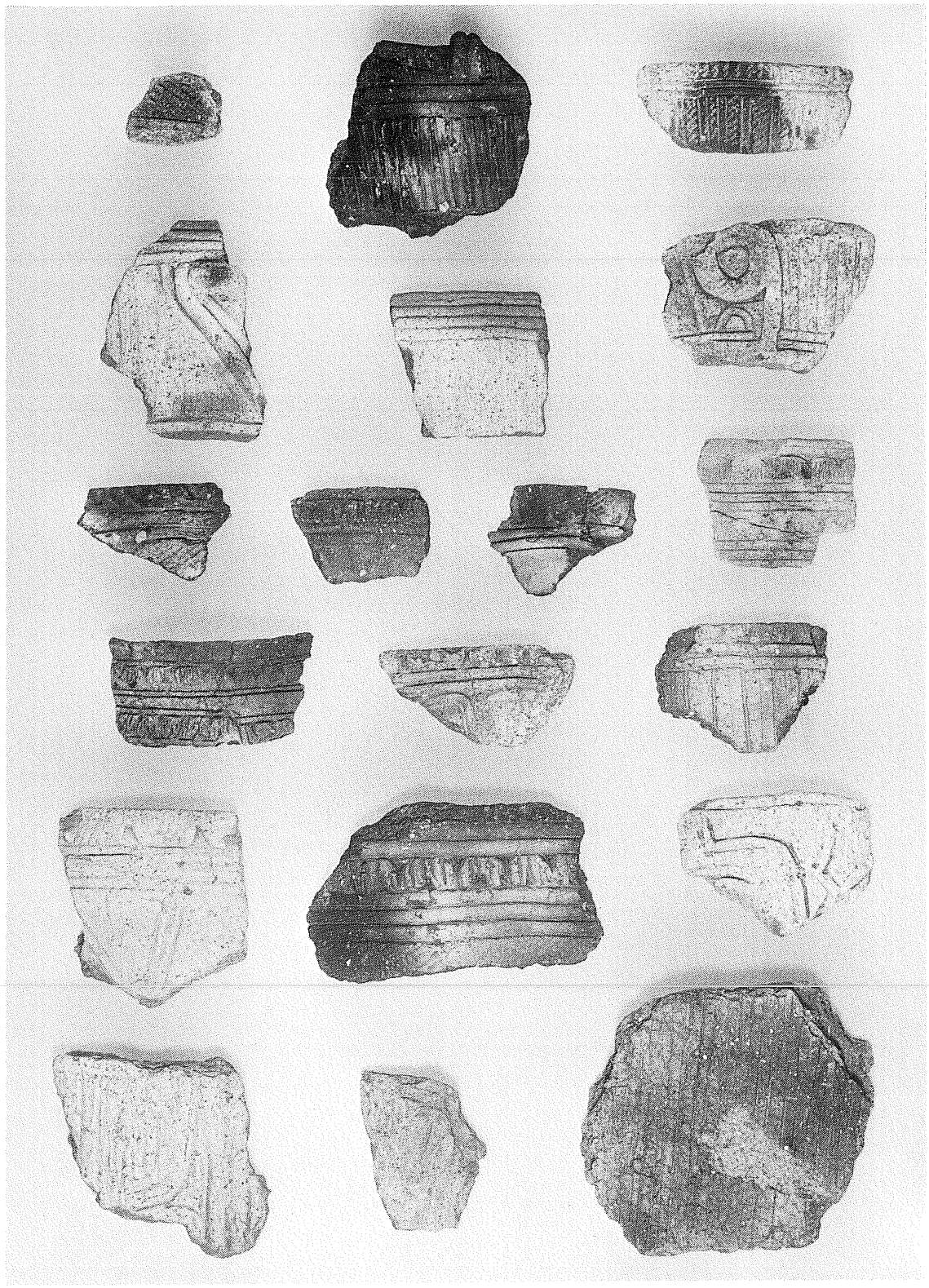


石製品

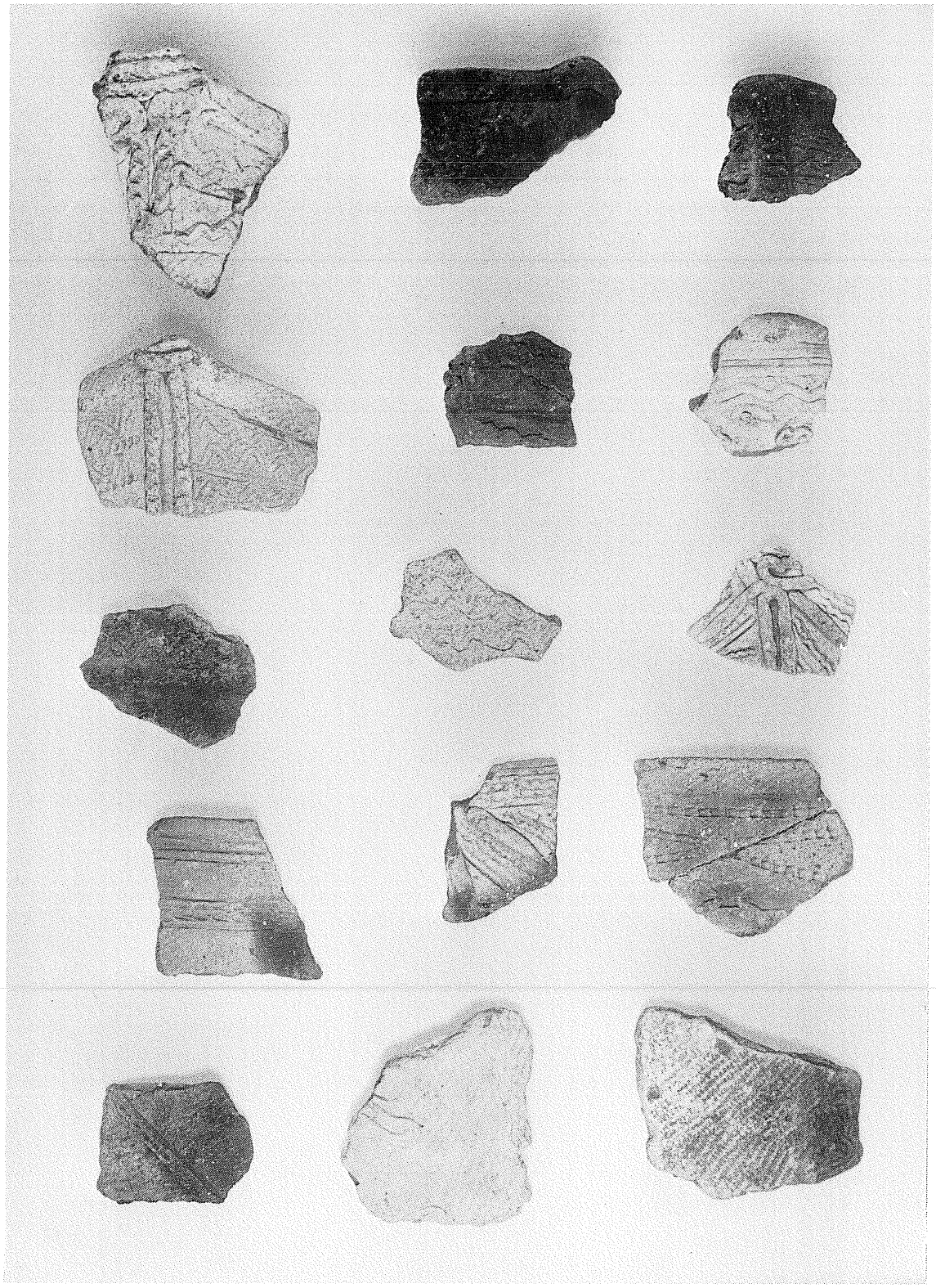




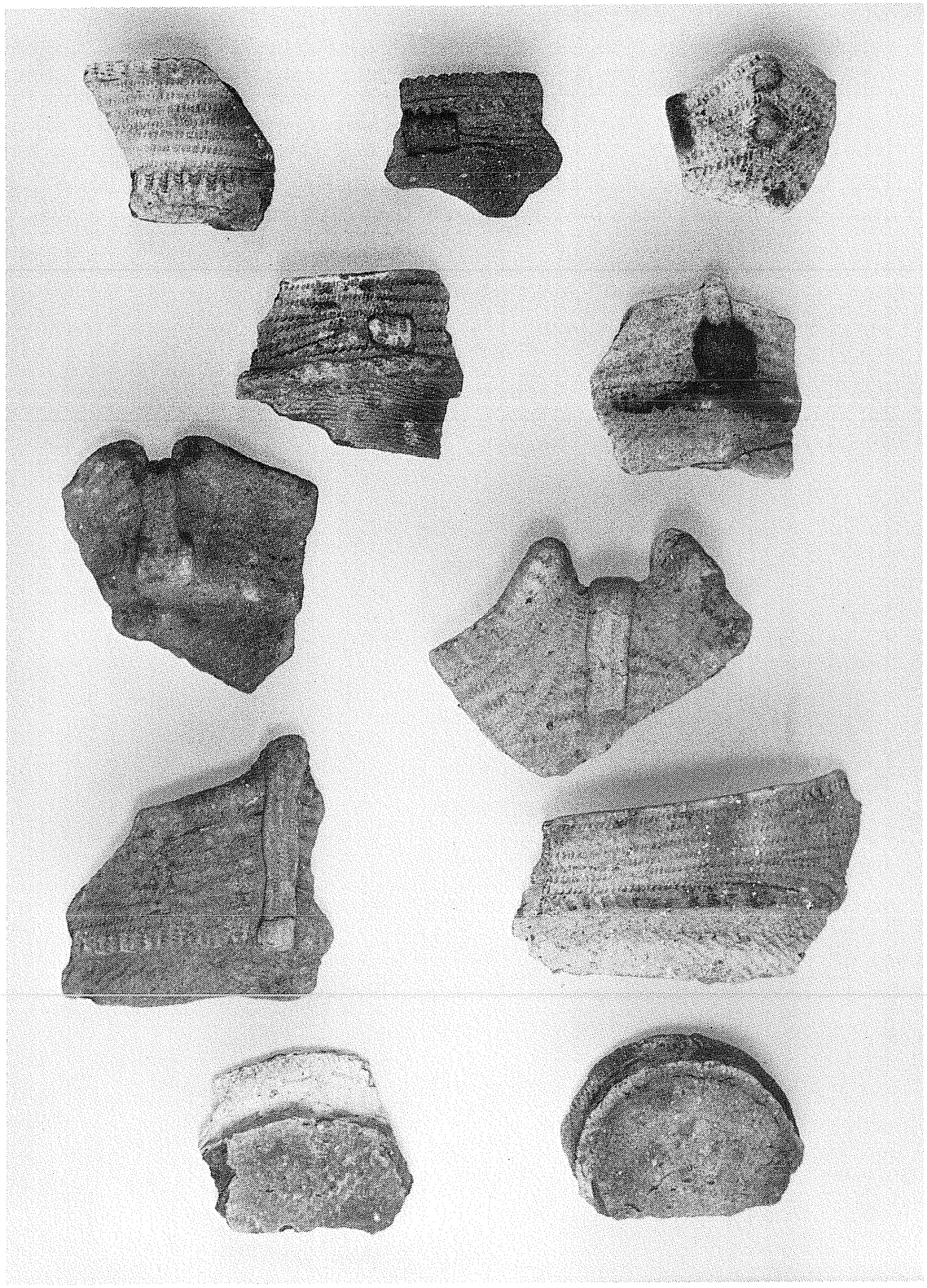
坂ノ上Ｆ遺跡出土土器



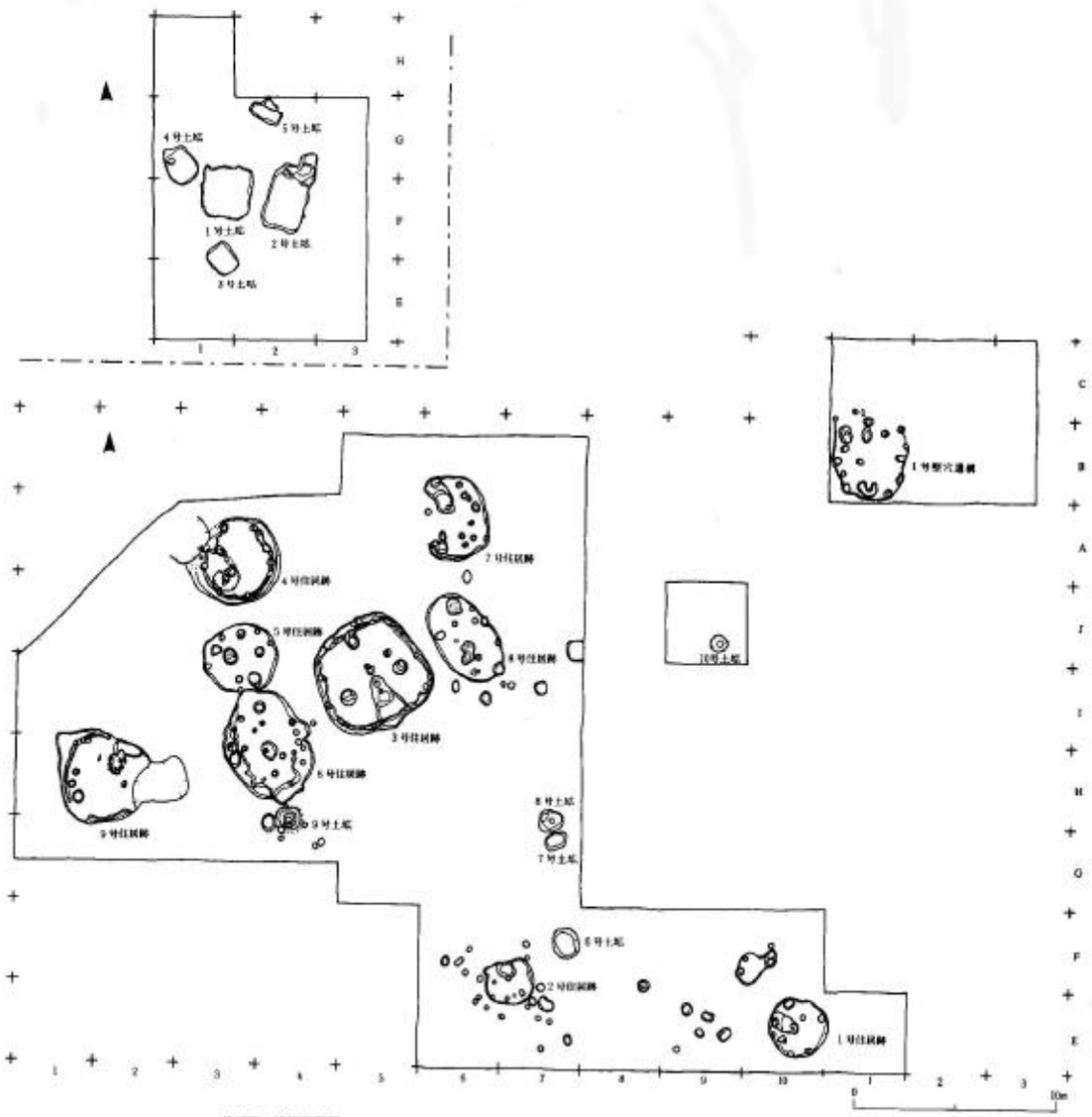
図版95　坂ノ上Ｆ遺跡出土土器



図版96　坂ノ上Ｆ遺跡出土土器



図版97　坂ノ上Ｆ遺跡出土土器

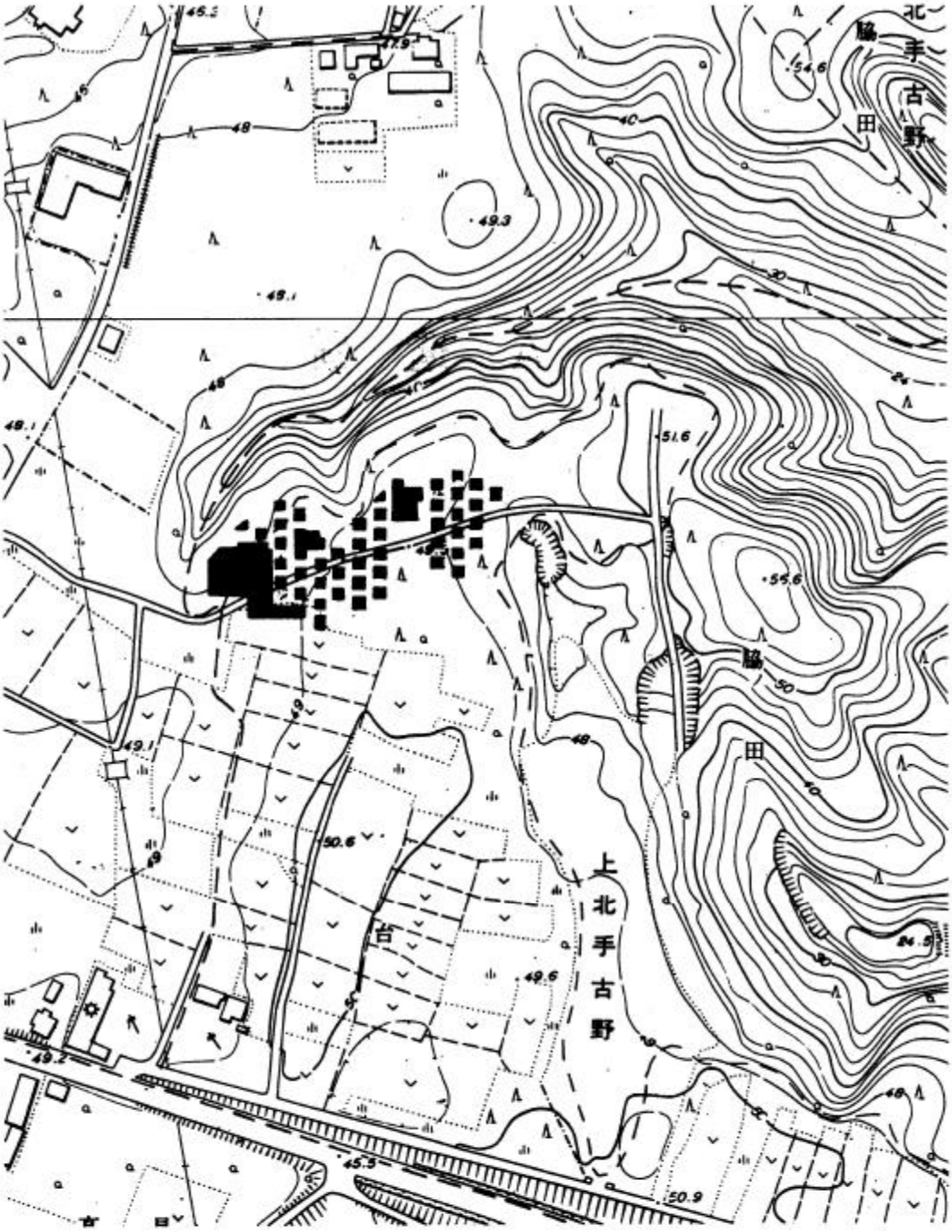

4号土坑
5号土坑
1号土坑
2号土坑
3号土坑
1号竪穴遺構
2号住居跡
4号住居跡
5号住居跡
3号住居跡
6号住居跡
9号住居跡
9号土坑
8号土坑
7号土坑
10号土坑
6号土坑
2号住居跡
1号住居跡
10m

第35図　遺構配置図

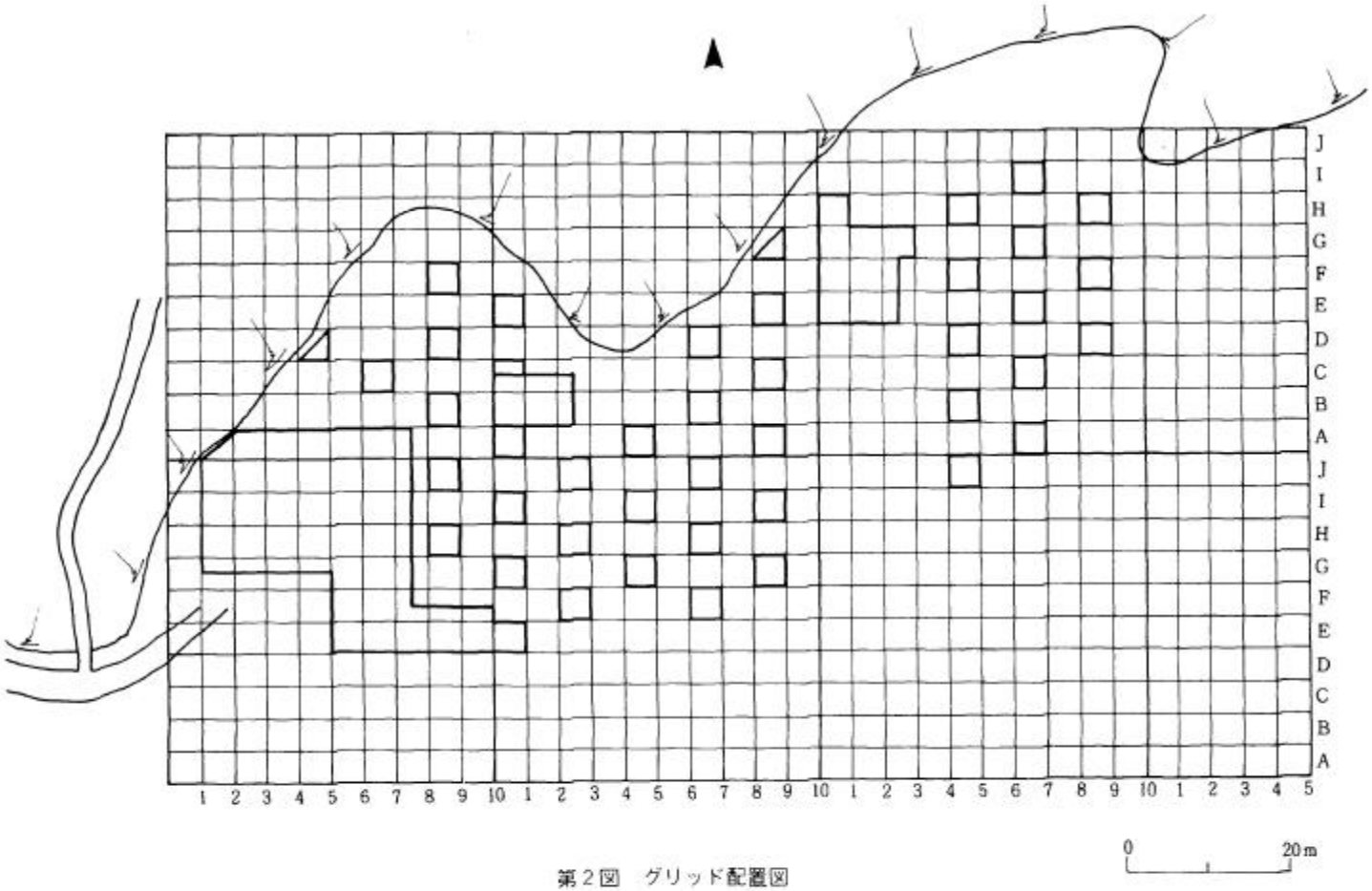
第215図　調査区中央部遺構配置図

第216図　遺構配置図

台　A　遺　跡



第１図　遺跡周辺の地形


J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5
0
20m

第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

国道13号線の御所野三叉路から南東方向へ約600m 進み、さらに北東方向へ約250m の所に東から入り込んだ沢がある。遺跡はその南側台地に位置する。

遺跡は主に縄文時代中期のもので、検出遺構は、竪穴住居跡、土坑などである。遺跡の北西 400 m の所には縄文時代晩期の地方遺跡がある。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

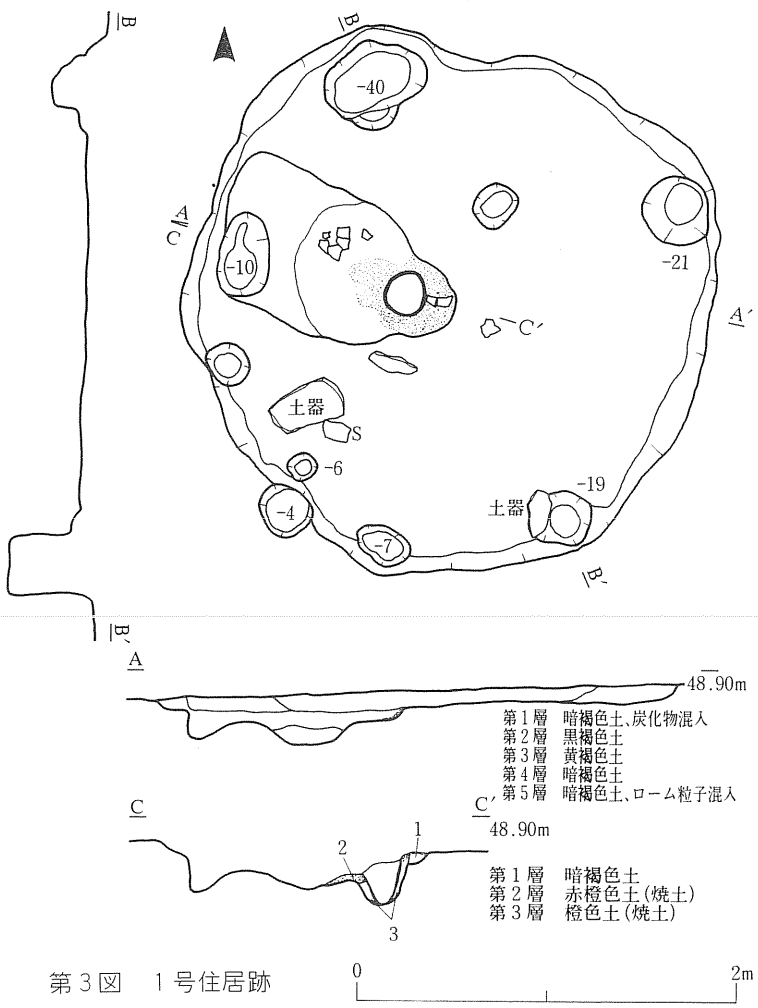
調査区の南側で検出された。

プランは長軸2.8m 、短軸2.7m のほぼ円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは7個検出されており、主柱穴と考えられるものは深さ15cm以上のピットである。炉は西側に位置しており、土器埋設部、掘り込み部、掘り込みからなる。土器埋設部には深鉢形土器の胴部を正立して据えている。土器埋設部の周辺、および掘り込みの底面は熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第14図1～3、第18図20～26）

1は炉埋設土器である。無文で器面にはケズリによる整形がみられる深鉢形土器である。二次加熱で赤変している。2は床面から出土した底径が小さく、口縁部が内湾する鉢形土器である。口縁部に一条の沈線がめぐり体部は沈線区画の磨消し帯が横に展開する。3はピットから出土した。口縁部がわずかに外反し、胴部が膨らむ深鉢形土器である。沈線区画の磨消し帯が「の」字状に展開し、沈線区画内に縄文を充填して



第3図　1号住居跡

いる。第18図20～26は覆土中より出土した。いずれも沈線区画による磨消し帯を施している。

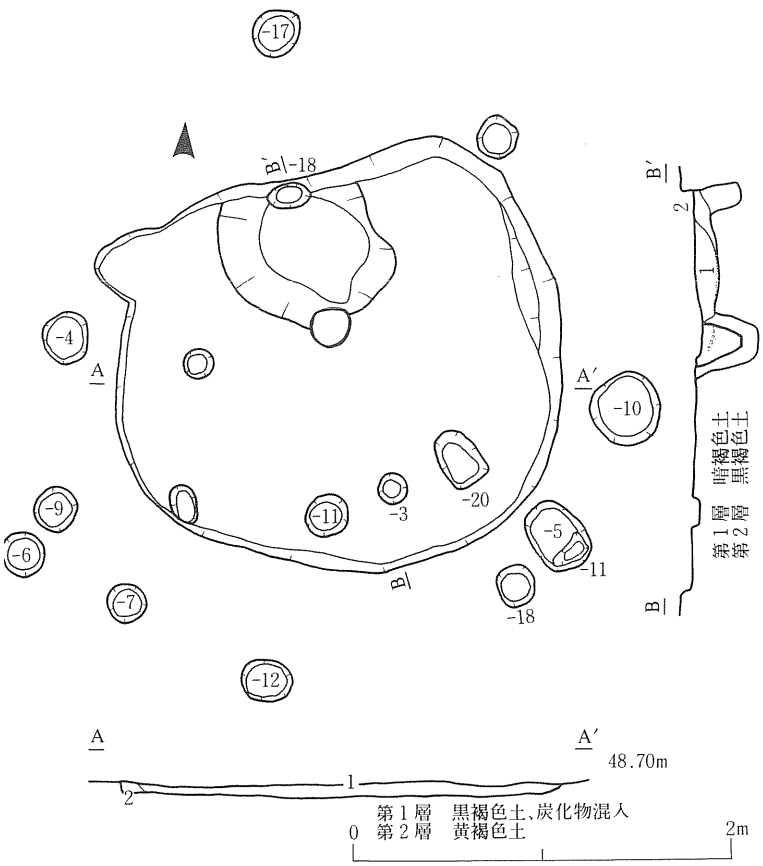
石器（第29図26～28）

26～28は円・楕円形を呈する磨石である。

2号住居跡（第4図）

調査区の南側で検出された。

プランは長軸2.3m、短軸2.2mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは7cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは6個検出されているが主柱穴は不明である。また屋外にも多くのピットが検出されている。炉は北側に位置しており、土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部には深鉢形土器を正立して据えている。掘り込み部の底面は熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。



第4図　2号住居跡

出土遺物

土器（第14図4・5）

4は炉埋設土器である。底部からゆるく内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する深鉢形土器である。胴下半部には沈線による区画文がまわり、胴上半には沈線区画による逆「C」字状の文様が展開する。沈線区画内に縄文を充填している。5は覆土から出土した深鉢形土器である。地文はLRの単節斜縄文（縦回転）である。

土製品（第24図1）

1は球状の土製品である。厚さ9mmで中は空洞である。表面には円形の小さな刺突を多数施している。

3号住居跡（第5図）

調査区の中央で検出された。

プランは長軸5.5m 、短軸5.4m の隅丸の台形を呈する。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁直下に幅15～25cm、深さ約12cmの周溝がめぐっている。ピットは大小合わせて31個検出されている。深さ15cm以上の壁柱穴11個と柱痕跡を有する深さ70cm以上の大形柱穴３本が主柱穴と考えられる。炉は同位置で２時期の作り変えが認められた。いずれも土器埋設部、掘り込み部、掘り込みからなるものである。旧炉は土器埋設部に底部を欠く深鉢形土器を倒立に据えている。新炉は旧炉設置位置よりやや北側に、旧炉の土器埋設部と深鉢形土器を新炉の土器埋設部として利用し、底部を欠く深鉢形土器を正立に据えている。周辺は熱を受け赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第14図６、第15図７・８、第16図13・14、第18図27～39、第19図40～51）

６は旧炉の埋設土器である。口縁部はゆるく外反し、大きな波状を呈する。口縁下にゆったりした波状の沈線を一条めぐらしている。体部は沈線区画の磨消し帯によって文様が展開される。７は新炉の埋設土器であり、倒立して設置されていた。胴部が膨らみ、口縁部がゆるく外反する深鉢形土器である。胴下半部には波状の沈線が一条めぐる。体部は沈線区画の磨消しによって「Ｈ」状文を施し、その両側に「Ｓ」字状文を配している。さらにその間には小さな区画文を配し、刺突文、列点文を施す。８は炉から出土した口縁部が外反する深鉢形土器である。沈線区画と磨消しにより楕円状に区画した文様を展開させている。27・28～31は地文がＬＲの単節斜縄文（縦回転）でありＳ字状結節がみられる。32～34は口縁部破片である。ゆるい波状口縁をなし、口縁下に波状の沈線が一条めぐる。体部には沈線区画の磨消し帯が施される。36～43は沈線区画の磨消し帯によって文様が構成される。44・45は細い沈線により文様を施し、45は沈線間に縄文を残している。

石器（第28図１～９、第29図29・30）

１・２は無茎、３は有茎の石鏃である。４は縦型の石匙、５・６はヘラ状石器である。７は先端部に刃部をもつ掻器、８・９は側縁部に刃部を有する削器と考えられる。29は凹石、30は石皿の破片である。

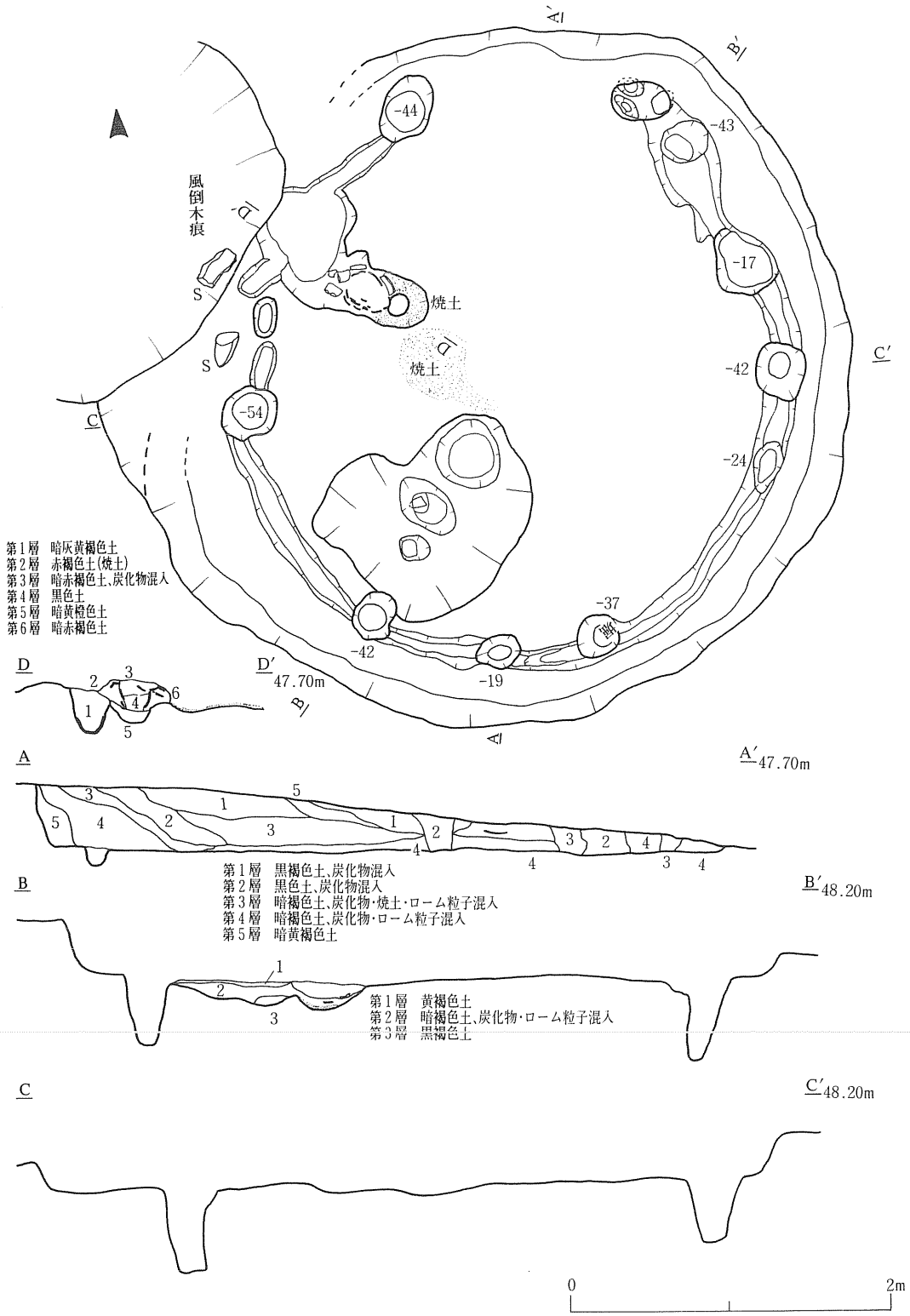
４号Ａ・Ｂ住居跡（第６図）

調査区の北側で検出された。同位置での建替えが認められ、旧住居に貼床を施し、拡張して新住居を構築していることが判明した。以下、新住居をＡ住居跡、旧住居をＢ住居跡として述べる。

Ａ住居跡：北西部が風倒木痕によって削平されている。

プランは長軸4.3m 、短軸4.2m のほぼ円形を呈する。確認面からの深さは中央部で28cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは13個検出されている。炉は北西部に位置しており、土器埋設部、掘り込み部からなる。土器埋設部の周辺は火熱をうけて赤変しており、鉢形土器が正立に据えられている。床面は中央部、壁際に貼床が施されている。全体的に平坦で堅くしまり良好である。

Ｂ住居跡：Ａ住居跡で検出された貼床を除去したところ、幅18cm、深さ10cmの周溝と、南西部に


風倒木痕
焼土
焼土
-44
-43
-17
-42
-24
-37
-19
-42
-54
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
S
S
第1層　暗灰黄褐色土
第2層　赤褐色土(焼土)
第3層　暗赤褐色土、炭化物混入
第4層　黒色土
第5層　暗黄橙色土
第6層　暗赤褐色土
47.70m
47.70m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　黒色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第4層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層　暗黄褐色土
48.20m
第1層　黄褐色土
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　黒褐色土
48.20m
0
2m

第6図　4号住居跡

炉が検出された。

プランは、壁がＡ住居跡に壊されており、検出された周溝から計測すると長軸約３.７ｍ、短軸約3.5m のほぼ円形を呈する。炉は掘り込みが残存するのみである。床面は若干凹凸があるが良好である。

出土遺物

土器（第15図10～12、第16図15・16、第19図52～62、第20図、第21図83～94）

10はＢ住居跡炉埋設土器である。内湾しながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する。地文はＲＬの単節斜縄文（縦回転）である。９はＡ住居跡炉の埋設土器である。地文はＬＲの単節斜縄文（縦回転）である。16はＡ住居跡炉から出土したキャリパー形を呈する深鉢形土器である。沈線と磨消し帯とで文様を施し、体上部は「Ｓ」字状文を横に、体下半には「∩」状の文様を展開させる。11・12・15は覆土から出土した。11・12は壺形土器である。15は沈線と磨消し帯で文様を施す深鉢形土器である。52～95も覆土から出土した。52は山形口縁をなし、撚糸圧痕文が施されている。53・54は同一の個体であるが接合しない。山形の突起を有し、隆線を渦巻状に貼付し、刺突文を施す。体部には細い沈線がみられる。55は隆線が残る磨消しを施している。56～72・76は口縁部破片である。69・70・72・73を除き沈線と磨消し手法を用いて文様を施す。69・70・72・73は渦巻状に隆線を施している。74・75・77～82は沈線と磨消し手法を用いている。83～92は刺突文や、列点文が施されるものである。

石器（第28図10～20）

20は無茎の石鏃である。21は縦型の石匙、22はヘラ状石器である。13・16・17は側縁に刃部をもつ削器、14・15は先端に刃部をもつ掻器であろう。18・19は磨製石斧である。20は包丁型を呈する石製品で、平行に２個の穿孔がみられる。装飾品であろう。

５号住居跡（第７図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸3.7m、短軸3.3m の楕円形を呈する。確認面からの深さは５cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは13個検出されており、主柱穴と考えられるものは深さ24cm以上のピットである。炉は中央部よりやや西側に位置しており、浅い掘り込みをもつ地床炉からなる。掘り込みの底面は熱をうけて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

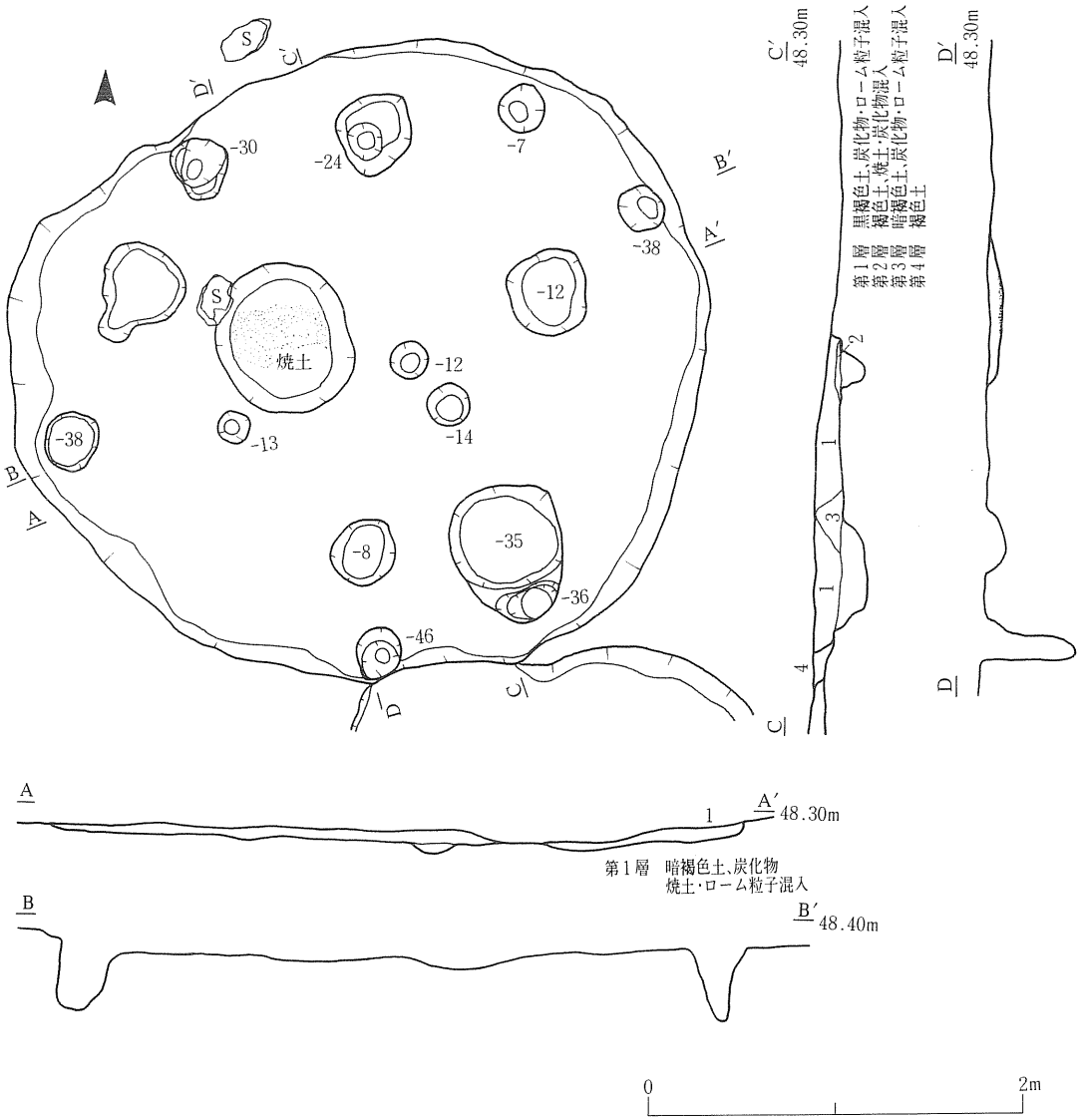
出土遺物

土器（第21図95～97）

覆土から出土した。95は口縁部破片で隆帯を貼付し、楕円状の区画文がみられる。96・97は数条の平行沈線文が施される。

石器（第29図31）

石皿の破片が１点出土した。



第7図　5号住居跡

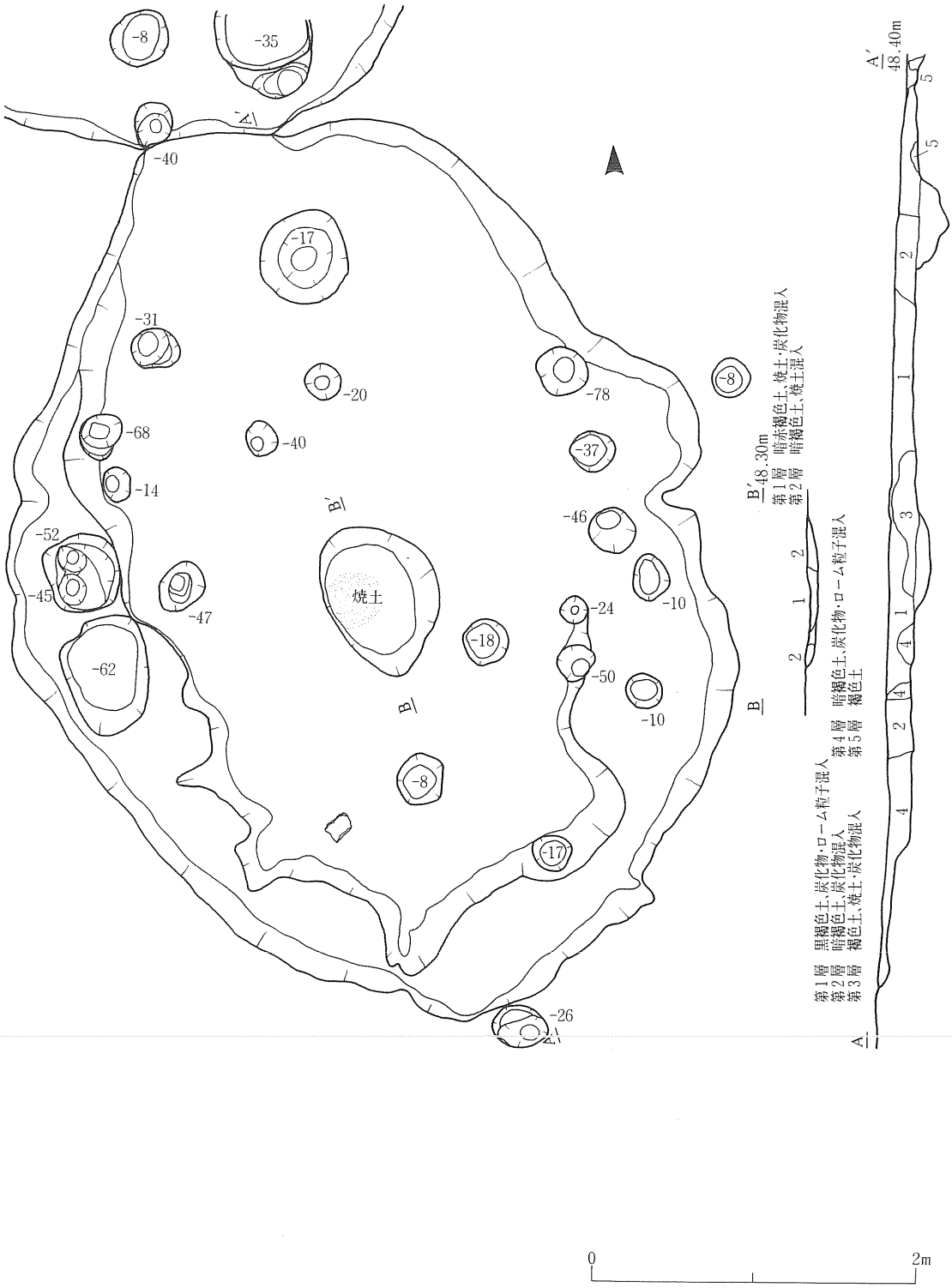
6号住居跡（第8図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸5.6m 、短軸4.2m の南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは15cmで、壁はやや斜めに立ち上がる。ピットは19個検出されたが主柱穴は不明である。炉は中央部に位置しており、浅い掘り込みをもつ地床炉からなる。掘り込みの底面は熱をうけて赤変している。床面は内側で若干二段になる。堅く良好である。

出土遺物

土器（第21図98・99）


-8
-35
-40
-17
-31
-20
-68
-40
-14
-52
-45
-47
-62
焼土
-18
-8
-17
-26
-78
-37
-46
-24
-10
-50
-10
-8
A
A′
B
B′
B′ 48.30m
第1層 暗赤褐色土、焼土・炭化物混入
第2層 暗褐色土、焼土混入
A′ 48.40m
第1層 黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層 暗褐色土、炭化物混入
第3層 褐色土、焼土・炭化物混入
第4層 暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層 褐色土
0
2m

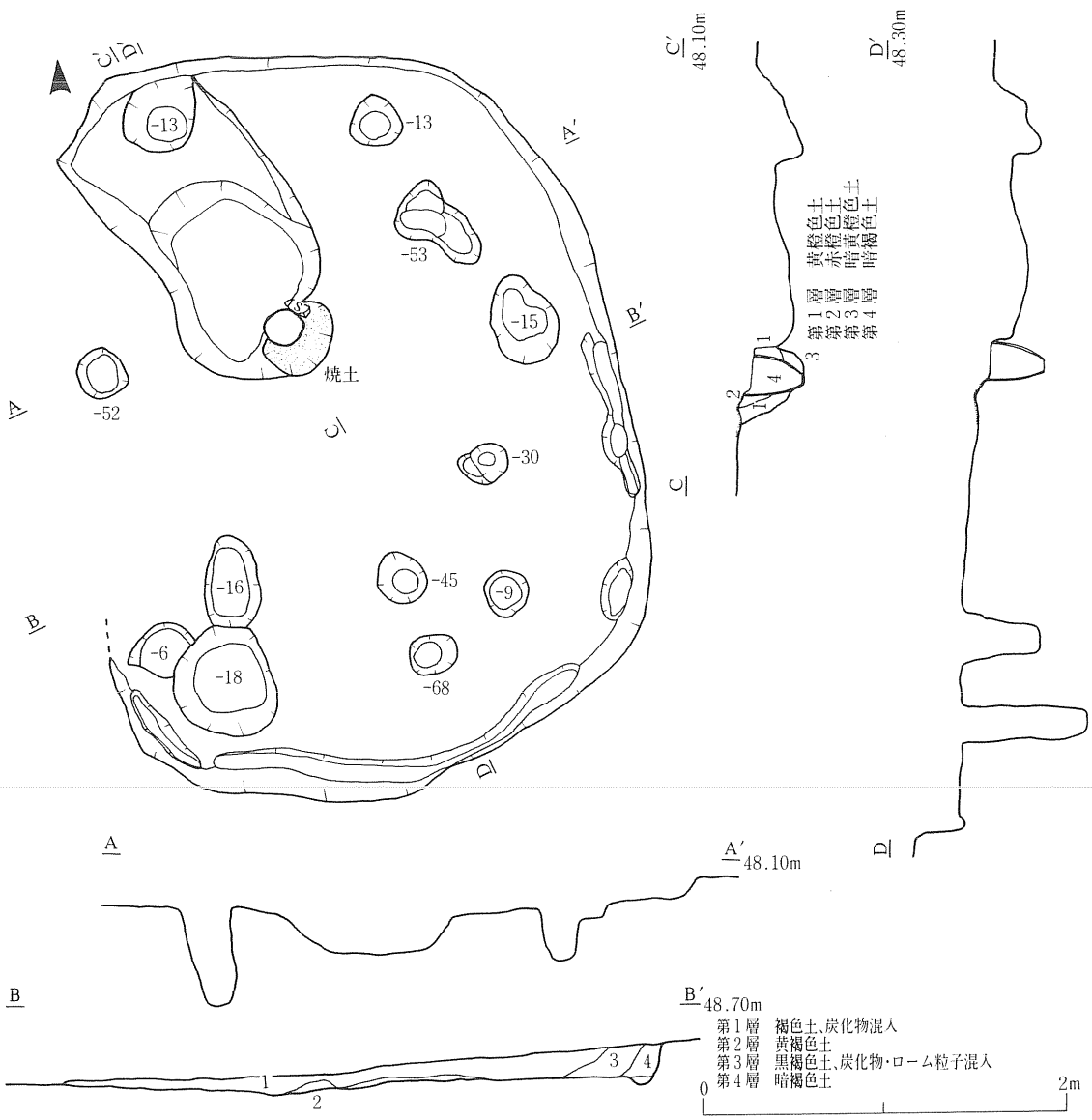
第8図　6号住居跡

覆土から出土した。98は口縁部破片で波状口縁を呈する。竹管状工具による沈線間に渦巻文を配している。

7号住居跡（第9図）

調査区の北側で検出された。

プランは長軸4.2m、短軸3.1mの南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは中央で12cmを計り、壁は南側でほぼ垂直に、また東側でやや斜めに立ち上がる。北西側の壁は原地形が北西方向にむかって傾斜しているため削られ不明である。ピットは14個検出されており、深さ45cm以上のピットが主柱穴と考えられる。炉は北側に作られており、土器埋設部、掘り込み部、掘り込みからな



第9図　7号住居跡

る。土器埋設部には深鉢形土器を正立して据えている。周辺は熱をうけて赤変している。床面はほぼ平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第18図18、第22図100～111）

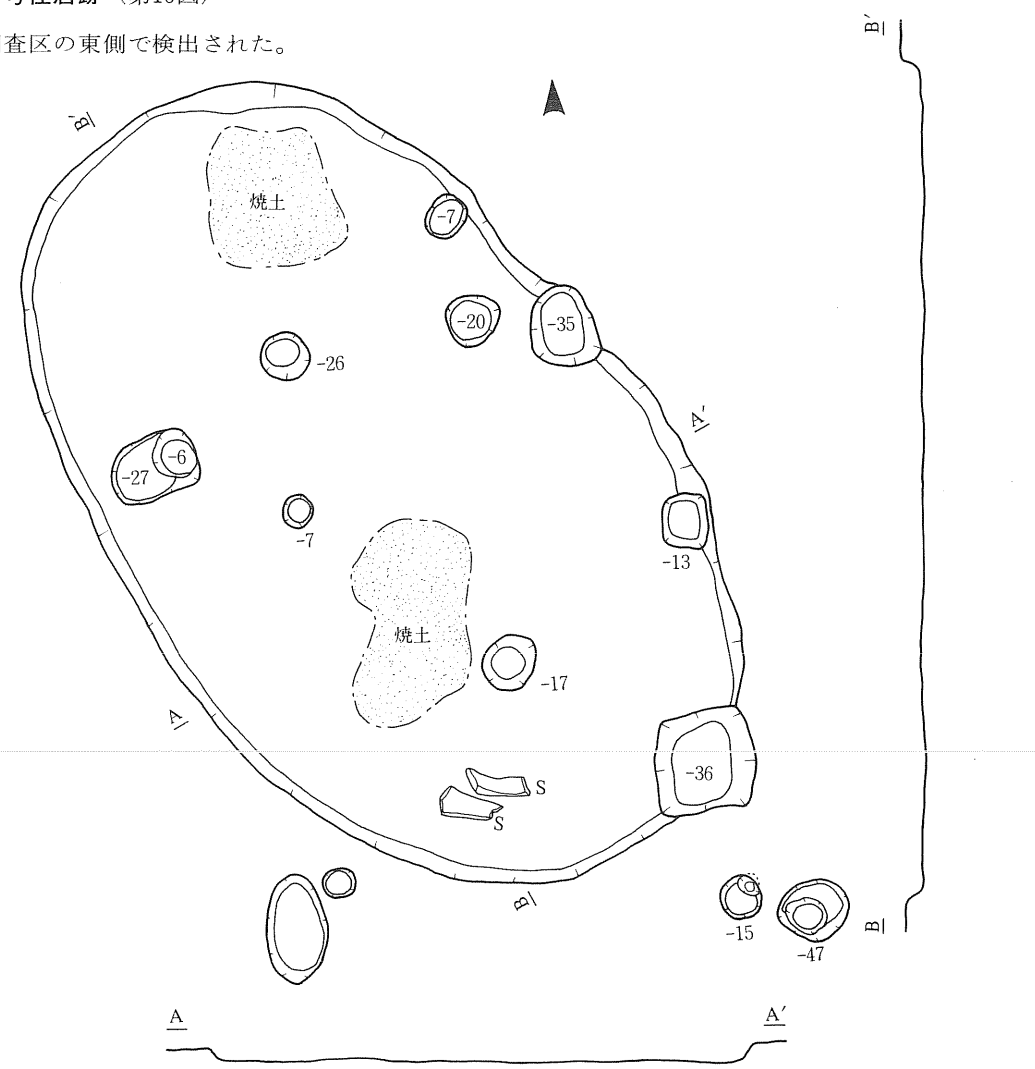
18は炉埋設土器である。口縁部は欠損するが底径7.5㎝を計る深鉢形土器である。ＬＲの単節斜縄文（縦回転）である。100～111は覆土から出土した。いずれも沈線区画と磨消し手法によって曲線的な文様を施している。

石器（第29図32）

覆土から石皿の破片が出土している。

８号住居跡（第10図）

調査区の東側で検出された。



第10図　８号住居跡

プランは長軸4.7m 、短軸2.9m の北西に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁はやや斜めに立ち上がる。ピットは８個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は検出されておらず北側および南側の２ケ所に110cm×64cm、70cm×65cmの範囲で焼土が認められている。床は平坦で軟弱である。

出土遺物

土器（第22図112～115）

覆土から出土した。112は撚糸圧痕による擬似爪形文が施されている。113～115は沈線区画と磨消し手法により文様を施し、沈線間に地文の縄文を残している。

石器（第28図21・22）

21は石鏃、22は縦型の石匙である。

９号住居跡（第11図）

調査区の西側で検出された。

プランは長軸4.6m 、短軸4.5m のほぼ円形を呈する。確認面からの深さは12cmで、壁はやや斜めに立ち上がる。東側を除く壁下に幅13～17cm、深さ15～20cmの周溝がめぐっている。ピットは７個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は北側に位置しており、石囲い土器埋設部、石組み部掘り込みからなる。土器埋設部には深鉢形土器の胴部を正立して据えている。土器埋設部の周辺および石組み部の底面は熱をうけて赤変している。床は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第17図19、第23図116～119）

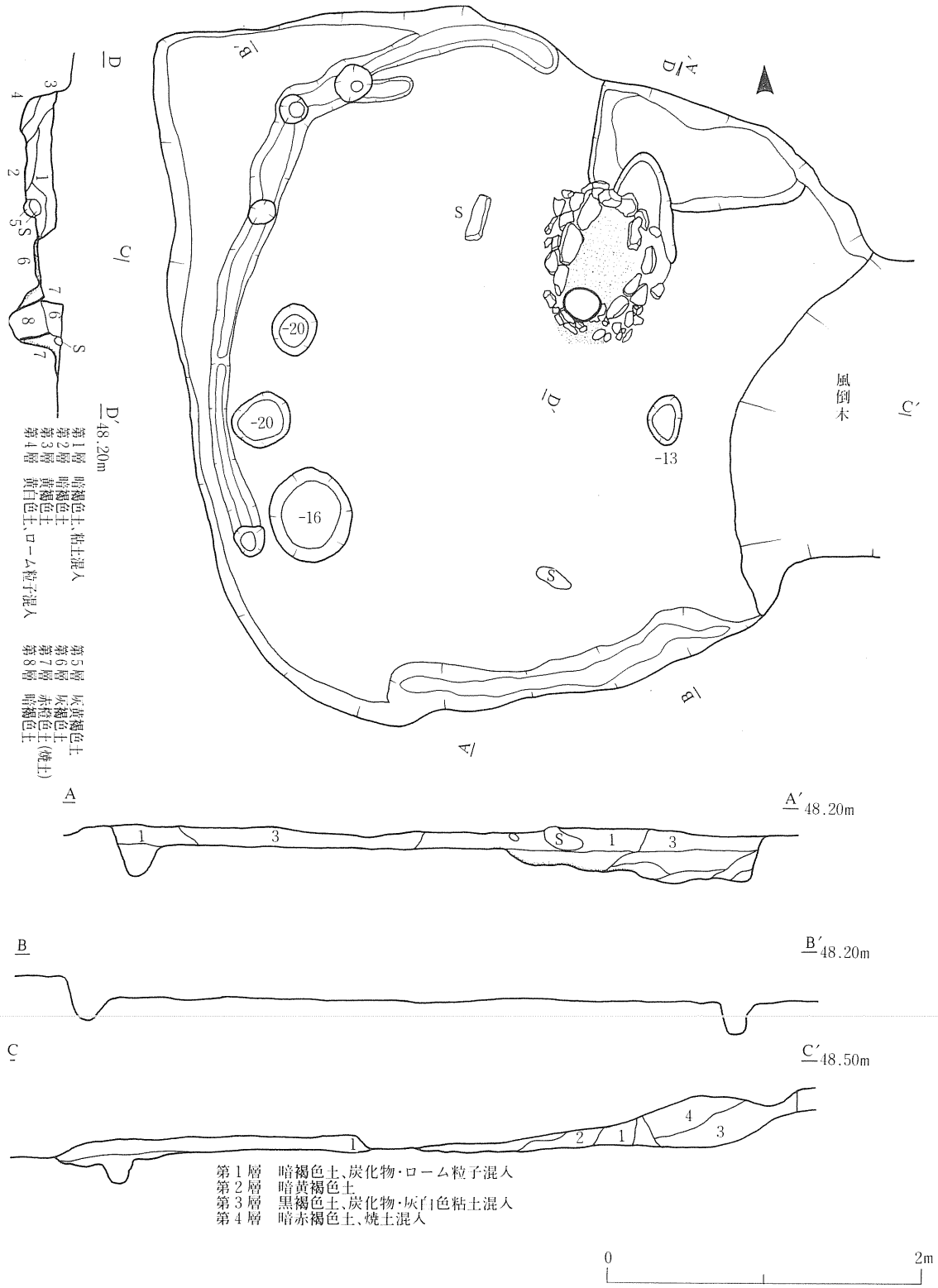
19は炉埋設土器である。口径23.4cm、器高23cmを計る深鉢形土器である。口縁部に幅約２.７cmの磨消し帯を有し、他はＲＬＲの複節斜縄文である。116～119は覆土から出土した。118を除き沈線区画と磨消し帯によって文様を施している。

石器（第28図23・24）

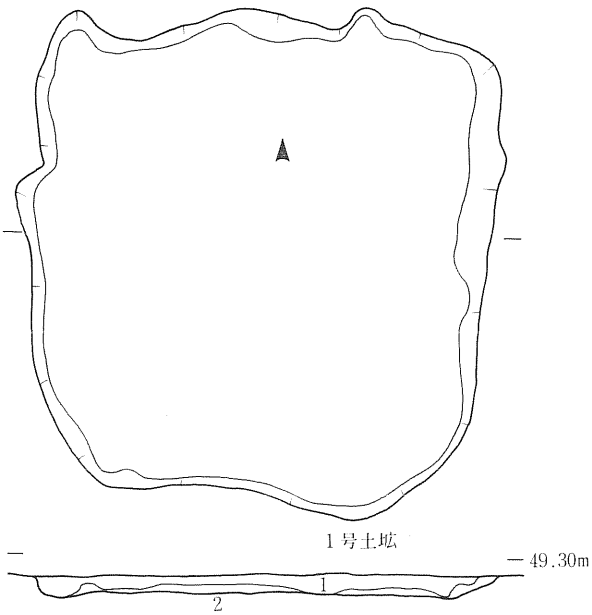
23は石槍、24は横型の石匙である。

土坑一覧表

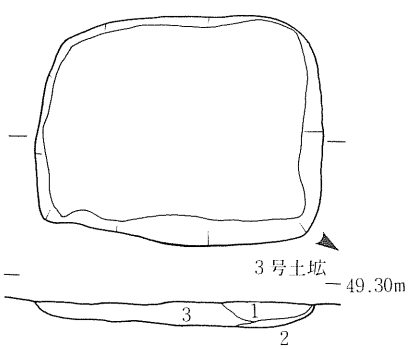
項目 / 土坑番号	規模(m) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	出土遺物
1 号	2.57	2.44	0.12	長方形	鍋底状	
2 号	4.06	1.98	0.31	長方形	鍋底状	
3 号	1.52	1.22	0.13	長方形	鍋底状	
4 号	2.01	1.52	0.34	楕円形	鍋底状	
5 号	1.55	1.05	0.21	長方形	鍋底状	
6 号	1.57	1.25	0.32	楕円形	鍋底状	第23図120
7 号	1.1	0.75	0.18	楕円形	鍋底状	
8 号	1.15	0.98	0.18	楕円形	鍋底状	
9 号	1.21	1.06	1.9	隅丸長方形	フラスコ状	第23図121～125・第28図25
10 号	0.79	0.75	0.32	円形	鍋底状	第23図126
11 号	0.97	0.92	0.41	円形	鍋底状	


D
D′
48.20m
第1層 暗褐色土、粘土混入
第2層 暗褐色土
第3層 黄褐色土
第4層 黄白色土、ローム粒子混入
第5層 灰黄褐色土
第6層 灰褐色土
第7層 赤褐色土(焼土)
第8層 暗褐色土
A
A′
48.20m
B
B′
48.20m
C
C′
48.50m
風倒木
-20
-20
-16
-13
S
第1層 暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層 暗黄褐色土
第3層 黒褐色土、炭化物・灰白色粘土混入
第4層 暗赤褐色土、焼土混入
0
2m

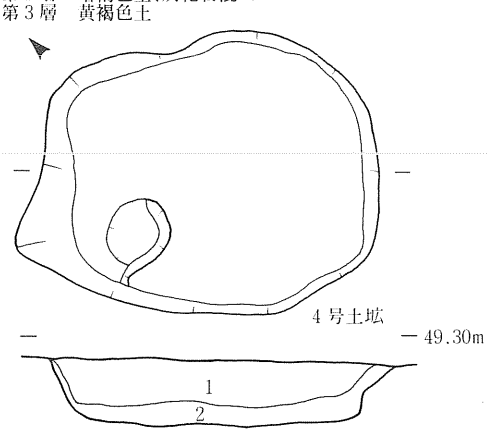
第11図　9号住居跡



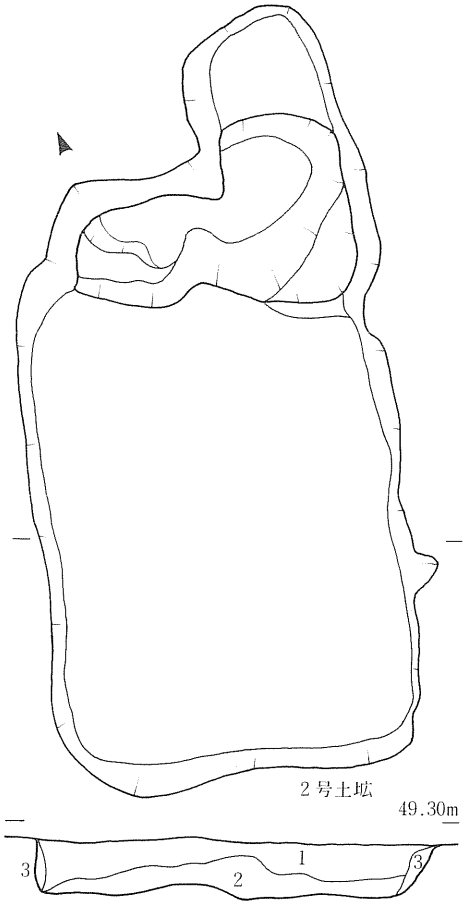
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土



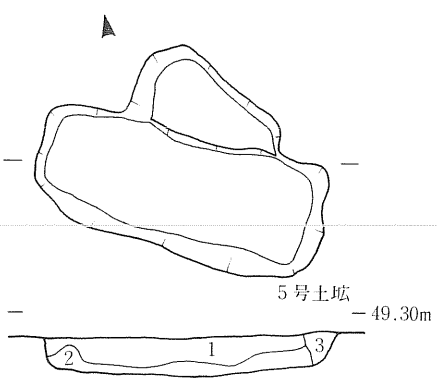
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　黄褐色土



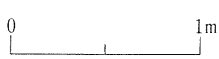
第1層　暗褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物混入



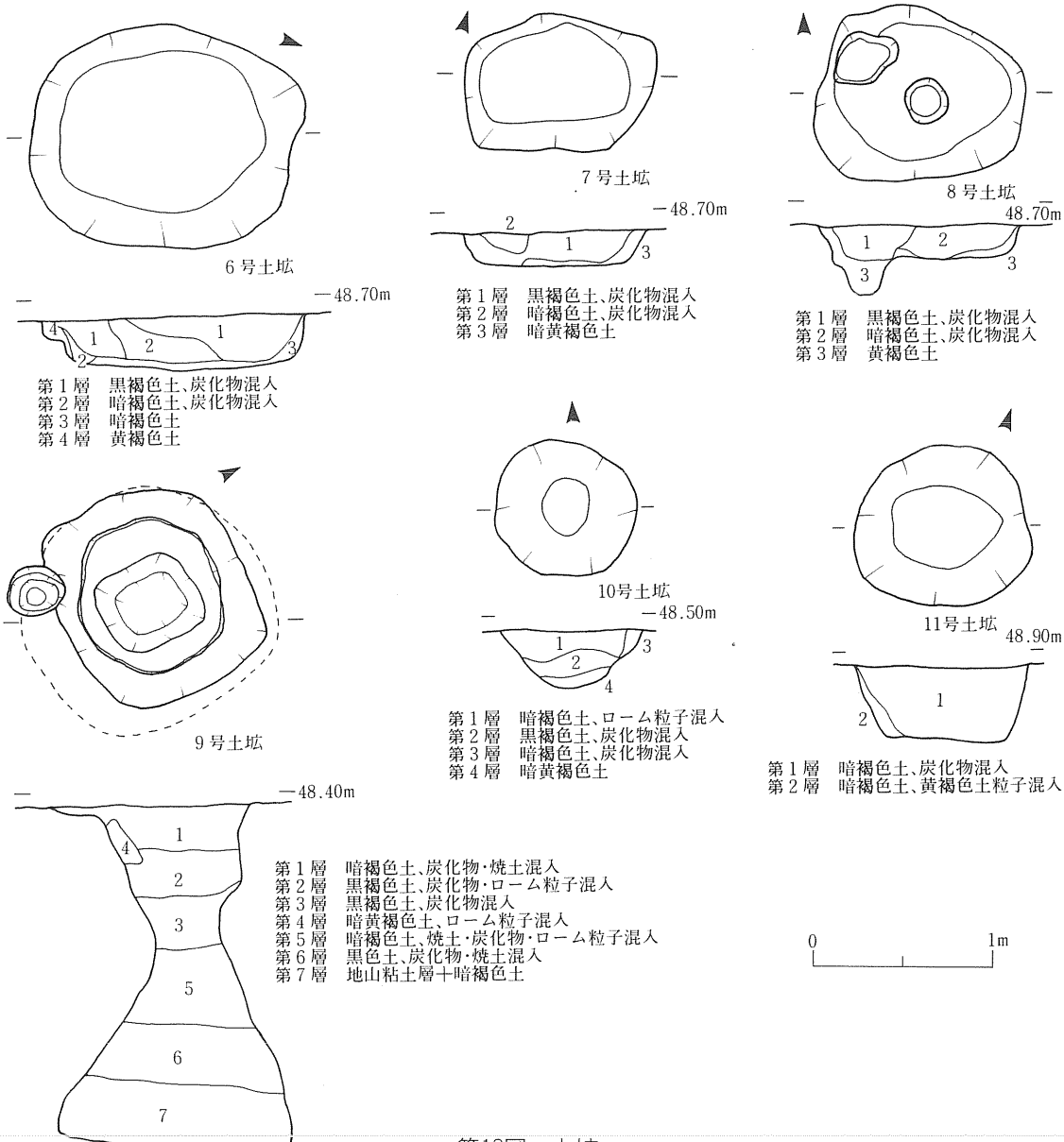
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　黒褐色土
第3層　暗黄褐色土、炭化物混入



第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土
第3層　黄褐色土



第12図　土坑



第13図　土坑

土坑内出土遺物

6号土坑出土遺物

土器（第23図120）

覆土から出土した。山形突起を有する口縁部で、撚糸圧痕文を施している。

9号土坑出土遺物

土器（第23図121～125）

覆土から出土した。121は口縁部破片で刻みが施される。122・123は同一個体と思われる。木目

状撚糸文が施される。125は竹管状工具により流水文が施されている。

石器（第28図25）

25はツマミ部分が欠損する石匙であろう。

10号土坑出土遺物

土器（第23図126）

覆土から出土した。粘土紐貼付による隆線文に撚糸圧痕による刻みを施している。地文は羽状縄文である。

出土遺物

遺構内外出土の土器を施文様から群に、器形から類に分類した。類別の細目については、器形からA－深鉢、B－鉢、C－浅鉢、とし、口縁部形状から、1－直立、2－内湾、3－外反、4－キャリパー、5－その他、とした。文中ではアルファベットと数字の組み合せで説明することにする。

1群土器（第25図127～132）

北陸系の土器を一括した。主に半隆起線を施すものである。

A－3類（128・129）：半陸起線を主体とする土器である。

A－4類（127・131・132）：口縁部がキャリパー状を呈する深鉢形土器である。半隆起線を主体とするもの（127）と、半隆起線に粘土紐貼付により隆線を施すもの（131・132）もある。

2群土器（第25図133～138）

A－2類（138）：深鉢形土器で口縁部が内湾する。突起を有し粘土紐貼付により橋状の把手を有する。

A－3類（133～137）：深鉢形土器で口縁部が若干外反する。単軸絡条体圧痕が主体をなす。突起を有し粘土紐を貼付するもの（133）や、口縁部と胴部の間に粘土紐貼付の隆帯をめぐらすもの（137）などがある。

3群土器（第25図141～144）

A－3類（141・143・144）：深鉢形土器で口縁部が外反する。粘土紐を貼付した隆帯状に撚糸圧痕を施すもの（141・143）と施さないものがある（144）。隆帯間には擬似爪形文、撚糸圧痕文が施される。

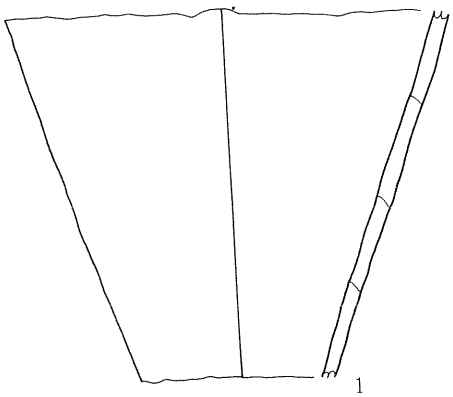
B－1類（142）：口縁部がほぼ直立する鉢形土器と思われる。細い粘土紐を貼付し、撚糸圧痕文が施される。

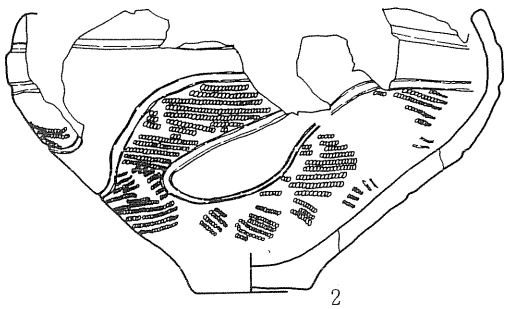
4群土器（第25図145・146）

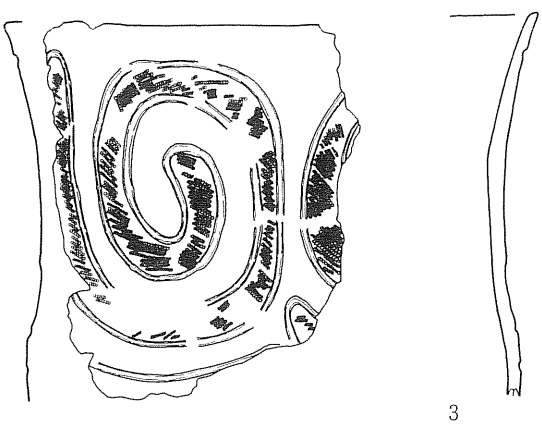
A－3類（145・146）：口縁部が若干外反する深鉢形土器である。口唇、口縁部に細い粘土紐を貼付し、その間に竹管状工具による円形刺突文を施している。

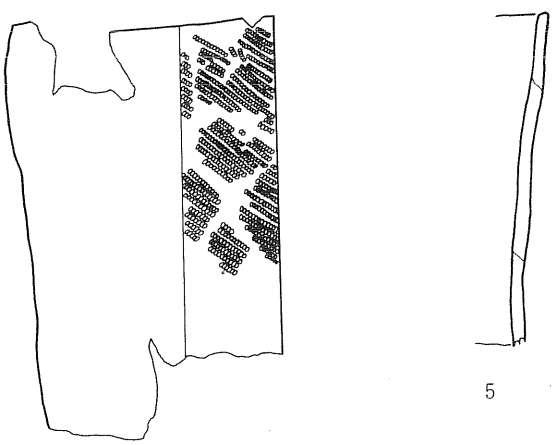
5群土器（第25図147～149）

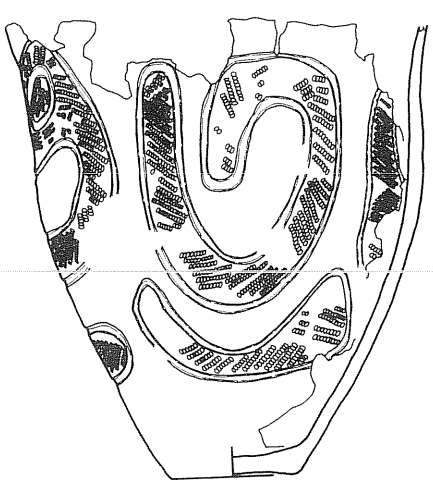
口縁部に粘土紐貼付による隆帯をめぐらせ、部分的に2条の隆帯を懸垂状に垂下させている。149

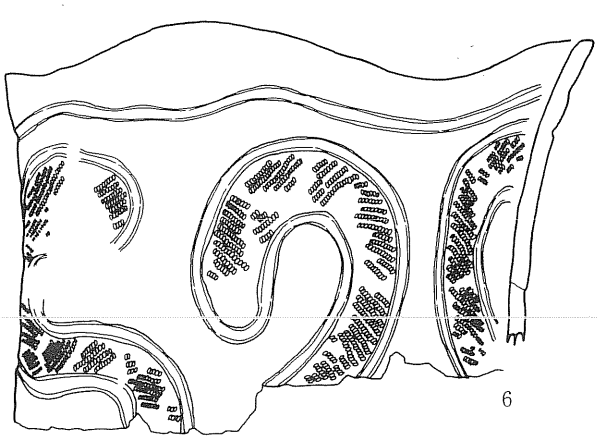








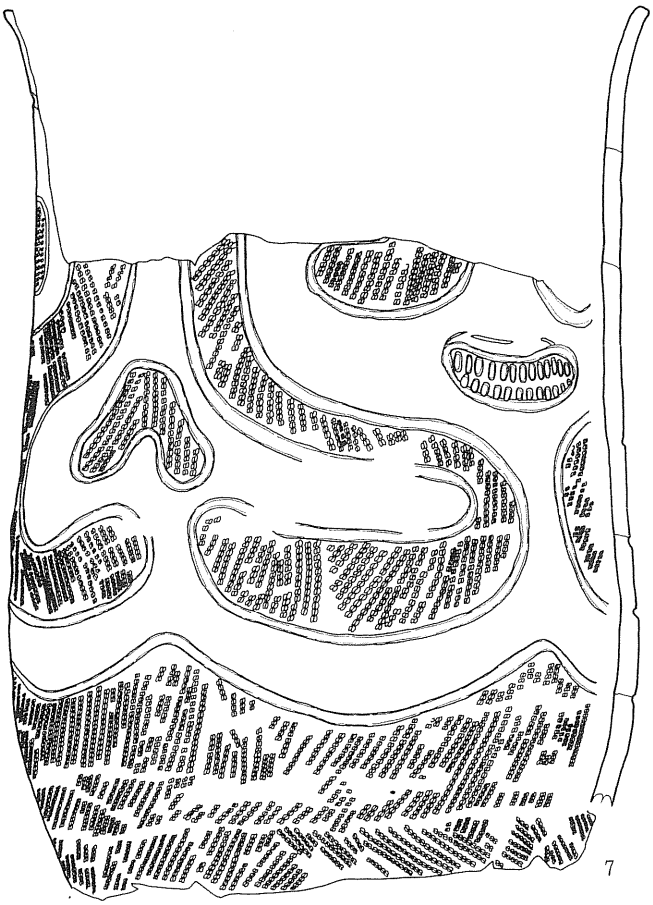


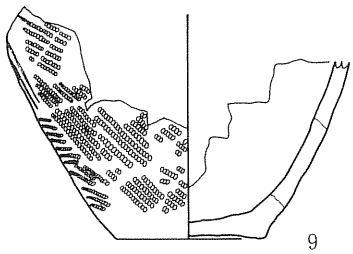


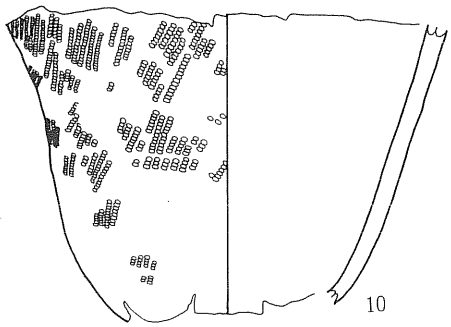
1　1号住居跡炉埋設土器
2　1号住居跡床面
3　1号住居跡ピット
4　2号住居跡炉埋設土器
5　2号住居跡覆土
6　3号住居跡旧炉埋設土器

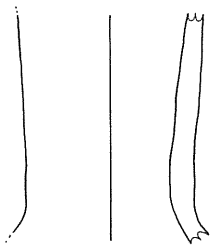
第14図　遺構内出土土器

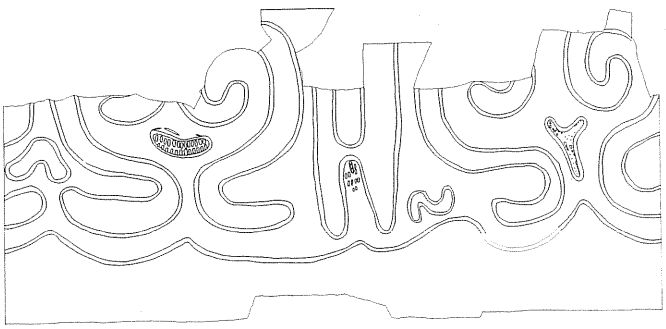
0　10cm

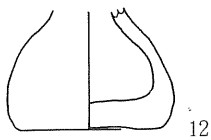




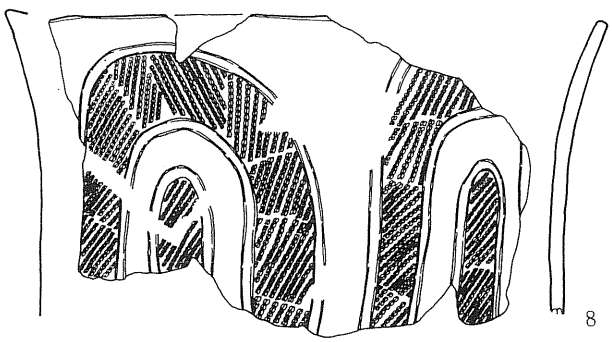




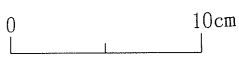


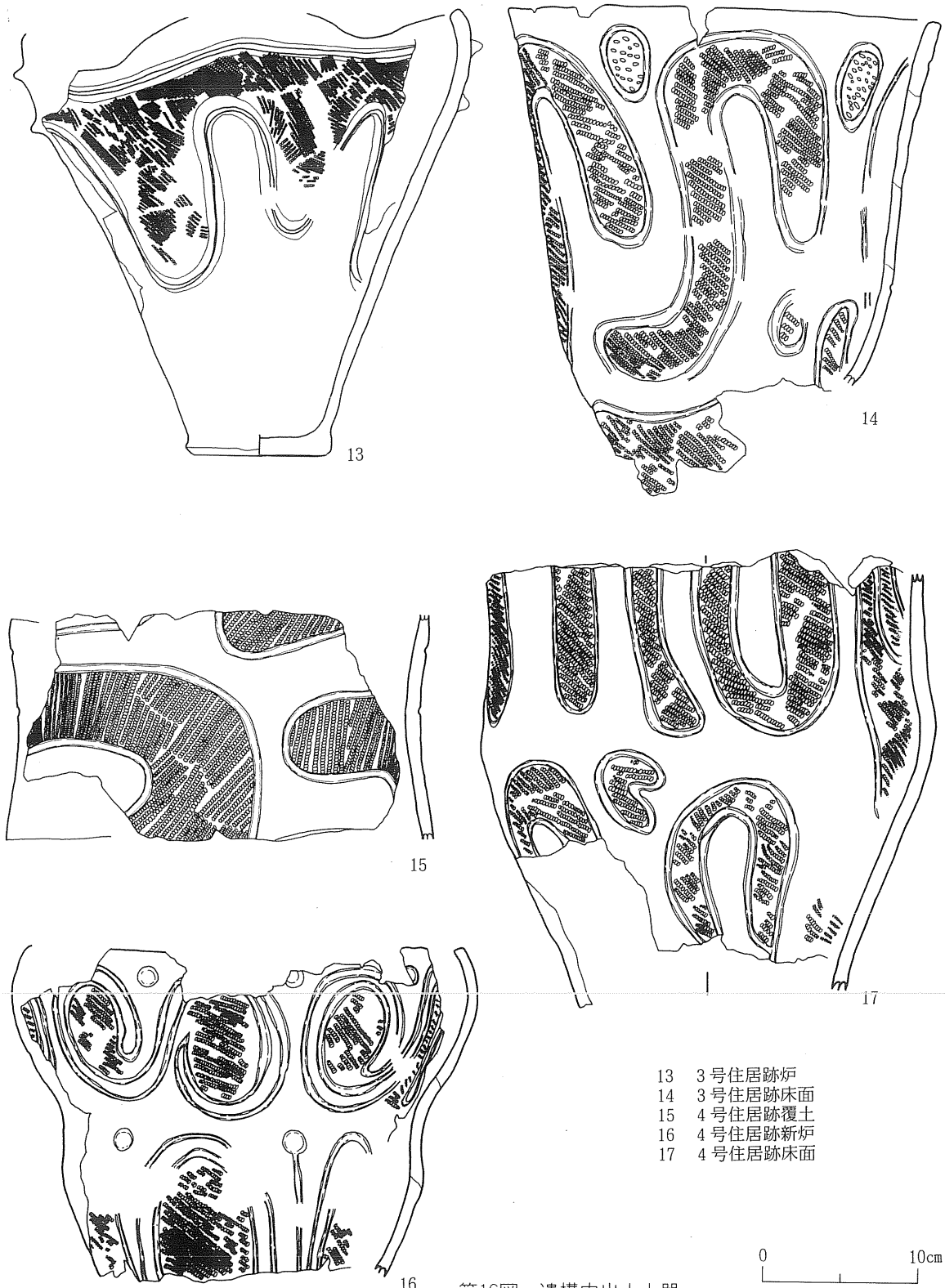


7　3号住居跡埋設土器
8　3号住居跡炉
9　4号住居跡新炉埋設土器
10　4号住居跡旧炉埋設土器
11～12　4号住居跡覆土



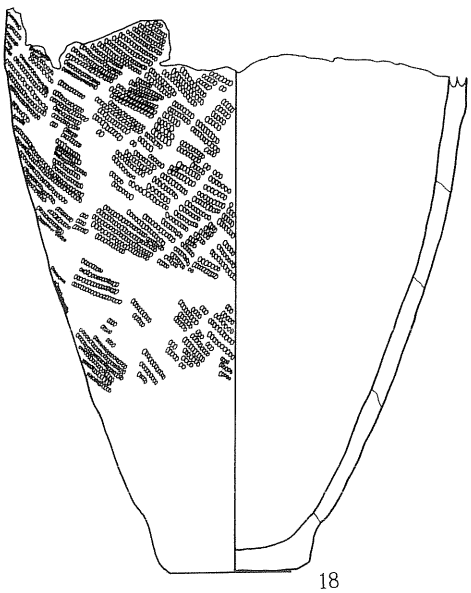
第15図　遺構内出土土器

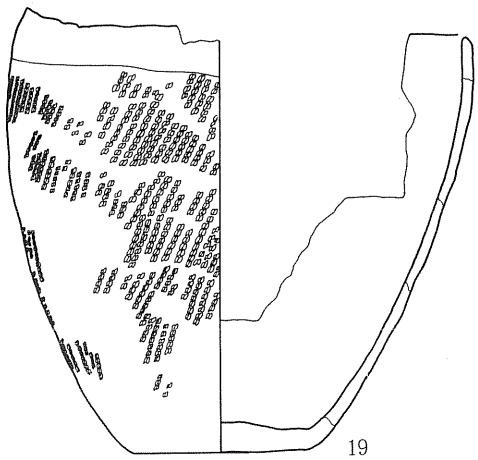




13　3号住居跡炉
14　3号住居跡床面
15　4号住居跡覆土
16　4号住居跡新炉
17　4号住居跡床面

第16図　遺構内出土土器





18　7号住居跡炉埋設土器
19　9号住居跡炉埋設土器

0　10cm

第17図　遺構内出土土器

は隆帯上に竹管状工具による刺突文が施される。

A－2類（147）：わずかに口縁部が内湾する深鉢形土器である。口縁部に粘土紐貼付の隆帯がめぐる。さらに2条の隆帯が垂下している。

A－3類（148）：口縁部が外反する深鉢形土器である。口唇、口縁部に粘土紐貼付による隆帯をめぐらし、垂下する2条の隆帯で連絡させている。小突起を有する。

6群土器（第21図98、第25図150）

A－3類（98・150）：波状口縁をなし、口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部と頸部に沈線がめぐる。特に頸部は2条の隆帯がまわり、隆沈線になる。沈線間には渦巻文が配される。

7群土器（第16図16、第18図35、第19図44・55、第26図151～154・156・157）

隆線や沈線によって渦巻文、区画文、懸垂文などが施される土器群である。

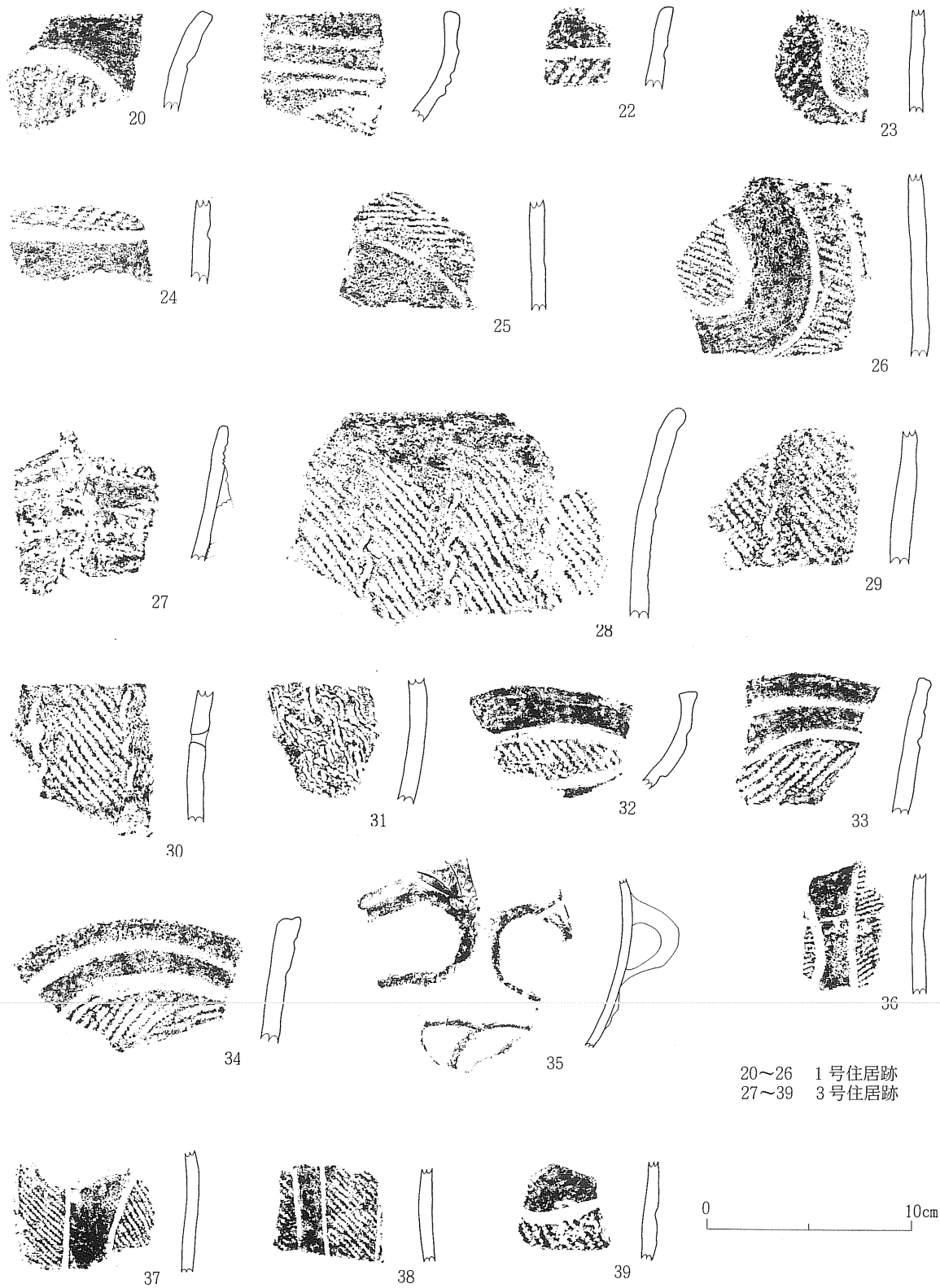
A－2類（152）：口縁部が内湾する深鉢形土器である。

A－3類（153）：口縁部が外反する深鉢形土器である。隆線による区画文と沈線、磨消し帯が施される。

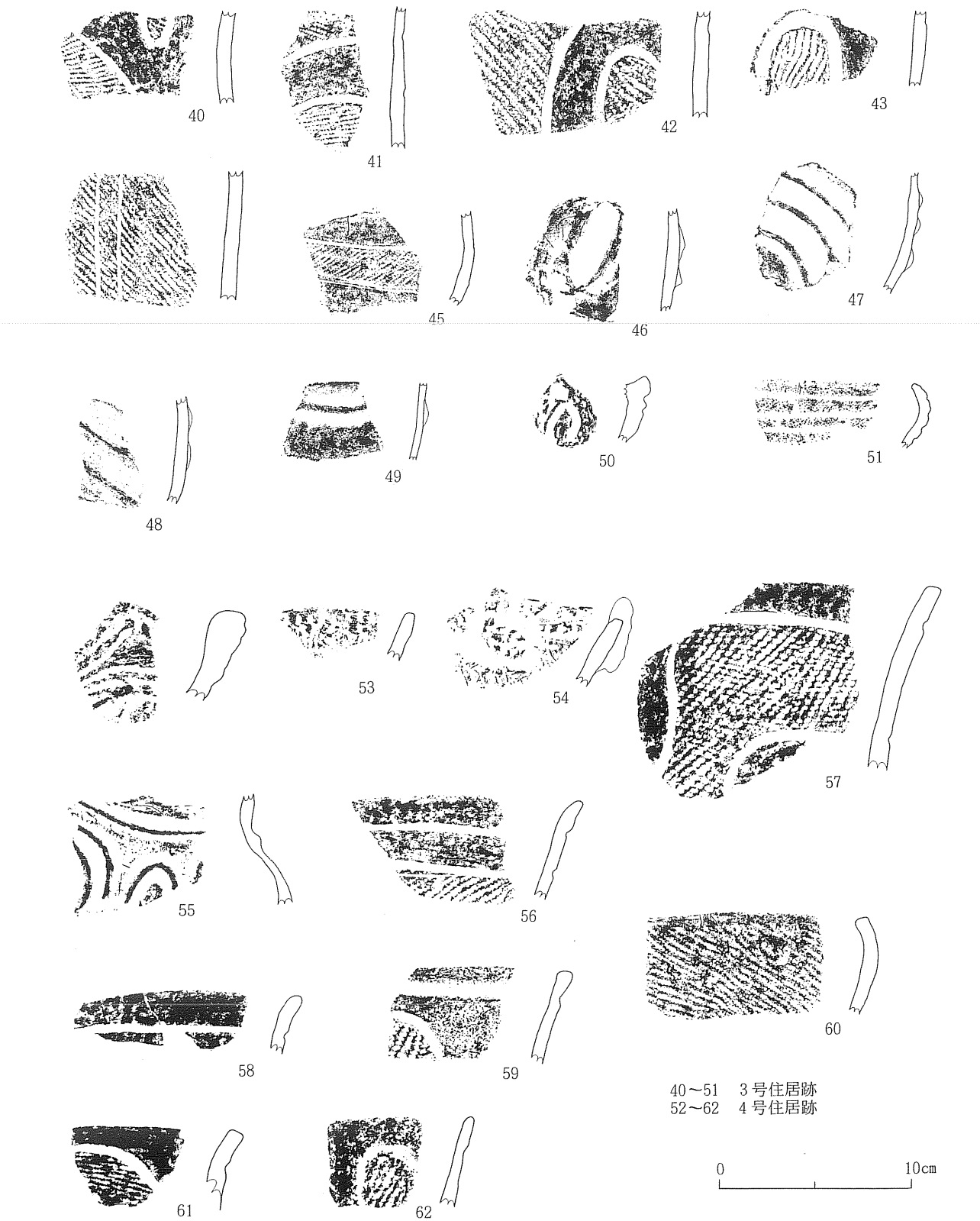
A－4類（16）：キャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部は沈線による「S」字状文が横位に展開し、胴部は沈線による「∩」状文がみられる。間に指による円形の押圧文が配される。

B－2類（151）：口縁部が若干内湾する鉢形土器である。口縁部下に隆線がまわる。下部に楕円状の区画文がみられる。

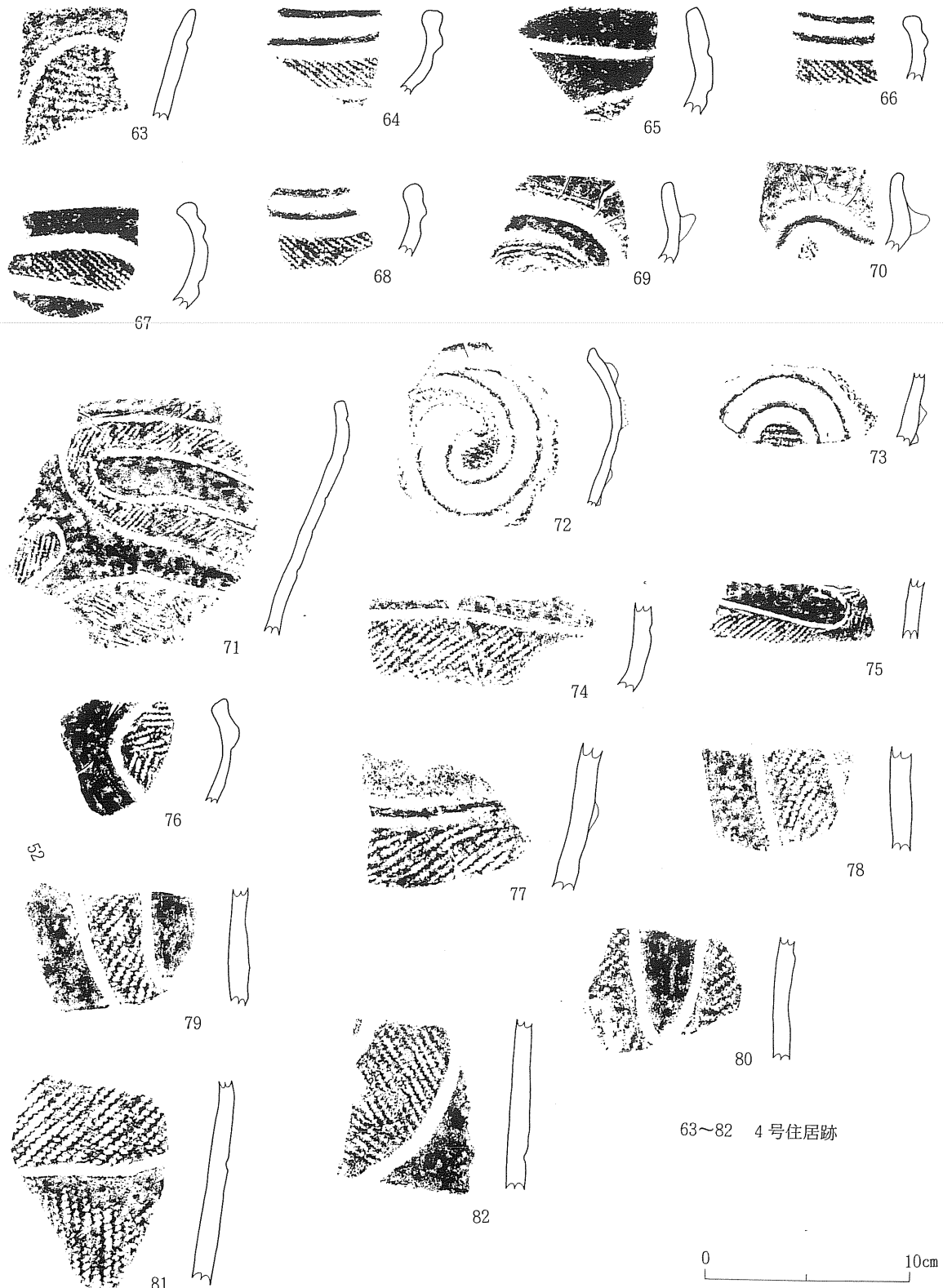
8群土器（第14図2・3・4・6、第15図7・8、第16図13～15・17、第18図20～26・32～34・36～39、第19図40～43・45～49・56～62、第20図、第21図83～93、第22図100～111、第23図116・117、第26図155・158～173、第27図174～177）



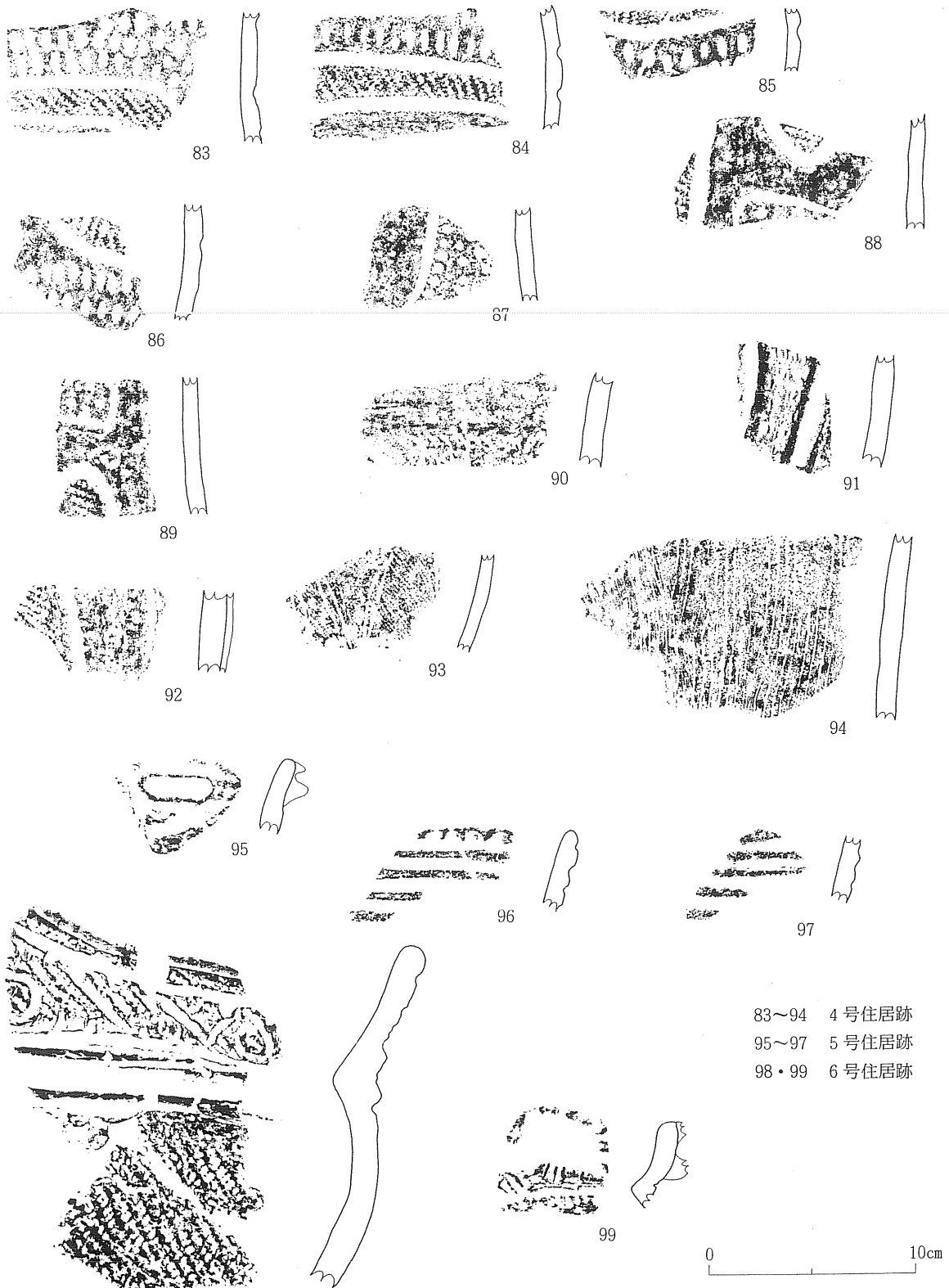
第18図　遺構内出土土器



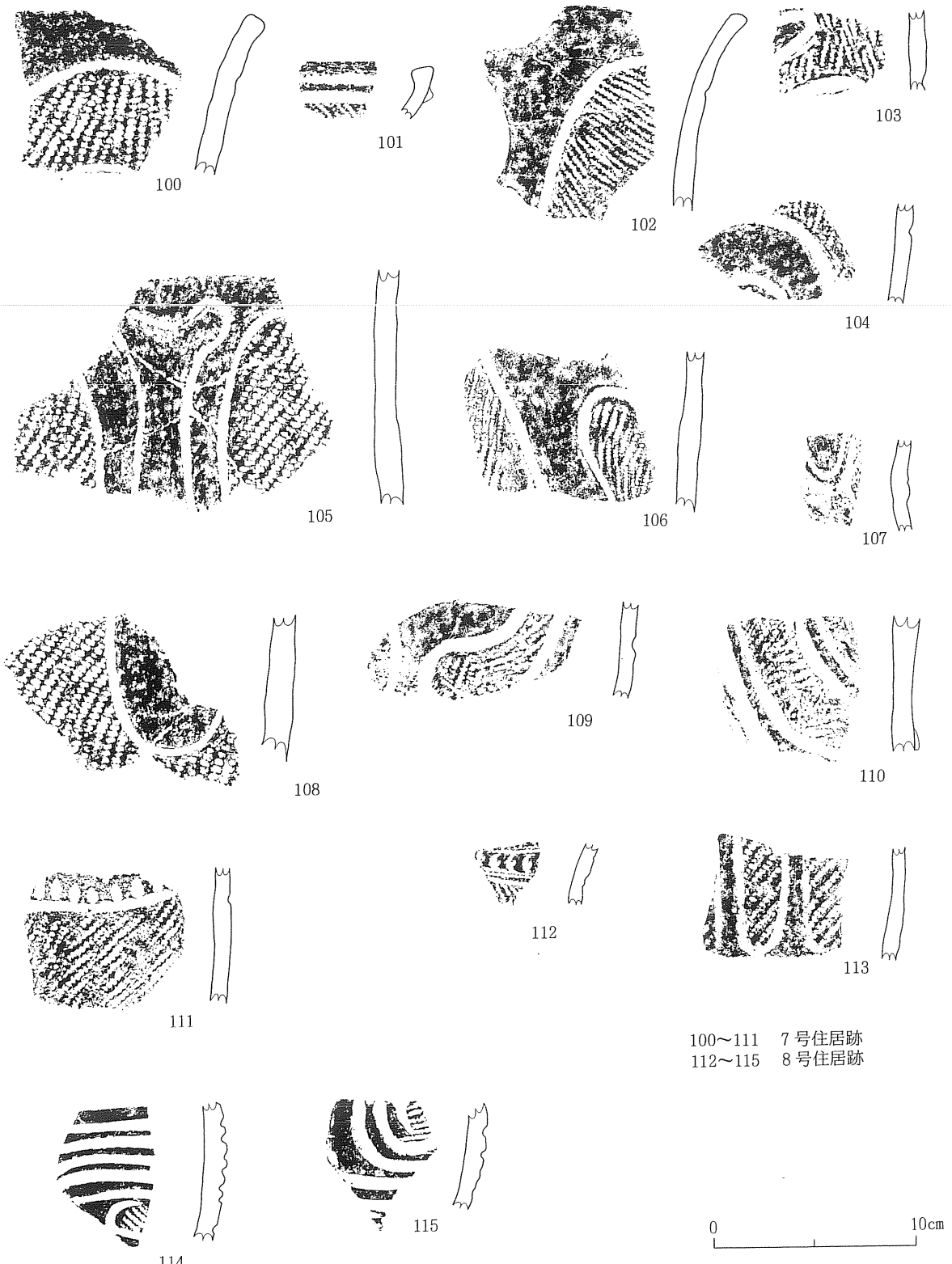
第19図　遺構内出土土器



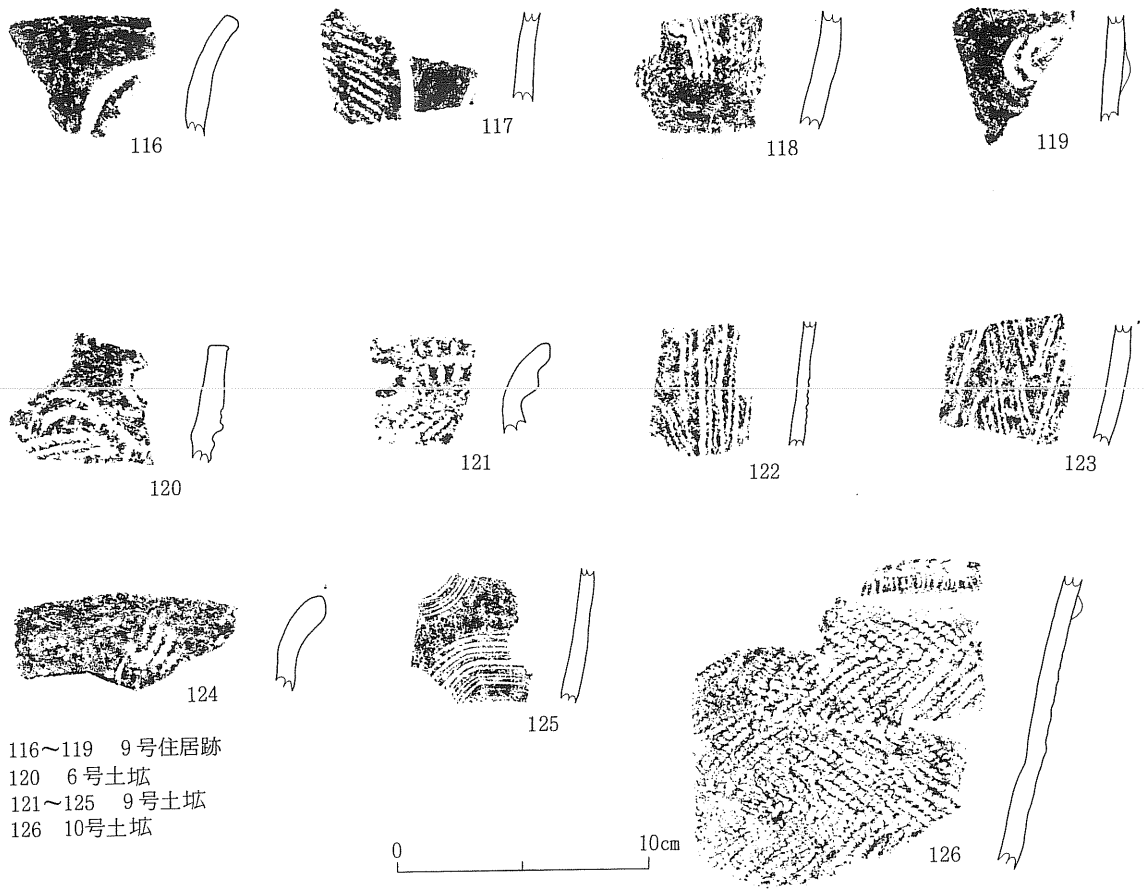
第20図　遺構内出土土器



第21図　遺構内出土土器



第22図　遺構内出土土器



116～119　9号住居跡
120　6号土坑
121～125　9号土坑
126　10号土坑

第23図　遺構内出土土器

沈線区画と磨消し帯によって曲線的な文様が主体をなす土器群である。沈線あるいは隆線によって「S」・「J」・逆「C」字状文などが展開される。列点文、刺突文が付加されるものもある。

A－2類（13・21・69～72・76・101）：口縁部が内湾する深鉢形土器である。隆線、沈線と磨消し帯によって文様を展開させる。13は波状口縁をなし口縁に沿って隆線がめぐる。胴部は大きくゆったりとした波状の隆線がまわり、隆線間に縄文を残している。

A－3類（3・4・6～8・14・20・22・33・34・56～63・100・102・116・155・159～161・164・165・175・176）：口縁部が外反する深鉢形土器である。沈線・隆線区画と磨消し帯によって曲線的な文様「S」・「の」・逆「C」・「J」字状文などが展開する。また沈線区画内に列点文などが施されるものもある。

B－2類（2・32・64～68）：口縁部が内湾する鉢形土器である。口縁部が無文のものが多く、直下に1～2条の平行沈線文がみられる。2は体部の沈線区画磨消し帯が横方向に展開する。

9群土器（第27図178～180）

縄文時代後期の土器を本群とした。178は把手部分に渦巻文がみられ、口縁下に沈線により連鎖状文が施されるものであろう。179・180は数条の平行沈線文がめぐる浅鉢形土器と思われる。

遺構外出土遺物

土製品（第24図２・３）

２は土偶である。頭部、手、足の一部が欠損している。座位で両足を折り曲げている。膝の上に右腕を横たえ、左腕は上方に折り曲げ、「あご」のあたりにもっていっている。若干前かがみの姿勢で背骨のラインが非常にリアルである。腰部には身につけていた衣服と思われるものが鋸歯状の沈線によって描かれている。肩甲骨より上部、腕部には円形刺突文が規則的に施される。地文は細かい単節斜縄文である。

３は耳飾りである。径2.2cmで中央部に穴を穿っているが貫通しない。鼓状を呈している。

石器（第30図～32図）

石匙（１～３）：縦型の石匙である。２はツマミ部分が欠損している。

ヘラ状石器（12～14）：いずれも両面加工である。頁岩製である。

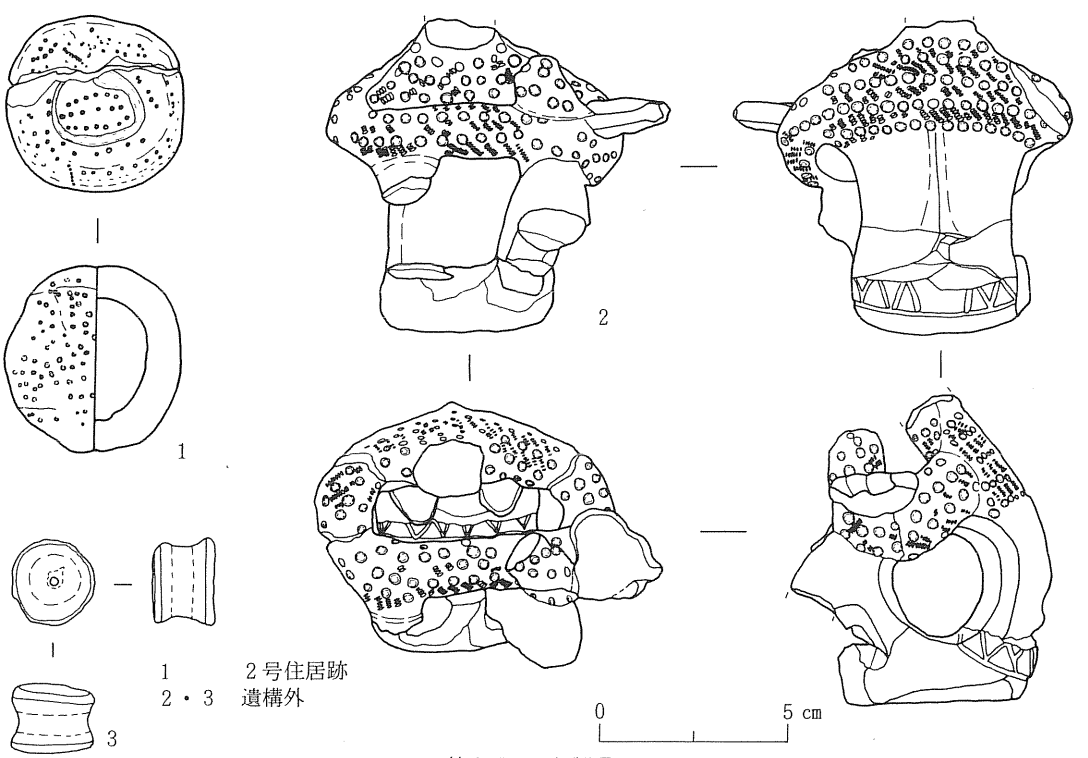
掻器（４～７）：いずれも片面加工であり、主に先端部に刃部をもつ。頁岩製である。

削器（８～11）：いずれも片面加工であり、主に側縁部に刃部をもつ。頁岩製である。

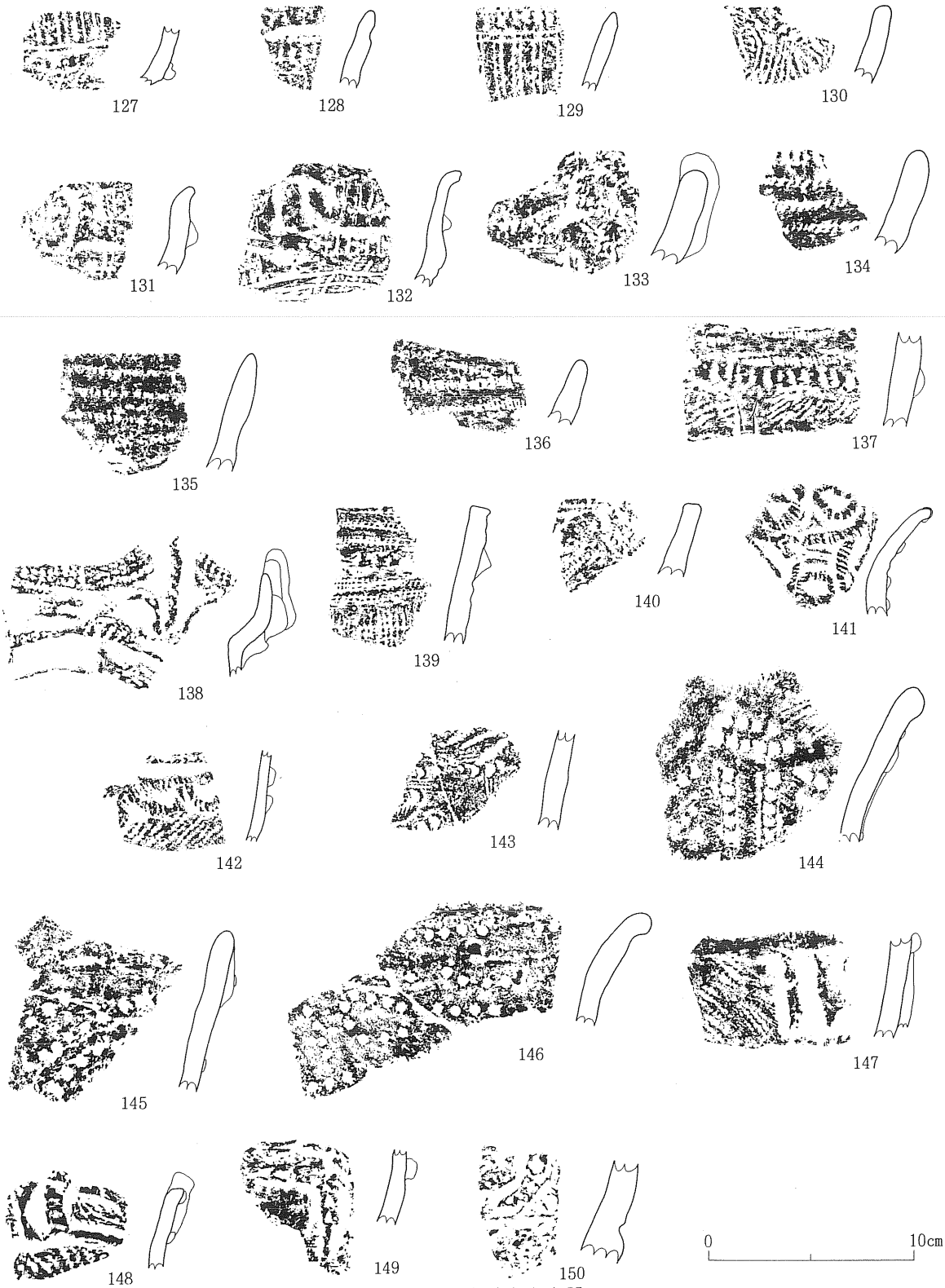
磨製石斧（15・16～19）

石棒（20・21）：21は長さ37.1cm、径14.6cmの大形のものである。片面にはきれいに面取りがされている。

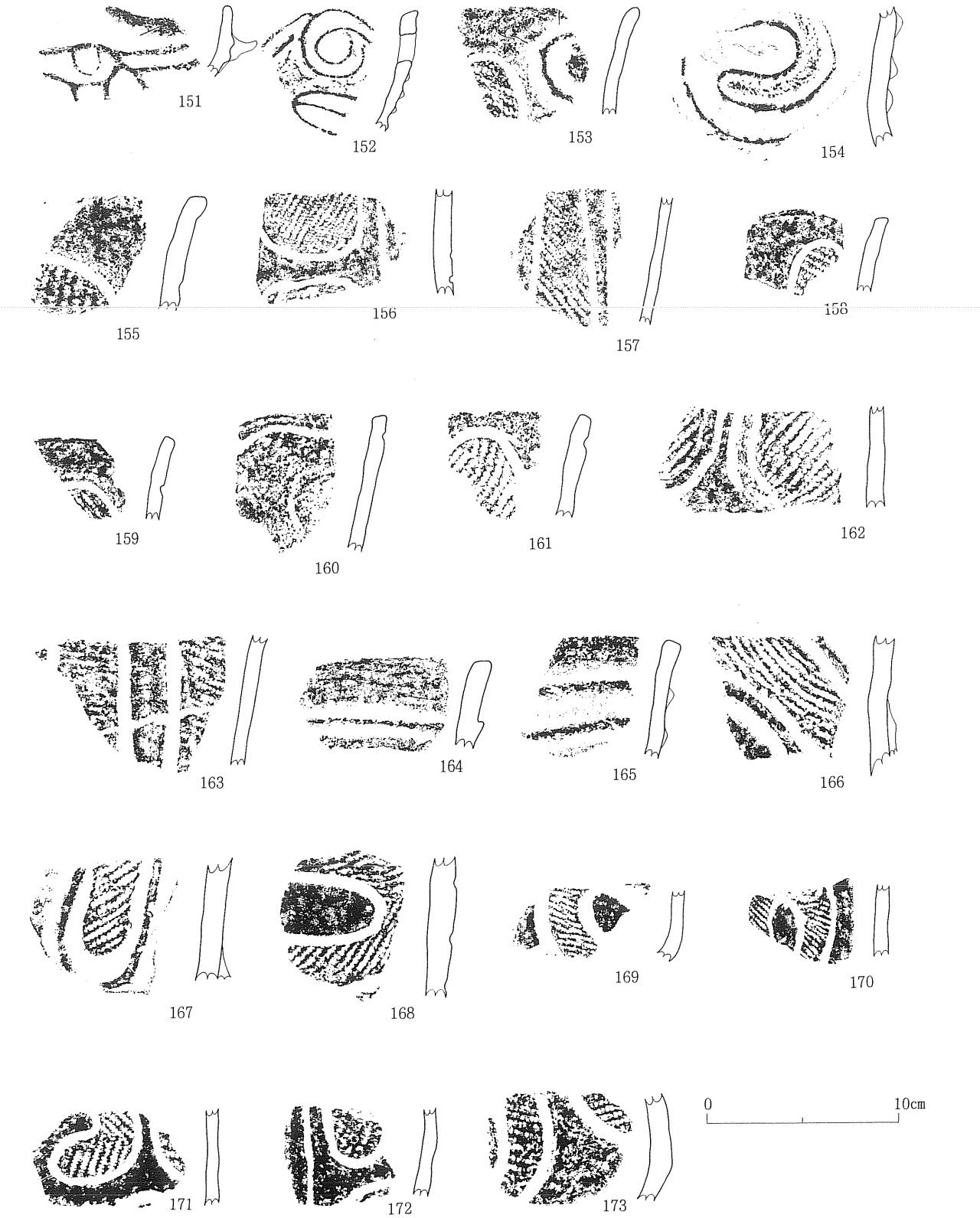
石錘（33）：下端が欠損している。



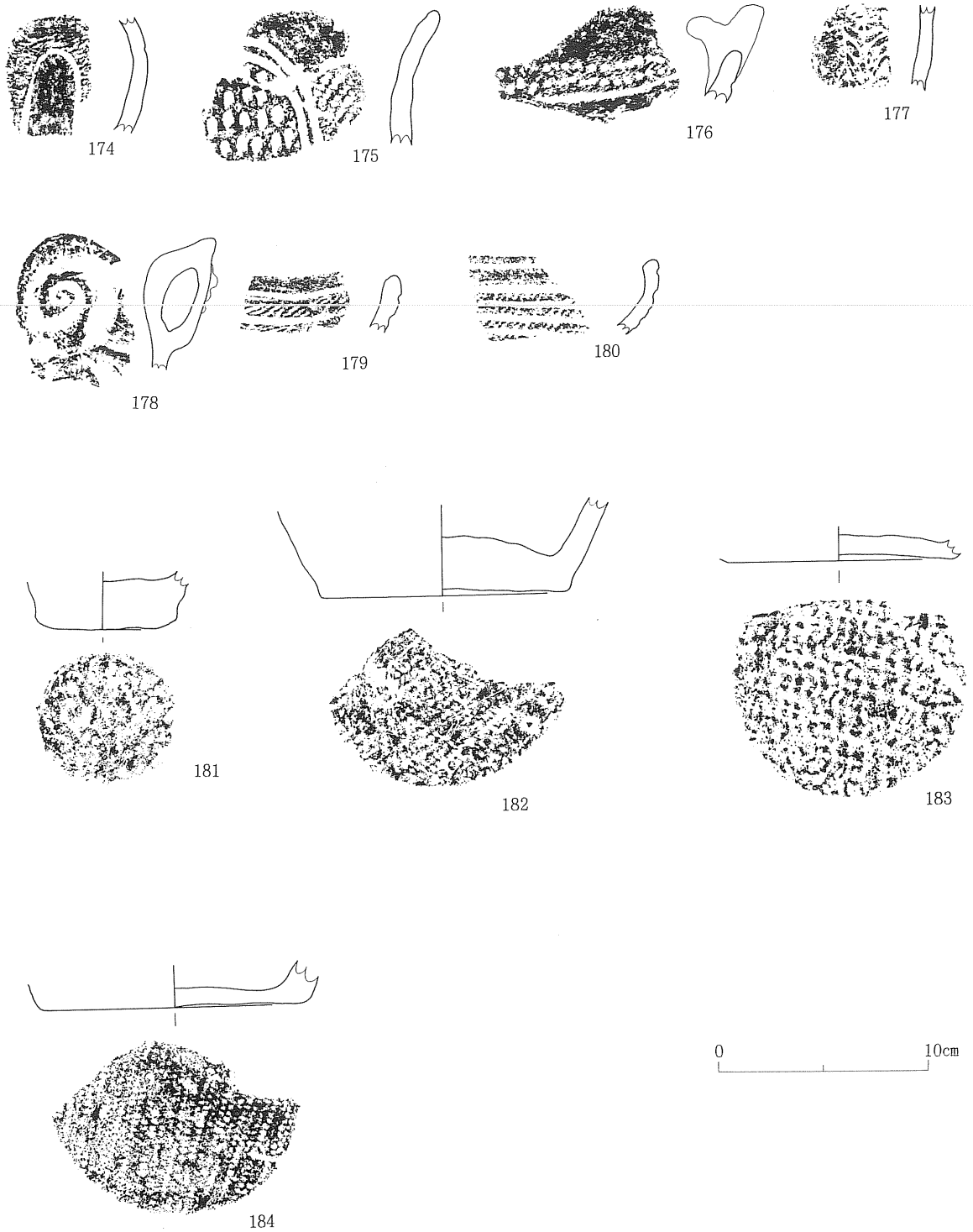
第24図　土製品



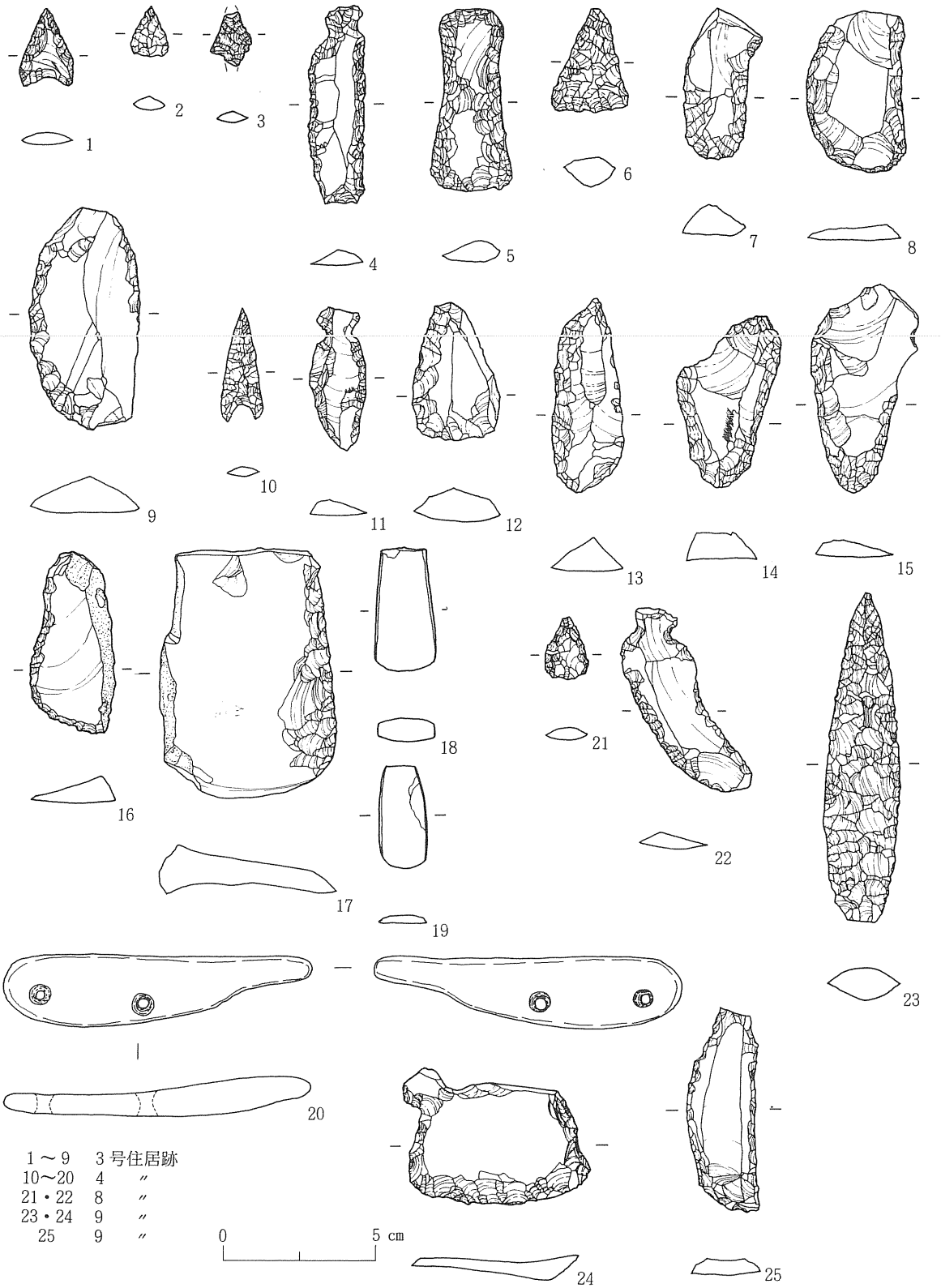
第25図　遺構外出土土器



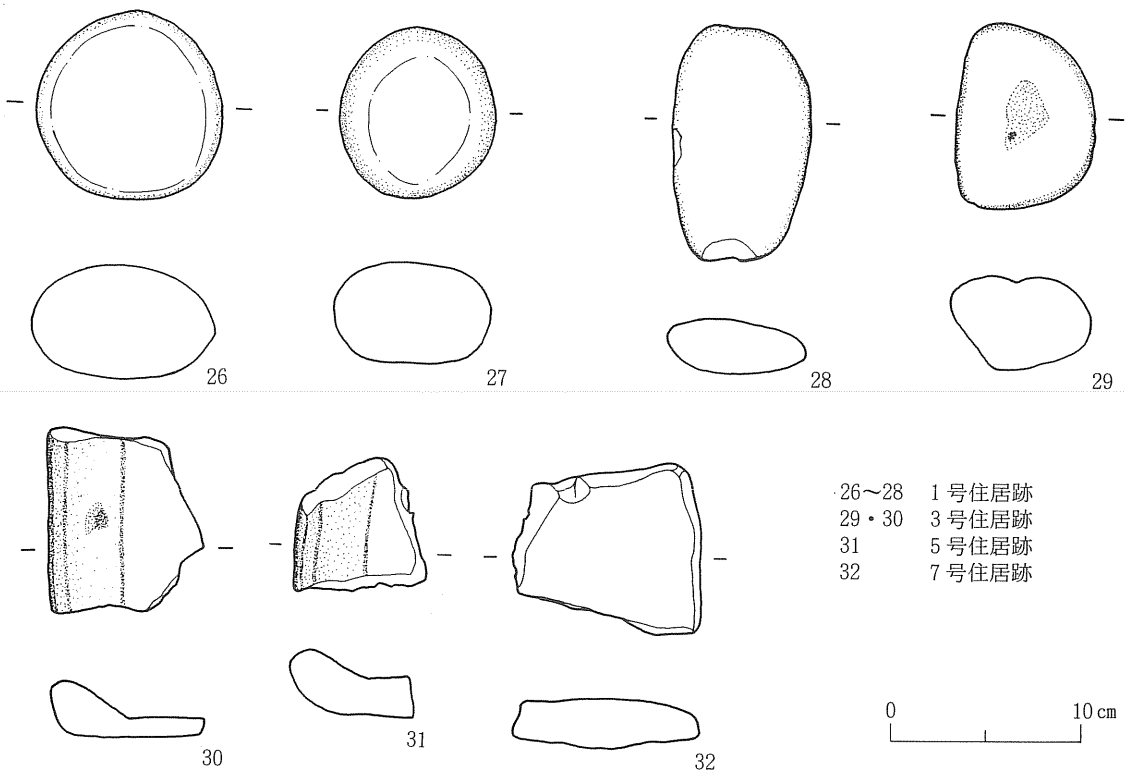
第26図　遺構外出土土器



第27図　遺構外出土土器



第28図　遺構内出土石器・石製品



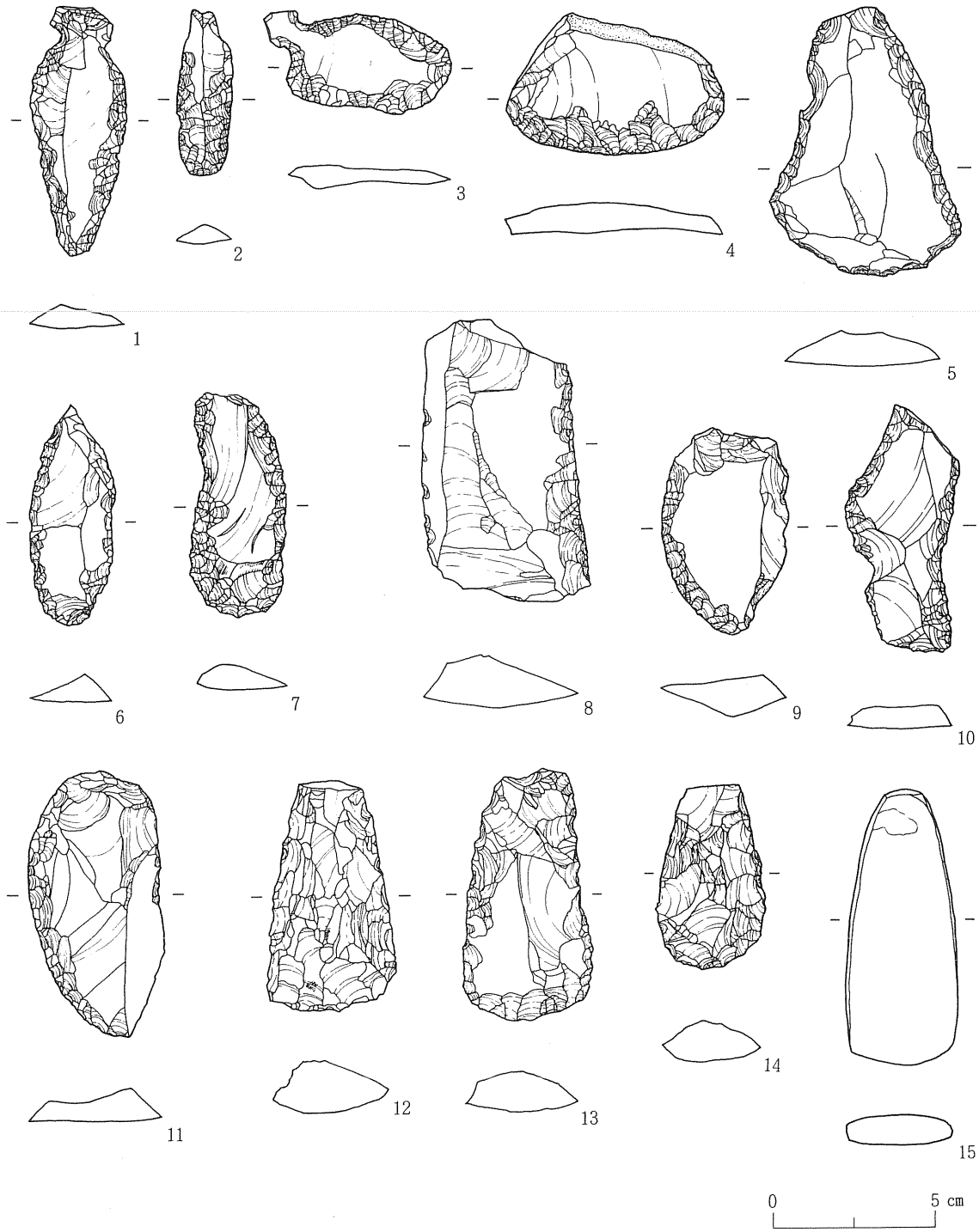
第29図　遺構内出土石器

磨石（22～24・27～31・34～37・39～42）：円・楕円形を呈し、いずれもよく磨られている。

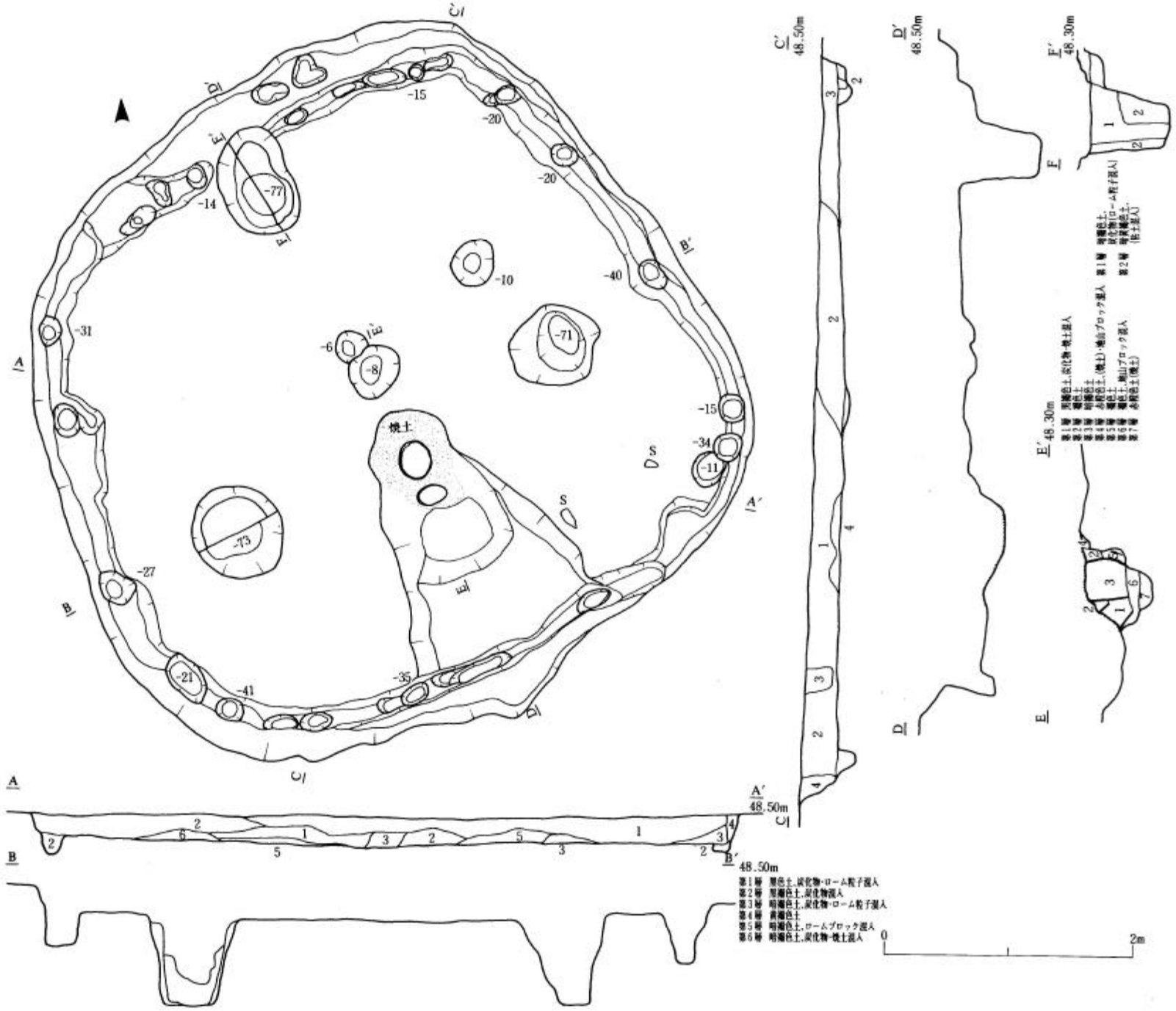
凹石（25・26・38）：礫の片面中央部を凹ませたものや、38のように両面を凹ませたものがある。

石皿（32・43・44）：石皿の破片である。44は脚部を有する。

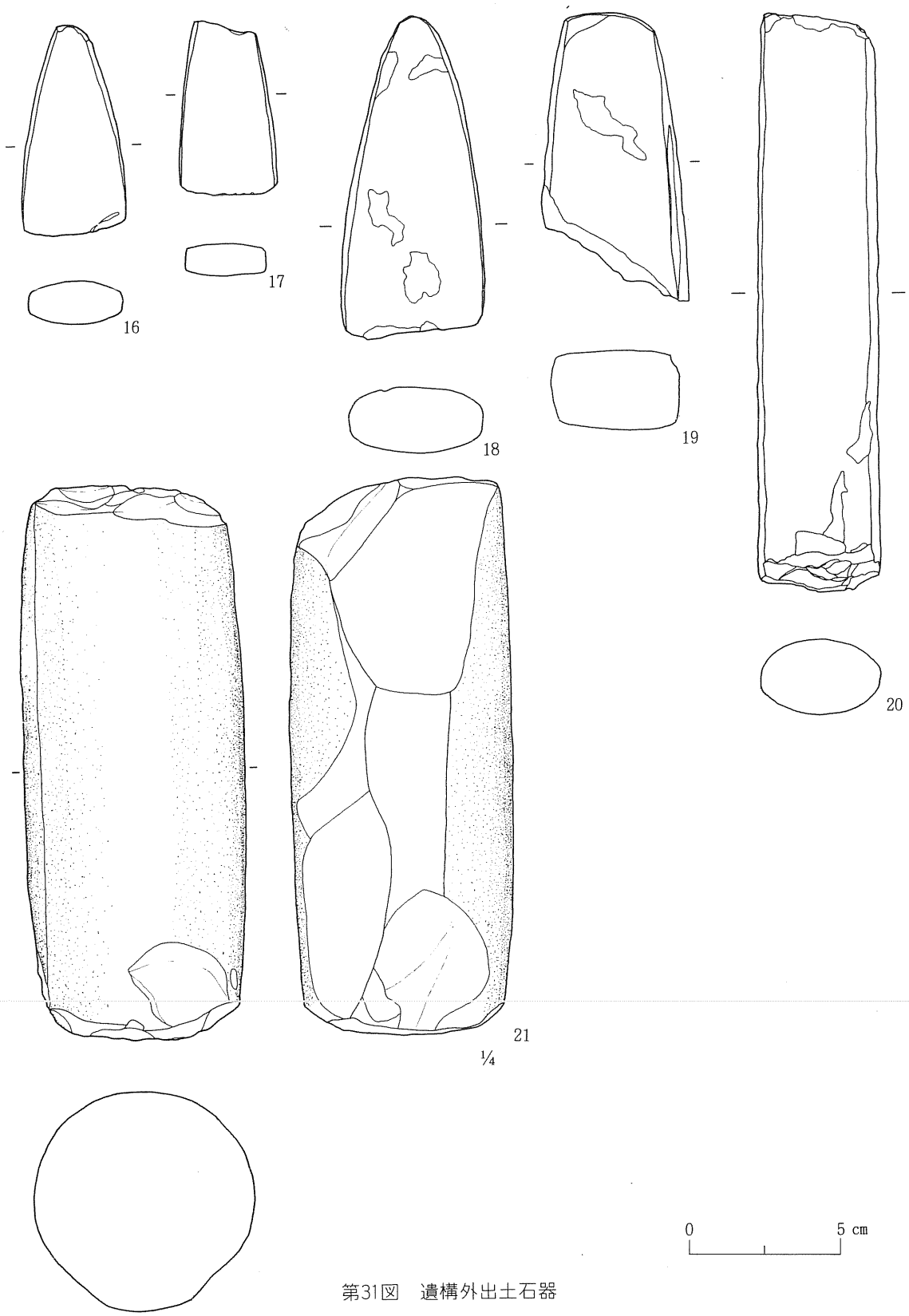
石冠（45）：断面が三角形を呈する石冠である。全体に磨かれているが、側・裏面に擦痕がみられる。



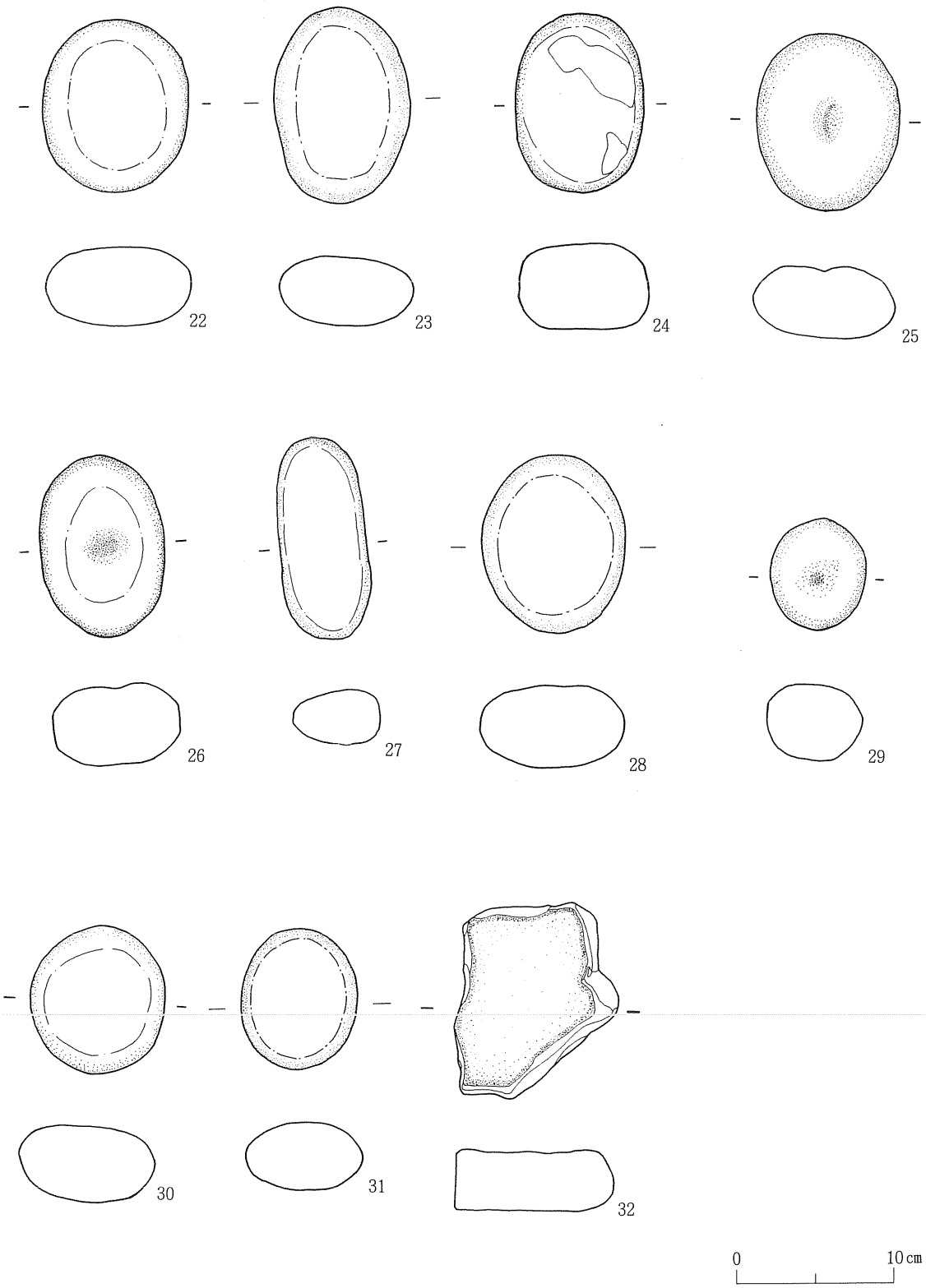
第30図　遺構外出土石器


焼土
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
48.50m
48.30m
第1層 黒色土,炭化物・焼土混入
第2層 暗褐色土,炭化物混入
第3層 暗褐色土,炭化物・ローム粒子混入
第4層 黄褐色土
第5層 暗褐色土,ロームブロック混入
第6層 暗褐色土,炭化物・焼土混入
0
2m

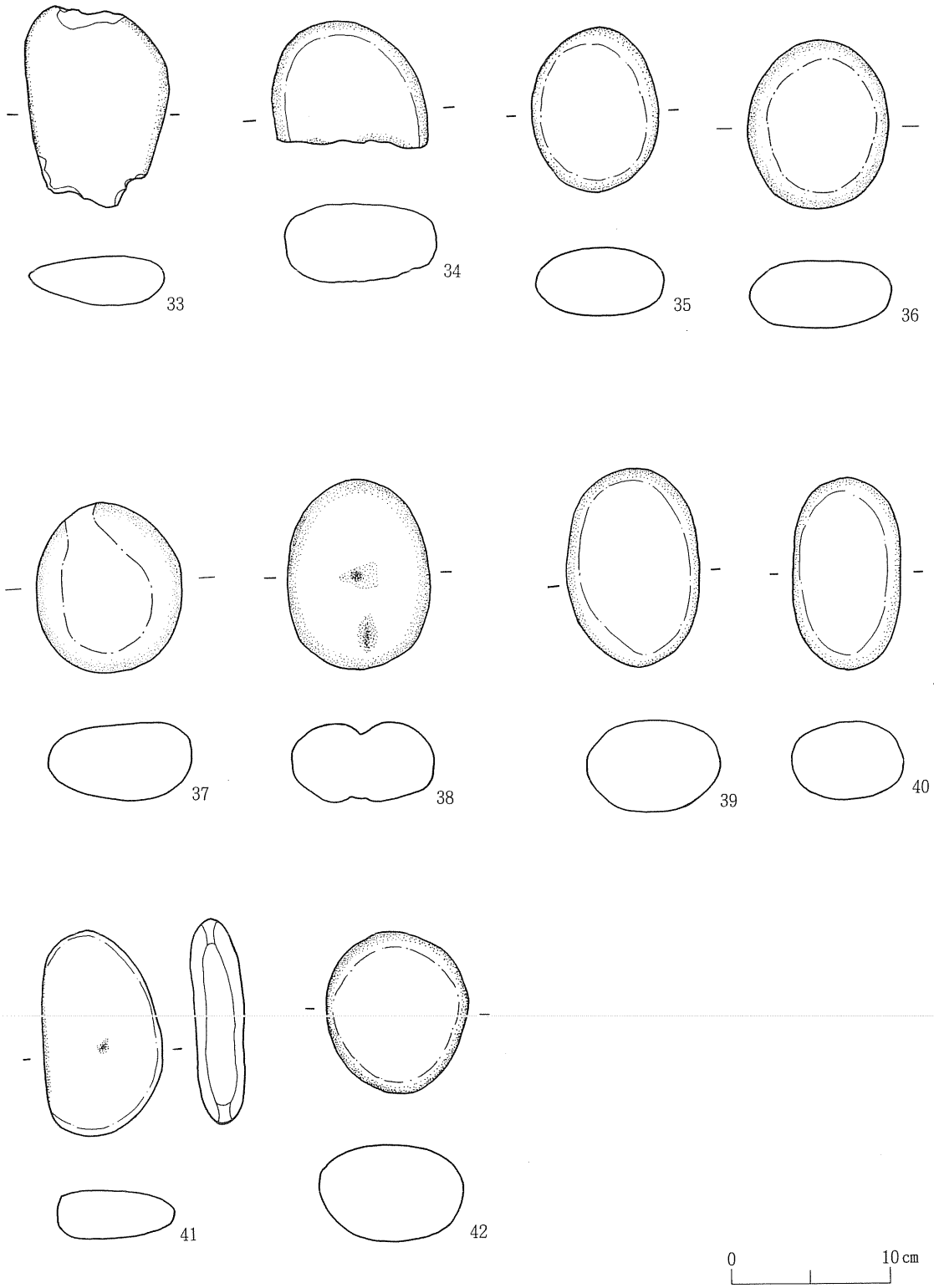
第5図　3号住居跡



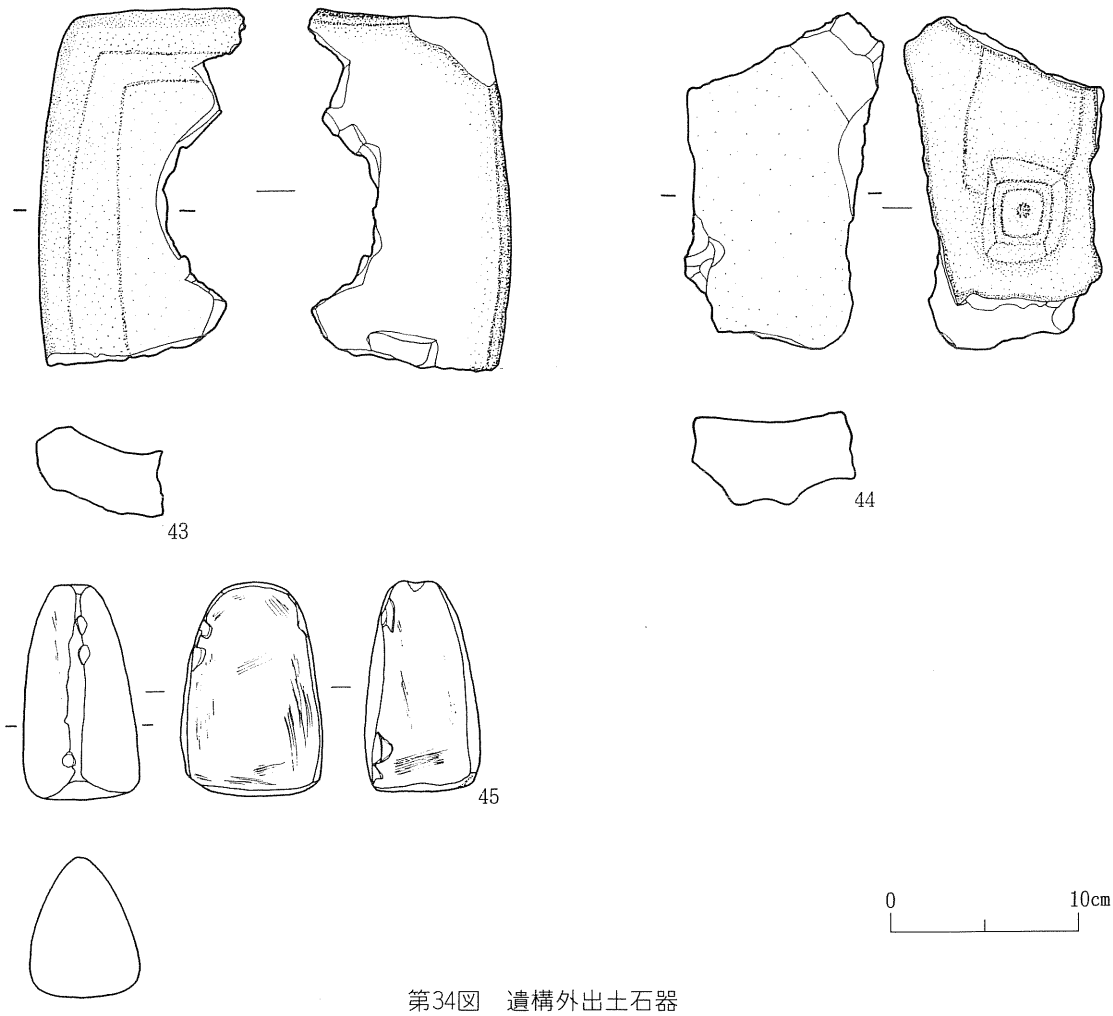
第31図　遺構外出土石器



第32図　遺構外出土石器



第33図　遺構外出土石器



第34図　遺構外出土石器

まとめ

住居跡について

本遺跡では東から入り込んだ沢の南側台地に９軒の竪穴住居跡を検出した。

竪穴住居跡の時期については、炉埋設土器および床面出土の土器を年代決定の決め手とするならば、１・２・３・４・７・９号住居跡は大木10式期、６号住居跡は大木８ａ式期に位置づけられる。５・８号住居跡については時期は不明である。

大木８ａ式期の住居跡は南北に長い楕円形のプランを呈し、炉は浅い掘り込みをもつ地床炉からなるものである。大木10式期の住居跡は円形・楕円形・台形のプランを呈し、周溝をめぐらすものもある（３・４・９号住居跡）。

炉は地床炉と複式炉がある。地床炉をもつ住居跡は５・６号住居跡で、いずれも浅い掘り込みをもつ。複式炉は次の３タイプに分類される。

①石囲土器埋設部＋石組部＋掘り込み部（９号住居跡）

②土器埋設部＋掘り込み部＋掘り込み（１・３・７号住居跡）

③土器埋設部＋掘り込み部（２・４号Ａ住居跡）

３・４号住居跡の炉には作り変えが認められる。３号住居跡は同位置で複式炉を作り変え、４号住居跡ではそれぞれ位置を変えて作り変えている。すべてに埋設土器があり、３号住居跡では土器型式の差は認められないものの文様展開に差異が認められる。４号住居跡でも土器型式の差は認められない。いずれの住居跡でも炉埋設土器に型式上の差は認められないが、文様展開には若干の差異が認められる。しかし、炉の作り変えにおける時期差には大きな相違はないものと考えられる。

出土土器について

本遺跡から出土した土器は、数量にして整理用コンテナで10数箱ほどである。器形は深鉢形土器が主体をなし、鉢形土器、壺形土器などが若干出土した。ここでは先に施文様から群に、器形から類別した土器の時期について考えてみたい。

１群土器は北陸系の土器で深鉢形土器が主体をなし、半隆起線を主体とするものが多い。これらは昭和59年度に調査が行なわれた坂ノ上Ｆ遺跡出土の北陸系土器群の中での２群土器（口縁部に縦位半隆起線文を施すもの）に対比できるものと考えられる。(註１)この土器群は石川県鹿島郡「徳前Ｃ遺跡」の第３群土器に該当するもので、縄文時代中期初頭に位置づけられる。２群土器は深鉢形土器が主体をなし、突起を有し粘土紐貼付による橋状の把手を有するものや、単軸絡条体圧痕を施すものなどがあり、これらは円筒上層ａ式期と考えられる。(註２)３群土器は深鉢形土器が主体をなし、粘土紐貼付による隆帯に撚糸圧痕を施すもので、隆帯間には擬似爪形文、撚糸圧痕文が施される。円筒上層ｂ式期と考えられる。４群土器は深鉢形土器で、細い粘土紐貼付によって区画し、区画内に竹管状工具による円形刺突文が施される。円筒上層ｃ式期と考えられる。５群土器は深鉢形土器を主体とし、口縁部に粘土紐貼付による隆帯をめぐらし、２条の隆帯を垂下するもの、懸垂状に垂下させるものなどがあり、隆帯上に竹管状工具による刺突文が施されるものもある。大木７ａ式期と考えられる。６群土器は波状口縁をもち、口縁部が外反する深鉢形土器で、口縁部と頸部に沈線をめぐらし、頸部は２条の隆帯がまわり、隆沈線を形成し、沈線間には渦巻文が配される。大木８ａ式期と考えられる。７群土器は深鉢形土器が主体をなし、隆帯や沈線によって渦巻文、区画文、懸垂文などが施される。大木９式期に比定される土器群と考えられる。８群土器は本遺跡出土の土器の中で量的に最も多いものである。深鉢形土器が主体をなし、沈線区画と磨消し帯による曲線的な文様をなす土器で、沈線あるいは隆線によって「Ｓ」・「Ｊ」・逆「Ｃ」字状などが展開される。大木10式期に位置づけられる。９群土器は縄文時代後期の土器で、沈線による連鎖状文が施されるものなどがある。

（註１）秋田市教育委員会「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1985

（註２）石川県立埋蔵文化財センター「鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告書(Ⅳ)」1983

参　考　文　献

秋田市教育委員会：「小阿地下堤遺跡 坂ノ上遺跡発掘調査報告書」　1976

秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」　秋田県文化財調査報告書第63集　1979

秋田県教育委員会：「内村遺跡発掘調査報告書」　秋田県文化財調査報告書第92集　1981

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」　下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡　1983

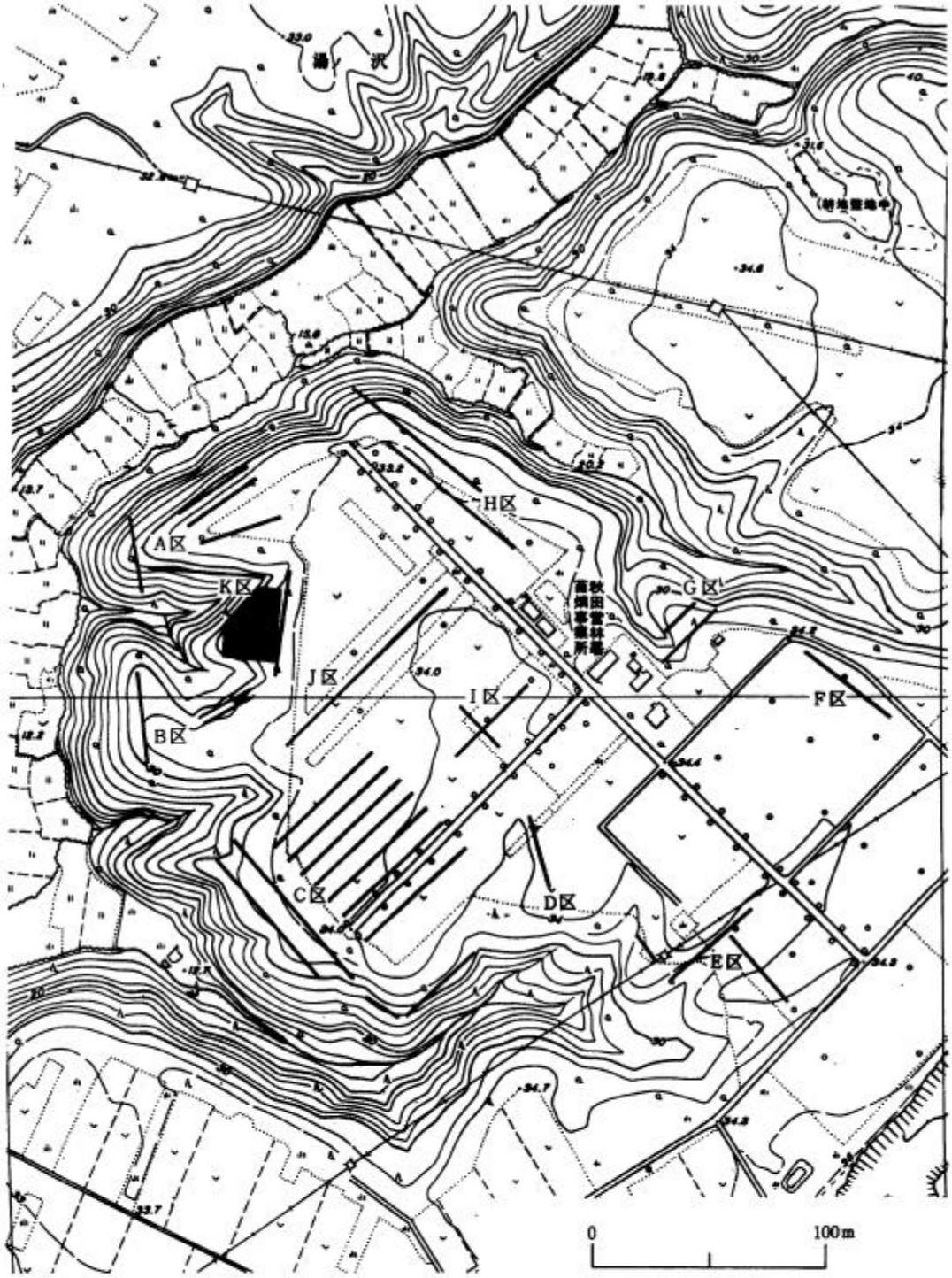
石川県立埋蔵文化財センター：「鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告(Ⅳ)」　1983

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」　坂ノ上Ｅ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｃ遺跡、湯ノ沢Ｅ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡、野形遺跡　1984

鹿角市教育委員会：「天戸森遺跡発掘調査報告書」　鹿角市文化財調査資料26　1984

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」　下堤Ｅ遺跡、下堤Ｆ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、狸崎Ａ遺跡、湯ノ沢Ｄ遺跡、深田沢遺跡　1985

湯ノ沢Ⅰ遺跡



第1図　遺跡周辺の地形

遺跡全景（東→）

遺跡全景（東→）

図版 1

1号住居跡（西→）

2号住居跡（北→）

図版 2

3 号住居跡（南→）

4 号住居跡（南西→）

図版 3

5号住居跡（西→）

6号住居跡（西→）

図版 4

7号住居跡（北→）

8号住居跡（南→）

図版 5

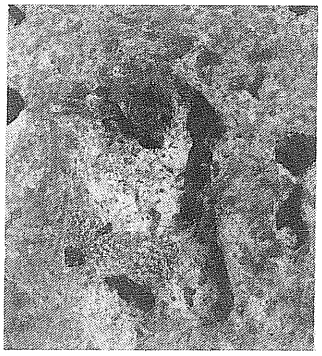
9 号住居跡（北東→）

1 号住居跡炉

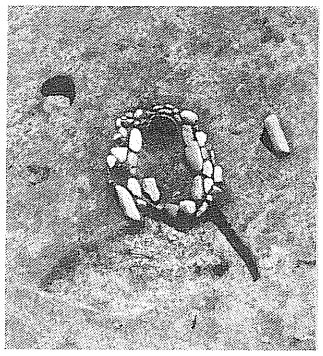
2 号住居跡炉

3 号住居跡炉

4 号住居跡炉



7 号住居跡炉

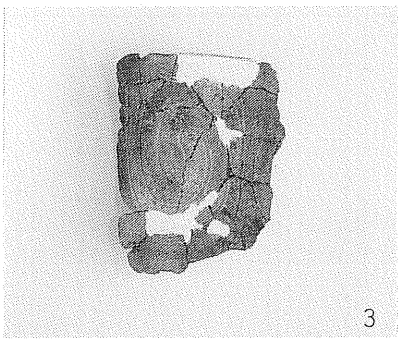


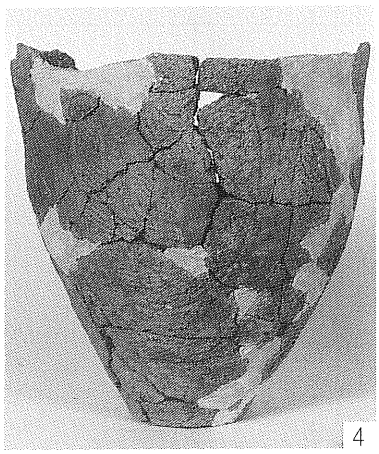
9 号住居跡炉

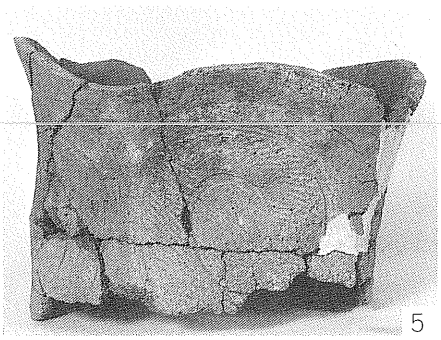
図版 6

1

2

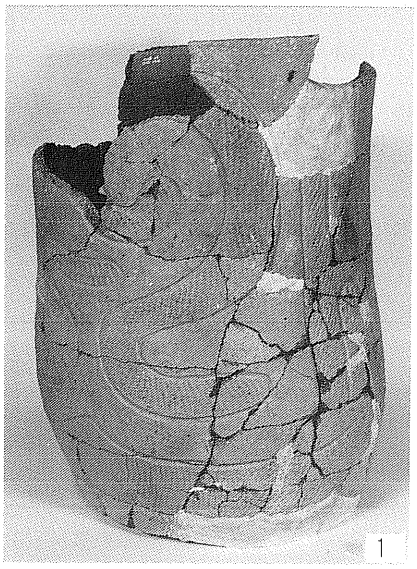

3

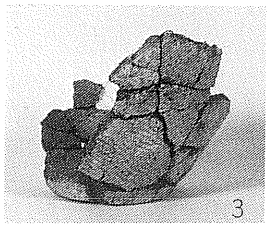

4

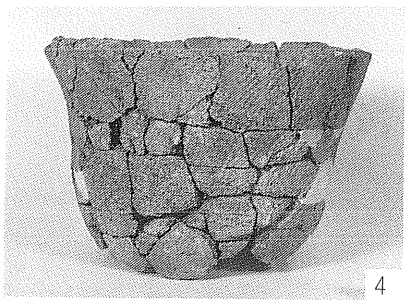

5

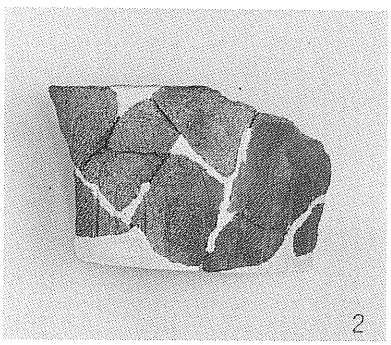
1～3　1号住居跡
4　2号住居跡
5　3号住居跡

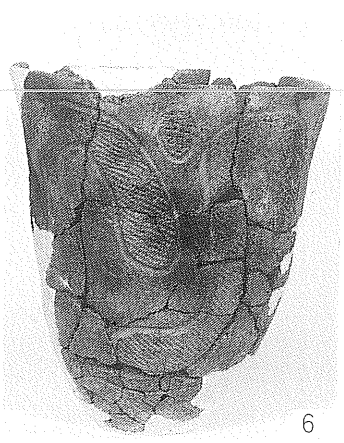
図版 7





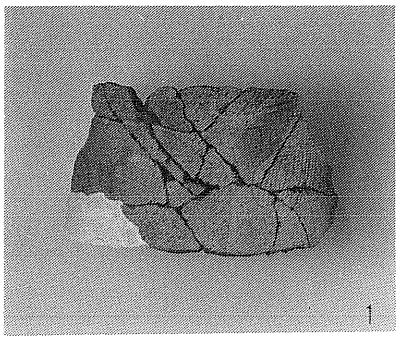


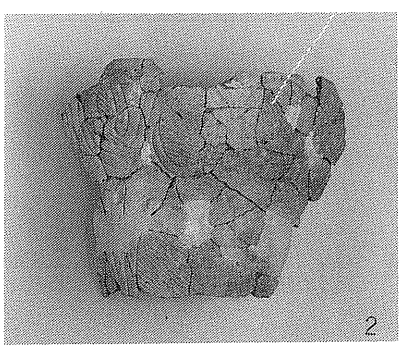


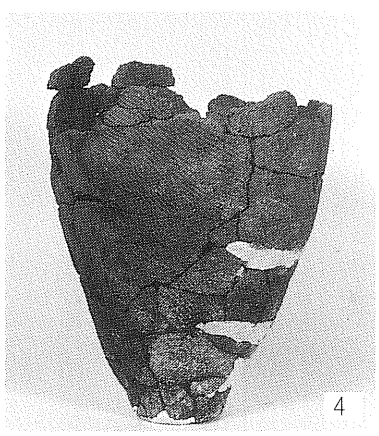


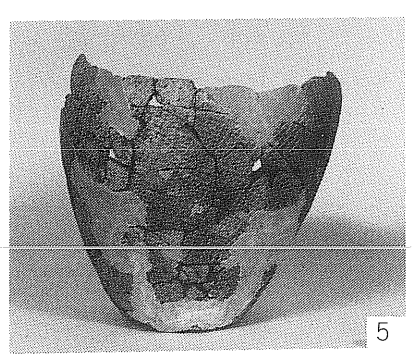
1～2
5～6 ］ 3号住居跡
3～4　4号住居跡

図版 8



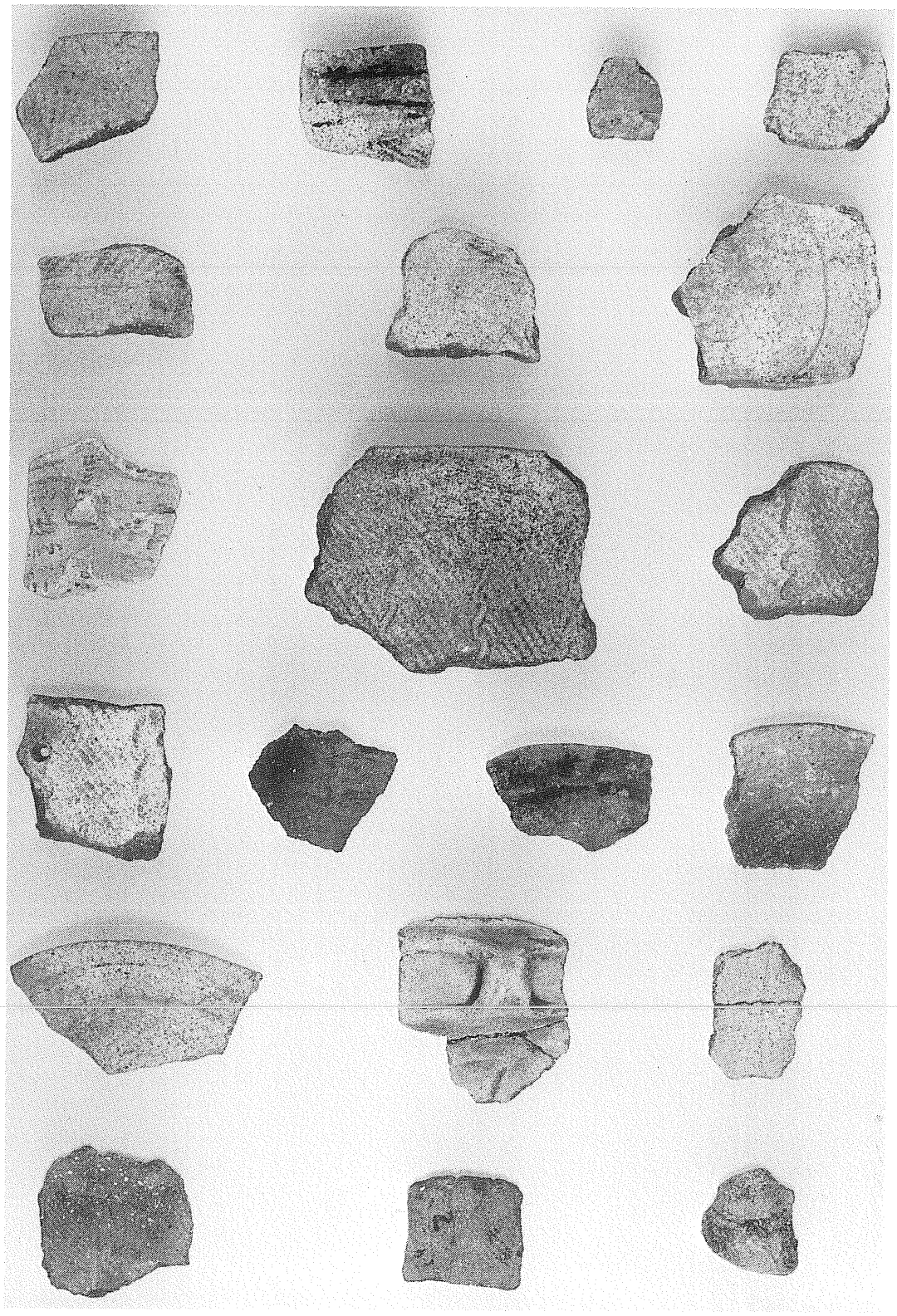




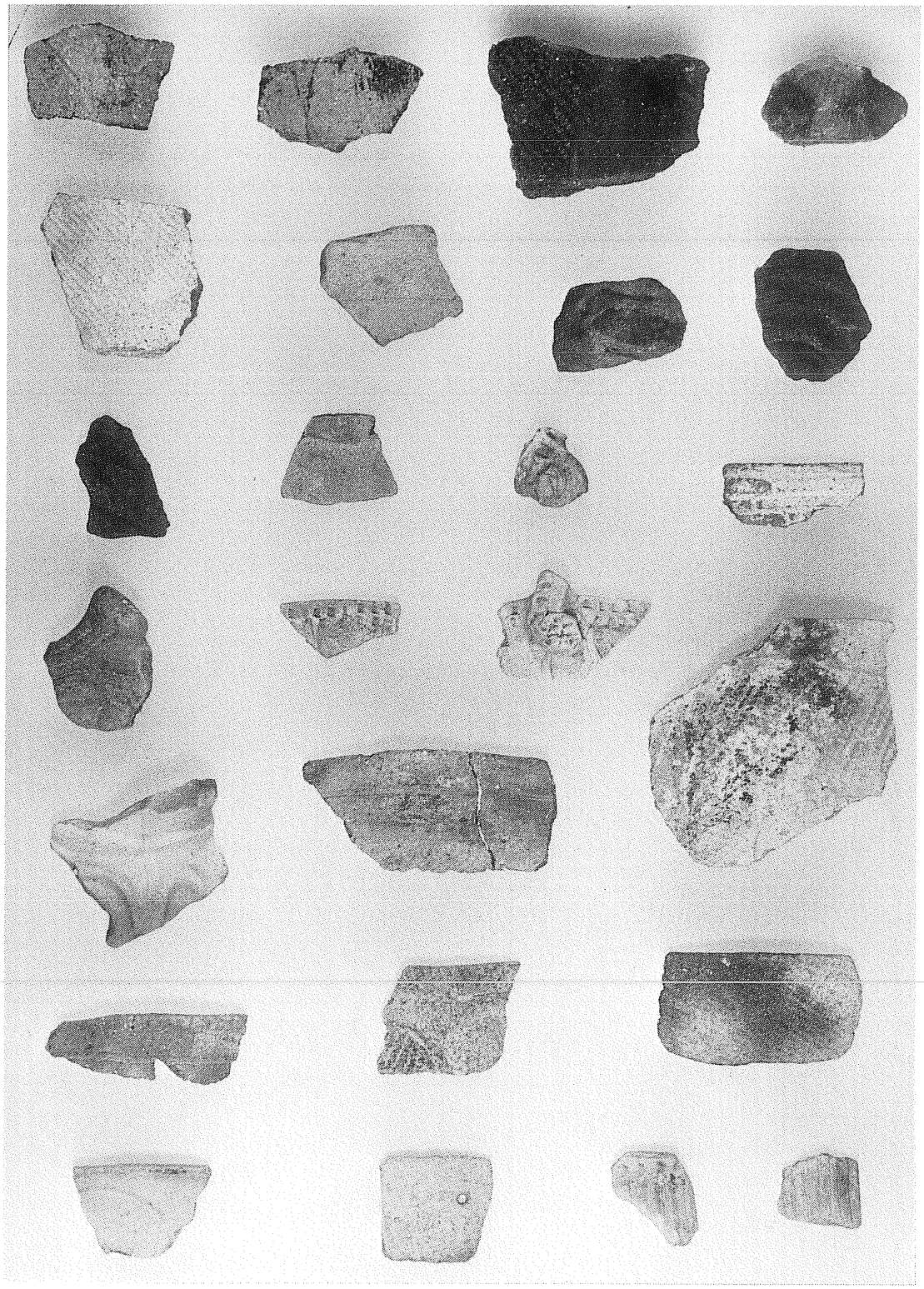


1～3　4号住居跡
4　7号住居跡
5　9号住居跡

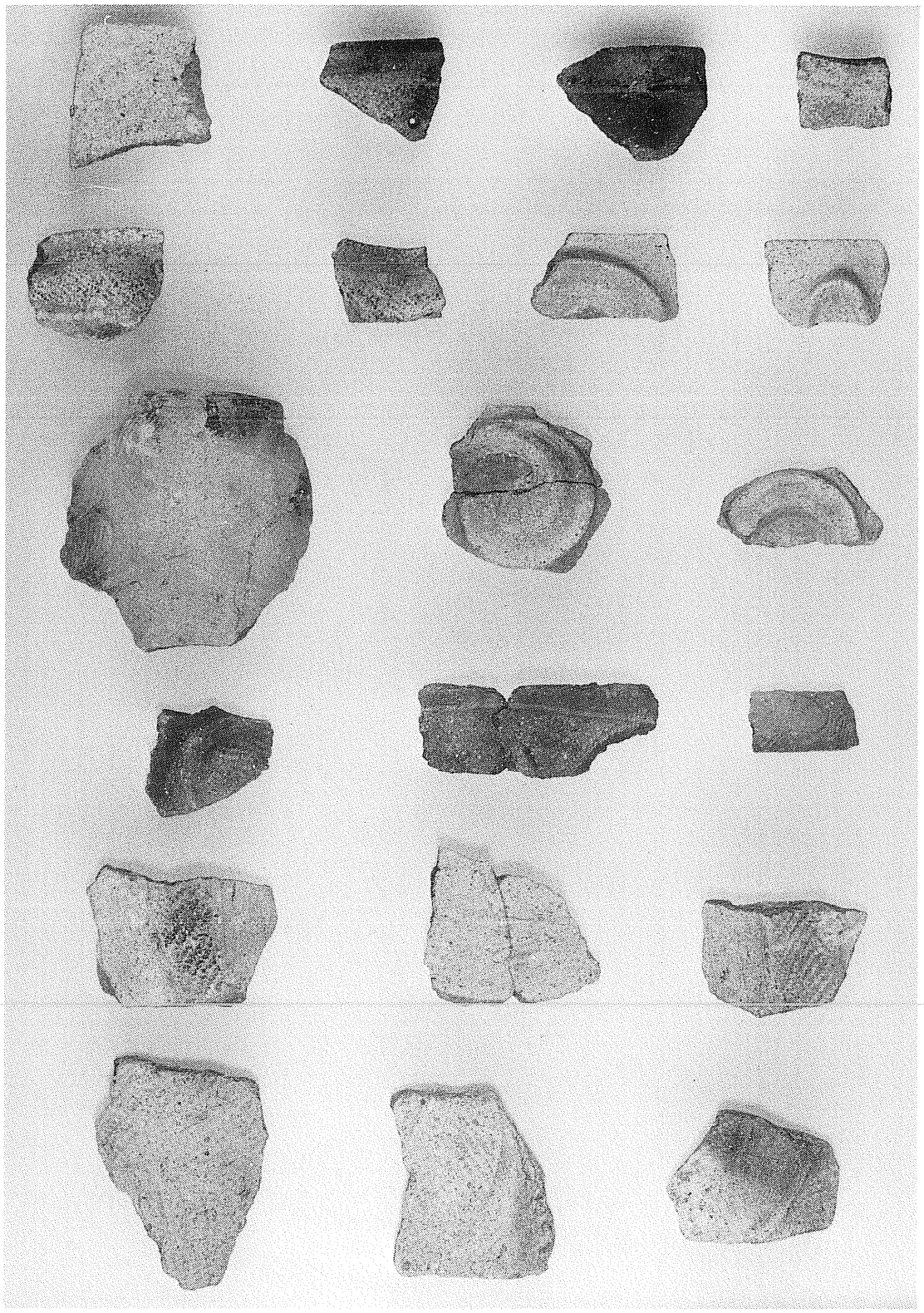
図版 9



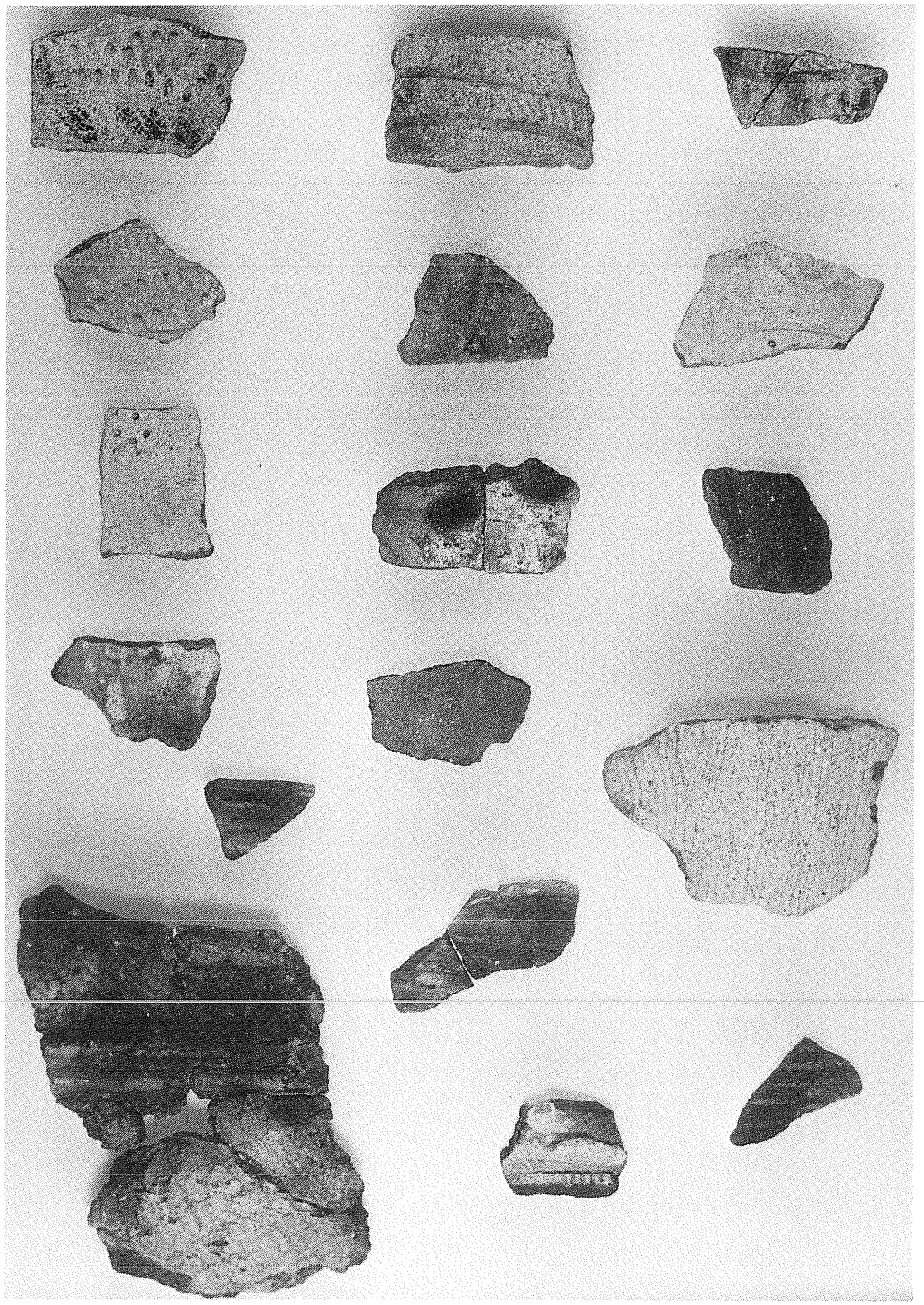
図版10　遺構内出土土器



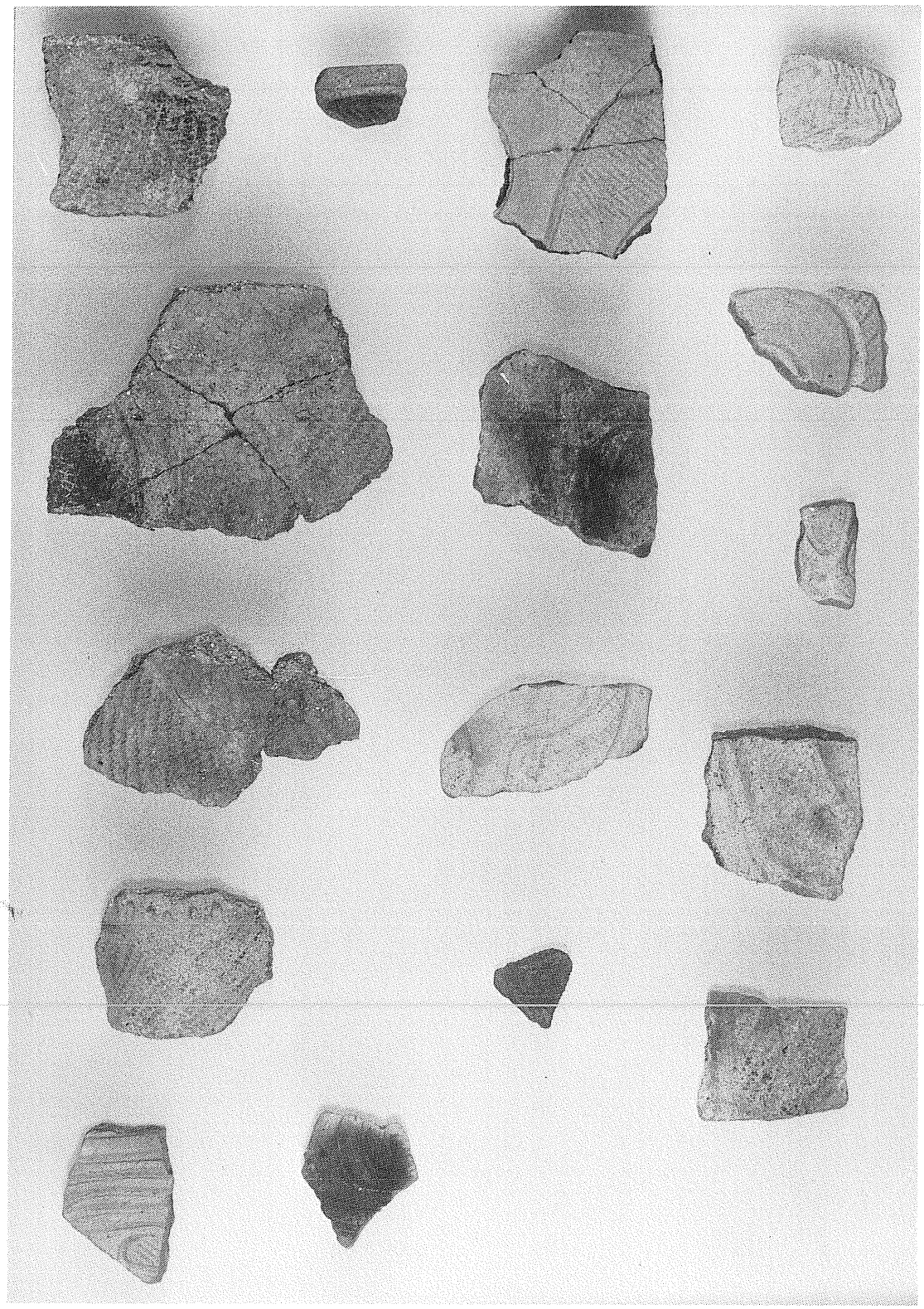
図版11　遺構内出土土器



図版12　遺構内出土土器

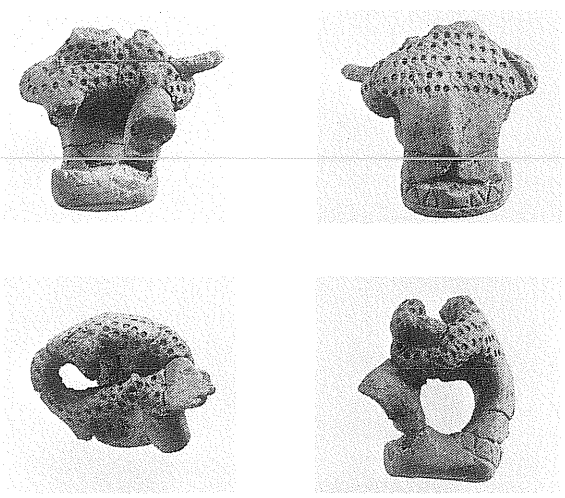


図版13　遺構内出土土器



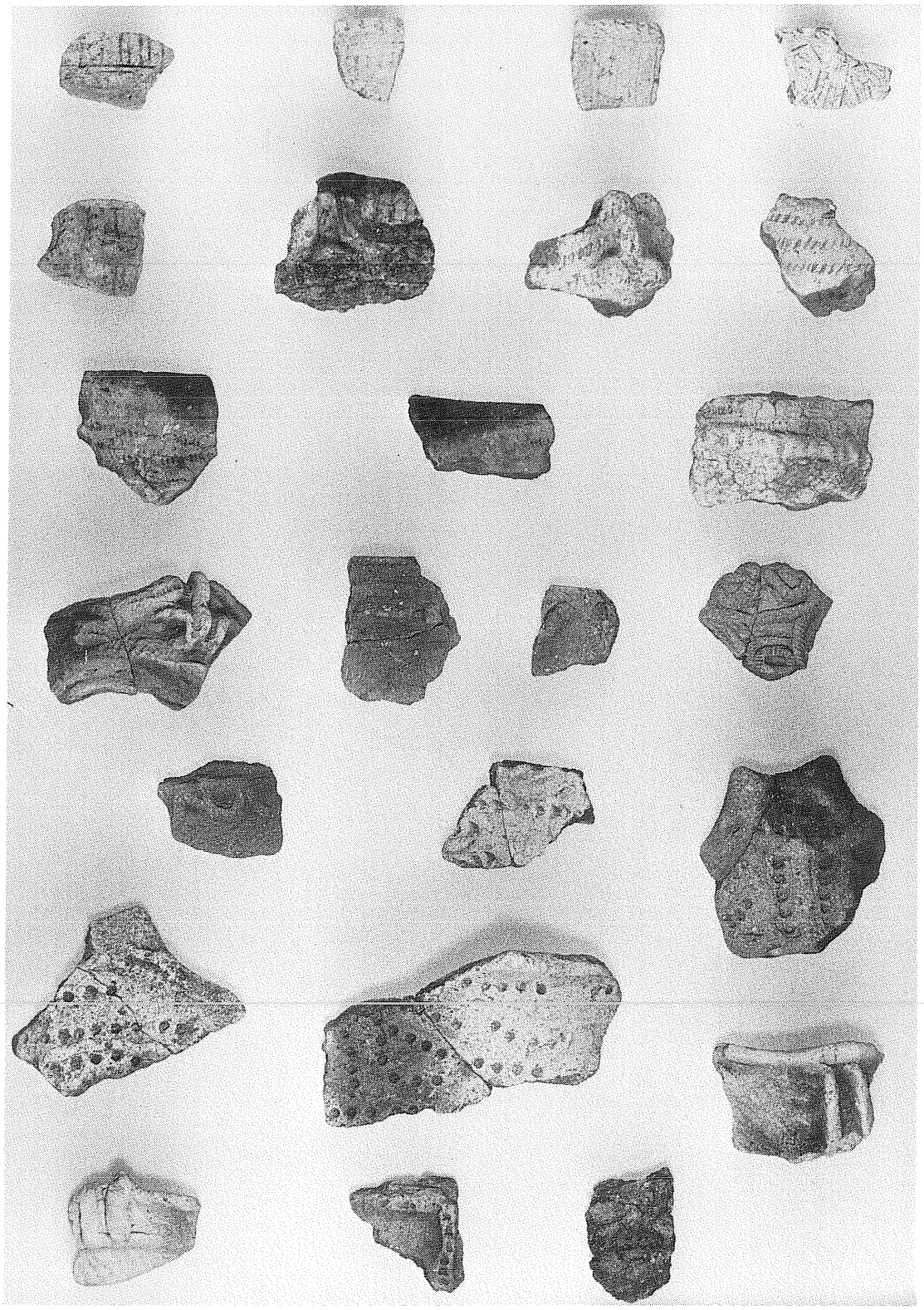
図版14　遺構内出土土器

遺構内出土土器

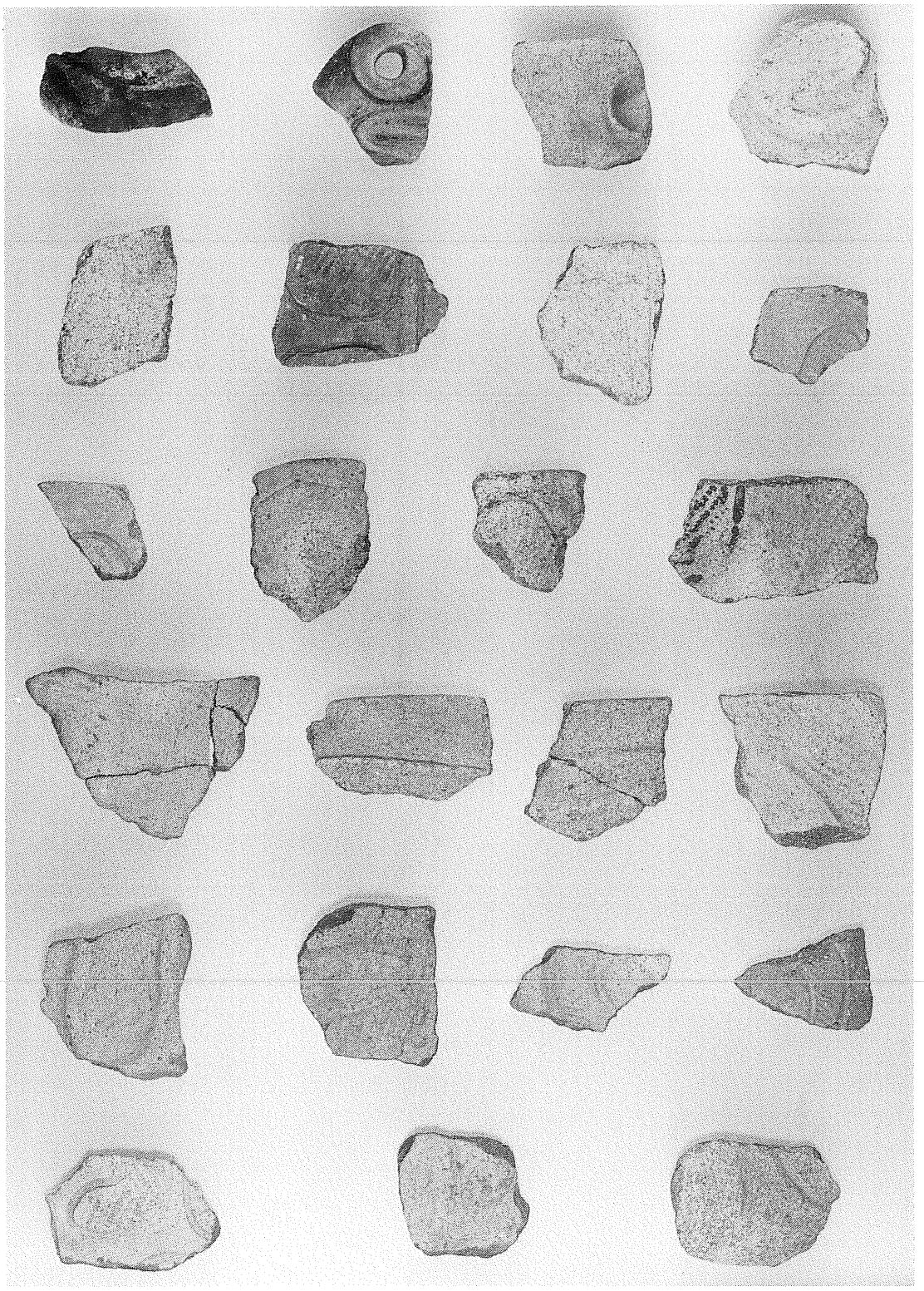


遺構外出土土製品

図版15



図版16　遺構外出土土器



図版17　遺構外出土土器